
聖灰の輪舞曲

長月とおな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖灰の輪舞曲

【Nコード】

N0853Q

【作者名】

長月とおな

【あらすじ】

あなたは、私から全てを奪って、そして私に全てを与えてくれた人――

6年前、雪の日。記憶を失った少女は、最強の魔道士に拾われ、その弟子となる。優しき師に見守られ、成長した少女に師は愛を求めた。だが、少女の前に、彼女の過去を知る謎の男が現れ、囁く。「あいつはお前が思っているような奴じゃない――」

先生、あなたは一体何を隠しているの――？

※タイトルの読み方は「せいはいのロンド」です。

1 はじまりの日

なぜだかはわからないけれど。

あたたかい涙が、冷たく冷え切った頬を伝う。

その涙を拭うように、冷たい誰かの指が頬を撫でた。

ゆつくりと瞼を開くと、ぼんやりした視界に、若い男の心配そうな表情と、その背後に灰色の空があった。

「よかった。気がついたんだね」

男はほっとした様子で微笑む。男の腕に背を支えられる形で横になっ
ていることに気づき、自力で起きようとするが、力が入らない。
なんだか頭がぼんやりする。

「急に動いちゃだめだ。ずっと気を失ってたんだから」

気を失って・・・？

男の言葉に首だけ回してあたりを確認すると、一面の雪景色だった。顔を下に向けると、小さな手が、雪の上で投げ出されていた。力を入れると微かに動いたので、それが自分の手だとわかった。感覚がない程冷え切っているようだ。自分を抱える男に視線を戻して尋ねる。

「ここは・・・？」

戸惑う自分を、男はじっと見つめてくる。綺麗な紫色の瞳だった。

「ここはカロンの村のはずれだよ。君の名前は？」

問われて考える。名前……

「……わからない。おもいだせない……なにも……」

目覚めた以前の記憶が、何も思い出せなかった。なぜ自分はこんなところに倒れているのか？

「何も？　そうか……」

男は一瞬目を見張ったが、すぐに微笑みを深くした。満足げにすら見える。

「大丈夫。何も心配いらないから」

男に背と、両足を抱えあげられる。おそろおそろ、男の首に手を回す。男はにっこり笑った。人の良さそうな、優しい笑顔。息がかかるほど近くに。どきんと心臓が跳ねた。思わず目をそらす。

男はゆっくりと歩き始めた。さくっ、さくっ、雪を踏みしめる音が響く。目の前で、男の銀色の髪が揺れていた。鼻筋の通った、綺麗な横顔。

白いローブをまとったこの人は、もしかして雪の精なのだろうか？

「あなたはだれ？」

「シグルト様！」

答えを得る前に、遠くから叫ぶ声が聞こえた。向こうから、黒いローブをまとった男が走り寄ってくる。

「シグルト様、その子供は・・・？」

男に訝しげな視線を向けられ、思わず身を固くする。

「村の子供だと思いますが、争いに巻き込まれたらしく、ここで倒れていました。連れて帰ります」

シグルトと呼ばれた男はよどみなく答える。

「は、はあ・・・」

尋ねた男は、どう反応してよいかわからないといった様子だったが、さらに問いを重ねてくる。

「それで、あの、任務は・・・？」

「終わりました。灰くらいは残っているかもしれませんが。後は頼みます」

淡々とした、感情のこもらない答え。だが、それを聞いた瞬間、黒ローブの男の目に怯えと恐怖の色が走った。男は一礼すると、そそくさと走り去っていく。

「しぐると・・・？」

「そう、それが私の名前です」

「なまえ・・・」

「君にも名前が必要だね」

シグルトはしばらく思索していたが、やがて、

「まあ、帰ってからゆっくりと考えましょうか。時間はたくさんあるのだから・・・」

そう言って、再び歩き始める。

シグルトの肩越しに、後ろを振り返った。

真っ白な景色の中で、灰色が舞った気がした。

1 はじまりの日（後書き）

初小説です^^；
宜しくお願いします。

2 リシエル

「先生！ 起きてください！ 朝です！」

少女の声が、薄暗い部屋に響き渡る。

灰色のローブを着た少女が、部屋のカーテンをさっと一気に全開にする。朝の日差しが差し込み、少女の長い黒髪と、薄紅色の瞳を柔らかく照らし出す。

「ほら、すっごくいいお天気！ 仕事日和ですよ！」

大きな天蓋付きベッドの上で、ふとんが生き物のように身じろぎする。実際その中に生き物がいるのだが。

「先生！」

少女の怒鳴り声に、観念したようにふとんの端から、のっそりと人間の頭が現れる。

「おはようございます。シグルト先生」

「おはよう・・・リシエル・・・今日も元気だね」

ふとんから突き出た頭は若い男のものだった。柔らかそうな白銀の髪には寝ぐせがつき、紫色の瞳は、重い瞼で今にも塞がれそうだ。

「先生、また夜更かしされてたんですね」

リシエルと呼ばれた少女は、呆れたように床に広げられた数冊の

本を見やる。

「しかも魔術の本かと思えば、相変わらず恋愛ものばかり・・・」
散らばった本はほとんどが、王都の年頃の少女たちに流行っている恋愛小説だった。

「読みたければ貸してあげますよ。ほら、それなんか、すごくお勧めです。貴族学院の教師と女生徒の禁断の愛を描いてて・・・」

「結構です。それより、仕事に遅れますよ」

「・・・つれないねえ・・・君は・・・」

シグルトは苦笑すると、のそのそと布団から這い出る。

「今日は定例会議なんですから、遅れないようにしないと」

リシエルはクロゼットから濃紺の生地に銀糸の刺繍の施されたローブを取り出すと、シグルトに手渡す。

「私がいなくても、会議なんかできますよ」

げんなりした様子でローブを受け取るシグルト。

「これがわが国が誇る最高位の魔道士かと思うと、この国の将来が不安になりますね」

リシエルは遠慮なく言って、ため息をつく。

「早く着替えてくださいね」

「はいはい」

やる気のない師の返事を背に、リシエルは部屋を出た。

毎朝繰り返される、師との他愛ないやり取り。6年前、10歳で師に拾われてから、これがリシエルの日常となった。

6年前、カロンの雪山で倒れていた自分を、シグルトは助けてくれた。そればかりか、記憶を失くし、出自もよくわからない自分を、弟子として引き取ってくれさせた。それ以来、王都ルガルトにあるこの家が、リシエルの家になった。

記憶は未だに戻っていない。シグルトによると、6年前に起こった、辺境の村カロンに潜んでいた反乱軍と国王軍の争いに巻き込まれて、頭を打ったか、精神的なショックを受けたかで、記憶を失ったのだろう、との話だった。国王軍側の魔道士として参戦していたシグルトが偶然見つけてくれなかったら、あのまま雪山で死んでいたらに違いない。

リシエルは階段を下り、廊下の窓から庭先を見た。小さな花が、花壇一面に咲いている。少女の瞳の色と同じ、薄紅色のかわいらしい花。シグルトが好きな、リシエルという花だ。名前すら失くした自分に、師はこの花の名を与えてくれた。

「花、満開ですね」

いつのまにかシグルトが、濃紺のローブに着替えて、後ろに立っていた。寝癖もきれいに直っている。

「日差しもぽかぽか、こんな日はのんびり二人で花を愛でながらお茶でも・・・」

「駄目です」

リシエルはシグルトの腕を掴むと、玄関先で待機している馬車へと押し込む。

「え？ 朝食もなし？」

「遅れますから。あ、出して下さい！ エテルネル法院まで急いで！」

リシエルの声に、馬車が走り出す。

「朝食を食べないと頭が働かないんですよ〜」

馬車の中。恨めし気に文句を言うシグルトに、リシエルは持ってきた包みを差し出す。

「サンドウィッチ、作ってきました。お城に着くまでに食べてください」

「おお、さすが、用意がいいですね〜」

シグルトは感嘆の声をあげ、包みからサンドウィッチを取り出すと、早速頬張る。

「うん、おいしい！ 君はほんといいお嫁さんになれますよ」

卵や野菜を挟んだだけの、簡単なものだったが、シグルトは大きさに賞賛してくる。

「私はお嫁さんじゃなくて、魔道士になりたいんですけどね」

リシエルは精一杯嫌味に見える様、シグルトの目をじっとりと睨む。

「先生、私、来月で16になります」

記憶のないリシエルは、当然自分の誕生日も覚えていない。だが、シグルトはリシエルを拾ってくれた日を、毎年誕生日として祝ってくれていた。その5回目の日が、来月なのだ。

「ええ、成人のお祝いならちゃんと考えてますよ」

「そうです、成人です。大人です」

成人と大人、という単語に力を込める。

シグルトはそんなリシエルを眩しげに見、うっとりした様子で呟く。

「あんなに小さかった君ももう16・・・なんかドキドキしちゃいますね。16歳の可愛い弟子と一つ屋根の下って・・・何かが起こりそうな予感・・・」

「何も起こりませんよ！ つまらない恋愛小説の読みすぎです！」

赤くなって否定するリシエルを、シグルトは心底おかしそうに見

ている。こんな風に、師はいつも弟子をからかって遊んでいるのだ。

（先生のペースにのまれてたまるもんですか！）

リシエルは身を乗り出し、薄紅色の瞳にしっかりと師を捕えながら言った。

「先生、私、来月成人するにあたって、先生にお願いがあります。前々から言ってることですけど――」

「おや、奇遇だね。実は私も、君が来月成人したら、君にお願いがあるんです。とても大事なお願いがね」

シグルトは最後のサンドウィッチを口へ放り込む。

「へ？なんですか？」

思いがけない言葉に、話を遮られたことも怒れず、問い返す。シグルトはサンドウィッチをゆっくり味わい、飲み下した後で、まるで悪戯を企む子供のように、にやりと笑った。

「成人したら、と言ったでしょう？ 楽しみにしてなさい」

その時、馬車が止まった。

「着きましたね。ギリギリ間に合った。急がないと」

御者が馬車の扉を開き、降りるシグルトに慌ててリシエルも続いた。

3 エテルネル法院

目の前に、天に届かんばかりにそびえ立つ、巨大な白亜の塔があった。

その巨大な塔を中心として、やや小さい塔が六本、その周りを取り囲んでおり、さらにそれらの塔を守るように、強固な石の壁がぐるりと巡らされている。

それぞれの塔の上には、星を象った紋章を記した旗が風を受けて翻っていた。

エテルネル法院。

ここロジアルディア大陸で最大規模を誇る、魔道士たちの組織。大陸には魔道研究、魔道士育成を目的とした、魔道士を束ねる組織がいくつか存在するが、このエテルネル法院は政治経済に与える影響も他とは比べものにならない、一大勢力である。

師に付いてここへはもう毎日のように足を運んでいるというのに、この塔の持つ威容に、リシエルはいつも怯んでしまう。

対照的に、シグルトは濃紺のローブを翻し、何の躊躇もなくすたすたと塔の入口へと向かう。

リシエルも遅れまいと小走りで師の後を付いて行った。

どんな巨人も通れるであろう巨大な入口の門は開かれており、門番がシグルトを見て丁寧に一礼する。

門を通ると中央の塔に向かって石畳が敷かれており、その上をシグルトとリシエルは進んでいく。

その途中、そして塔の中へと入った後も、道行くローブ姿の魔道士たちが、シグルトとすれ違う度、道を開け、頭を下げる。

自分にされているのではないとわかっていても、後ろについて行くリシエルはなんだか恐縮してしまう。

シグルトは、このエテルネル法院を統べる最高位の魔道士、六導師の一人だ。

世界中の魔道士たちの畏怖と敬意の対象たる導師。

シグルトは中でも、若くしてその地位を得、六導師中最高の実力を持つとされる、国王ですら一目置く存在。

（とてもそうは見えないけど・・・）

リシエルの知るシグルトという男は、怠け者で、少女向けの恋愛小説を読みふけり、弟子をセクハラまがいの言動で困らせる、変人以外の何者でもなかった。

塔の奥へと進んだ先に、星や魔術文字等の細かい意匠を施された、一際目を引く両開きの扉があった。

その扉の前でシグルトは足を止め、振り返る。

「じゃあ行ってきますね。いつも通り、1、2時間で終わると思いますから、君は先に部屋に行って、書類仕事を済ませておいて下さい。今日は早めに仕事を終えて、君と行きたい所があるので」

「行きたい所？」

シグルトはリシエルの疑問に答えることなく、くすりと笑って、扉の奥へと消えた。目の前で扉が閉まる。

（またはぐらかされた）

リシエルは面白くなかったが、この扉の先で行われる、六導師の会議までついていくわけにはいかない。

六導師の会議に出られるのは、六導師と、その1番弟子のみ。

しかも16歳以上であることが条件だ。

シグルトはリシエル以外弟子を取っていないので、自動的にリシエルが1番弟子、ということになるが、年齢的に来月成人を迎えるまで、出席できないことになっている。

リシエルは扉を離れ、一人で歩き出す。

一人になった途端、すれ違う魔道士たちはリシエルなど、視界に入らないかのように通り過ぎていく。

いや、元々入っていなかったのだ。

彼らが敬意を払っていたのはあくまでシグルトのみであり、最初からリシエルなど眼中にない。

ごくたまに、リシエルに目を向ける者もいたが、送られてくる視線は決して好意的とはいえない、冷ややかなものばかり。

リシエルはうつむくと、そそくさと塔に入ってきた時と真逆に位置する扉から、外へと出た。

シグルトの執務室は、六つの小塔の中で一番北に位置する、通称“月の塔”の最上階にある。

リシエルは月の塔へと向かう途中、なんとなく脇へ逸れて、中庭へと向かった。

隅々まで手入れの行き届いた庭に、春の日差しが降り注いでいた。魔力によって、本来春には咲かないはずの花まで咲き乱れている。その上を蝶々がひらひらと舞っていく。

リシエルは、先ほど出てきた中心に位置する“天の塔”を見上げた。あの塔の最上階で、今頃シグルトは他の導師たちと会議をしている。

(…先生来月から私を会議に出席させるつもり、あるのかな?)

六導師に付き従い、会議に出るその意味は、つまり、その弟子こそがその導師の後継者である、ということを示す。師のすべての術を受け継ぐ後継者――

リシエルはため息をついた。

家に帰ったら、先生ときちんと話し合おう。

今度こそはぐらかされてはいけない。

大事なことなのだから。

リシエルが思いに耽っていると、不意に足元に何かが当たった。下を向くと茶色の子猫がリシエルの足に、体をこすりつけていた。猫には魔力があるとされ、魔道士の象徴のような動物である。そのため、法院内の至る所に猫が放し飼いにされている。

「お前、どうしたの？」

猫はリシエルを見上げると、にゃーとか細く鳴いた。

リシエルは可愛らしいその様子に表情を緩め、猫を抱き上げる。

だが、すぐに異変に気付いた。

猫の後ろ脚から血が滴っているのだ。

ざっくりと傷口が開いている。

どこかで引っかけたのだろうか。

「やだ、怪我しちゃったの？」

猫は潤んだ瞳でリシエルを見て鳴いている。

「ど、どうしよう？ 手当しなきゃ・・・医務室ってどこだっけ？」

「お前さー、魔道士でしょ？ 魔法使えばいいじゃない」

慌てふためくりシエルの後ろから、声がした。

3 エテルネル法院（後書き）

ああっ、お気に入り登録して下さっている方がいらっしやるゝ感動
（泣）

本当にありがとうございます！！

今回はちよつと説明文多くてすみません。。。

4 魔法

振り返ると、黒いローブを纏った少年が、馬鹿にしたような笑みを浮かべて立っていた。緩く波打つ、青味がかった髪。色白で、少女かと思間違える程、繊細で整った顔立ち。しかし、長い睫毛の奥にある青い目は冷ややかで、形のよい唇は嘲るように歪んでいた。

リシエルは思わず身を固くする。彼とは何度か面識があった。パリス・ユーメント。シグルトと同じ六導師の一人、ブラン・フィオーコの弟子。リシエルと同じ年だが、昨年魔術学院を若干14歳で首席卒業し、ブランの1番弟子となった秀才であり、若手で最も期待されている魔道士である。しかも、生まれは王家に連なる上級貴族であり、彼ほど華々しい将来を約束された人間も珍しい。

そんな彼は、リシエルに事あるごとに辛く当ってくる。実力も容姿も家柄も、すべてにおいてリシエルに勝るパリスが、彼女を嫌う理由はただ一つ。

リシエルがシグルトの弟子だからだ。

「ほら、その猫痛がつてるぞ？ 可哀想じゃないか。早く治してやりなよ？」

パリスが促してくるが、リシエルは、何も答えられなかった。もちろん治してやりたい。治してやりたいけれど――

パリスはリシエルが答えない理由をわかっている。わかった上で、ニヤニヤと笑いながら、彼女をいたぶるためにわざと言った。

「まさか、あのシグルト様の弟子が、その程度の治癒魔法も使えない、なんて言わないよね？」

リシエルは唇を噛んだ。

言い返すことはできない。事実そうなのだから。

シグルトの弟子となって、早6年。リシエルは、未だに一つの魔法も使うことが出来なかった。どんなにシグルトにせがんでも、教えてもらえなかったのだ。

まだ早い。

危ないから。

大人になってから。

そんな言葉でずっとはぐらかされてきた。唯一、薬草の知識だけは教えてくれたが、それも時たま気が向いた時だけで、ほとんどは独学だ。薬草学も広い意味で魔術の一分野ではあるが、リシエルが学びたいのは、瞬時に傷を治したり、天候を操ったりする魔術だった。それは独学で身に付く程甘くはない。

シグルトはこの国で最も高名な魔道士だ。その弟子が、魔法が一つも使えない、とはとんだ笑い話である。

そして、その笑い話はこのエテルネル法院の魔道士たちの間でも囁かれ、一部の魔道士たちがリシエルに向ける、冷ややかな視線の一因となっているのだ。彼らはまさか、弟子に6年間も何の訓練も施さない魔道士がいるなど、考えもしない。

導師の弟子であるのに魔法が使えないのは、あの娘にまったく才能がないからだろう——シグルト様もとんだ見込み違いをされたものだ。あるいは弟子というのは表向きのことで、実際には単なる困い者か何かなのでは——？

そんな陰口を耳にして泣いたことも、一度や二度ではない。

「なんだ、使えないの？ 呆れたな。お前何年シグルト様の弟子やってるんだよ？」

リシエルが言い返せないのをいいことに、パリスは責め立ててくる。

「お前ってシグルト様の何？ 単なる小間使い？ ああ、それとも…」

綺麗な顔に、酷薄な笑みが浮かんだ。

「物珍しいペットか？ お前の黒髪珍しいもんな。カラスみたいで…うらやましいよ。僕もそんな髪の色だったらシグルト様に弟子にしてもらえたのかな？」

「私はっ…そんなんじゃない！ 先生の…弟子…だもの…」

なんとか言い返したものの、最後のほうは声が小さくなってしまふ。自分は本当にシグルトの弟子なのか。何も教えてもらえないのに——自分自身でも自信がなくなっていた。

言い返したことが気に障ったらしく、パリスは笑みを消し、目を吊り上げた。

「何が弟子だよ。魔法も使えないくせに。お前のことシグルト様の弟子だなんて誰も認めてないぞ」

そんなことはリシエルにも痛い程わかっていた。導師の弟子は、いずれ師の後を継ぎ、次の導師としてエテルネル法院を率いていく立場にある。プライドの高いエテルネル法院の魔道士たちが、魔法も使えない人間を自分たちの未来の指導者として認めるはずがなかった。

「お前も確か来月成人するんだったよな？ まさか導師会議にのこのこ出て来るつもりじゃないだろうな？」

「それは……」

そのことについて、シグルトは何も言って来ない。確認しようとしても、いつもはぐらかされる。

だが、本当はリシエル自身が聞くことを恐れている部分もあった。君を弟子として会議には出せない——そう言われてしまうのが怖かった。

来月導師会議に出れないのなら、自分はもう本当にシグルトの弟子ではない、ということだ。

だとしたら、自分は一体何なのだろう？ この先どうすればいいのだろうか？

「なんだ、シグルト様に何も言われてないのか？」

リシエルが言い淀んでいると、パリスの表情が明るくなった。

「なるほど、シグルト様もようやくお前を見限る気になられたってとこかな。なら、僕にもまだ弟子にして頂くチャンスはあるってとこか」

その発言にリシエルは驚いた。パリスはずっとシグルトに憧れていて、弟子を志願していたが断られてブランの弟子になった、という噂は聞いていたが、まだ諦めていなかったとは思っていなかった。

「あなたはもうブラン様の弟子じゃない」

「好きでなったわけじゃない」

パリスは吐き捨てるように言った。

「ブラン様より、シグルト様の方が実力が上だ。このヴァーリス王国一、いや大陸一の魔道士なんだ。僕の師に相応しいのはシグルト様だけだ」

リシエルはあまりの不遜な物言いに呆気にとられた。師であるブランに対し、敬意の欠片も感じられない。

「ま、魔法の使えないお前には、シグルト様のすごさなんて、わからないだろうけどな」

パリスはせせら笑い、

「せいぜい、シグルト様に家まで追い出されないように頑張るんだな」

そう言って、背を向けて歩き出す。

「ま、待って！」

リシエルはとっさに呼びとめる。パリスが怪訝そうに振り返った。

「なんだよ？」

「この子の傷、治してあげて…」

「…なんで僕に頼むのさ？」

散々罵倒してきた相手にそんなことを頼む考えがわからないのか、パリスは少し困惑しているようだった。

「だって…早く治してあげたいし…」

リシエルの腕の中で、子猫が哀れっぽく鳴く。

パリスはしばらく顔をしかめて逡巡していたが、やがてちつと舌打ちすると、再び歩み寄ってくる。

「…傷ついた猫を放置したなんて猫好きのブラン様に知られたら、大目玉だからな」

お前に頼まれたからじゃない、暗にそう言ってゆつくりと子猫の傷ついた片脚に両手をかざす。パリスの手の平が、淡く緑色に発光し始めた。優しい光が子猫の脚を包み込み、見る間に傷口が塞がっていく。リシエルは息をのんでその様子を見守った。

「すごい…」

思わず漏れたリシエルの呟きに、パリスがじろりと睨む。

「こんなの、基礎中の基礎、初級も初級、下級魔道士でも使える」

リシエルの心がずきんと痛む。

「なんで…なんでお前なんかが、シグルト様の弟子なんだよ…」

苦々しげな表情で吐き捨てるように言って、今度こそ振り返らずに去っていく。

「そんなの…私が聞きたいよ…」

リシエルの呟きに、子猫が慰めるようにリシエルの頬を舐めた。

＊ ＊ ＊

「はあ、今日に限ってなんでこんな長引くかな」

月の塔、最上階。導師シグルトの執務室。

部屋の主が戻ってきたのは、昼を少し回ったところだった。

「リシエル、お昼まだですよ。外に食べに行きましょうか？」

「…お昼、食堂で買っておきましたから。テーブルの上にあります」

部屋の隅に設えられた小さな机で、書類をめくりながら、顔を上げもせず、リシエルが答える。

その様子に、シグルトは苦笑した。

「おや、どうやらご機嫌斜めみたいです」

「…そんなことはありません」

リシエルは言葉とは裏腹に、むすっとした表情で立ち上がると、お茶の用意を始める。

シグルトはソファに座ると、リシエルの用意した弁当の包みを開け始めた。

「あ、私の嫌いなキノコのスープ…」

いつもなら気を利かせて絶対に用意しないはずのメニューに、弟子の怒りを感じた。

「好き嫌い、よくないですよ」

リシエルはお茶を注いだカップを幾分乱暴に置いた。そのまま席に戻ろうとするが、シグルトに腕を掴まれる。

「リシエル、どうして怒ってるんです？」

「別に怒ってなんか…」

「言いたいことがあるなら言いなさい。今日は君と喧嘩したくないんです」

シグルトの紫色の瞳にまっすぐ見上げられ、リシエルは思わず目をそらす。

「リシエル？」

「…先生は、どうして私を弟子にしたんですか？」

「は？」

「答えてください」

今度はリシエルが薄紅色の瞳で、シグルトをまっすぐに見つめ返した。

シグルトは眉をひそめた。

「誰かに何か言われましたか？」

シグルトはおそらく、リシエルが魔法を使えないことで、法院の魔道士たちに白い目で見られていることを分かっている。リシエルが苦しんでいるのを分かっているはずなのに、それでも術を教えてくれないのだ。リシエルは無性に腹が立ってきた。

「そりやもうずっと言われっぱなしですよ！ 導師の弟子なのになんで魔法が使えないんだって…ありえないって…先生はどうして私に魔法を教えてくれないんですか！？」

「それは…君が思っている以上に、魔法というのは危険なものだから…」

「けど、私だってもう成人するんですよ？ いつまでも子供扱いしないで下さい！ パリスなんて子供の頃から魔術学院に通って、もうあんな魔法が使えるのに…」

「パリス？ …君に何か言ったのはパリス君なのかな？」

シグルトの問いも無視し、怒りで頭に血が上ったりリシエルは勢いに任せて、師を責め立てる。

「先生言いましたよね？ 私が魔術学院に入りたいってお願いした時、術は自分が教えるから必要ない、代わりに仕事を手伝ってくれて…でも、術なんか全然教えてくれなかった。たまに薬草学の本だけ渡して、読ませるだけ…魔法を教えてくれないなら、なんで私を弟子なんかにしたんですか？ もしかして記憶も身よりもなくして

可哀想だったから？ 同情？ でもやっぱり才能ないって気づいて、優しい先生はそれを言えないだけですか？」

「リシエル」

「私は先生の何なんですか？ 便利な小間使いですか？ それともからかって遊ぶ暇つぶしの玩具！？」

「私にとって君は、世界で一番大切な子です」

静かに、けれどはっきりと、躊躇いなくシグルトは答えた。

真剣な眼差しで見つめられて、リシエルの心臓が跳ねた。

何かの魔法を使われたのではないかと思うほど、沸騰していた怒りが急速に冷えて、代わりに別の熱が胸の内に広がっていく。

(…ずるい)

そう思っても、もう言葉が出てこなかった。シグルトはリシエルの腕を引いて、隣に座らせるとゆっくりと諭すように語り始めた。

5 シグルト

「リシエル、君にきちんと話をしてこなかったせいで、君を不安にさせてしまったことは謝ります。今から君に対する私の教育方針について話します。君が納得してくれるかはわかりませんが：聞いてくれますか？」

リシエルは素直に頷いた。

「リシエル、君は魔法をどういうものだと思っていますか？」

「えっと：魔力を使って傷を治したり、気象を操ったりする技術で、皆の役に立つものです」

リシエルは以前法院の図書館でこっそり読んだ、魔術学院初等科の教科書の冒頭に書いてあった一文を思い返しながら答えた。

「そうですね。確かに今や、魔法は人々の生活に必要不可欠なものになっていきます。夜の街を照らし、火事が起これば火を消し去り、魔物を結界で街から遠ざける：それらは確かに、魔法のよい面ですが、リシエル。物事には必ず良い面と悪い面があって、魔法も例外ではないのですよ」

シグルトはリシエルの薄紅色の瞳を覗き込みながら話し続ける。

「魔法は人類が手に入れた、最も大きな力です。このヴァーリス王国が大陸一の大国となれたのも、エテルネル法院の魔道士たちと手を組み、その力を戦争に利用してきたからです。魔法の力の前に、他国の魔道士を持たない軍隊など、まるで歯が立たなかった」

シグルトの紫の瞳が翳った。

「あれはもう戦争ではなく、一方的な殺戮です」

語る声にも暗いものが滲む。大陸統一を巡っての、ヴァーリス王国と他国の戦争がひとまず沈静化したのは、ここ数年の話である。エテルネル法院の魔道士として、シグルトも他国との戦争に加わって戦っていたはずだ。

（戦場で先生は、どんな光景を見てきたんだろう？）

いつも能天気になんて笑って、ふざけていても、シグルトにはリシエルと違い過去の記憶がある。自分と同じ年の頃、彼が生きた時代は戦乱の真ただ中だったはずだ。その過去が明るく楽しいものであるわけがなかった。

「魔法は人を救えもしますが、簡単に傷つけ、ねじ伏せ、理不尽に命を奪い去ることもできる。魔法とは本来、人間の身には余りある力なのかもしれません。そしてそんな力を得る、ということは必ずしもいいことばかりではないんですよ。代わりに多くのものを失うものなんです。君は子供の頃から術を学んできたパリス君を羨ましいと思いますか？」

問われ、リシエルは頷いた。

「では、人間的に尊敬していますか？」

これには力いっぱい首を振る。シグルトはその様子に笑った。

「魔道士というのは、強大な力を得る代わりに、人間的な部分が少なからず欠落するものなんですよ。優しさとか、思いやりとか：特に、子供のうちから他者を簡単にねじ伏せる力を得てしまうと、どんどん傲慢になっていく」

「でも、先生は優しいじゃないですか」

優しくなかったなら、素性もわからない子供を引き取ったりするはずがない。普段だって、リシエルをからかうことはあっても、本当に嫌がることは絶対にしない。

「君にそう思われているなら、私の努力も無駄じゃなかったみたいですね」

シグルトは嬉しそうに笑顔を見せたが、それはすぐに自嘲的なものへと変わった。

「でもね、私は優しくなんてないですよ。君にだけは嫌われたくないから優しい振りをしているだけで、本当は冷たくて、酷い人間なんです。君には言えないような、残酷なこともたくさんしてきました。その結果、大切なものを失ってしまったんです…悔やんでも悔やみきれません…」

過去に思いを馳せるかのような、どこか遠い目。シグルトはほとんど昔の話をしないので、リシエルは師の過去について、何も知らなかった。だが、それがシグルトにとって、辛く悲しいものであることは察せられた。

「た、大切なものって…？」

リシエルは迷いながらも、おそろおそろ尋ねた。初めて触れるシグルトの過去を、もっと知りたかった。

シグルトは遠い目をしたまま、ぽつりと答えた。

「…髪の色」

「へ？」

思いがけない答えに、目が点になる。

シグルトは悲しげな表情で、自らの白銀に輝く髪を一房つまみあげた。

「魔力の影響で、髪や瞳の色が変化する魔道士がいるのは知っているでしょう？ 特に幼少期から術を扱うようになった者にその傾向が強い。私もまだ若いのに、こんな白髪になってしまった…これはほんとにショックでしたよ…」

そう言つて、リシエルの艶やかな黒髪を愛おしげに撫でる。

「だから、もし君のこの綺麗な黒髪が、おかしな色になってしまったら…そう思うとなかなか君に魔法を教える気になれないんですね」

「…まさかそれが私に魔法を教えてくれない理由ですか!？」

「まあ、それもありますね」

シグルトは冗談ぽく笑って、弟子の髪を優しく梳く。

髪の変色の話が出たので、リシエルはかねてからの疑問を口にししてみる。

「…先生、私の目の色、どう思いますか？」

「綺麗ですよ、とても。君の黒髪とも合っているし」

間近で覗きこまれながら言われて、リシエルは少し赤くなった。

「変な色じゃありませんか？ 生まれつきこんな目の色の人、いませんよね？」

「まあ、確かに見たことはありませんが…」

黒髪もこの地ではかなり珍しいが、大陸東方部の出身者には稀にいる。

だが、リシエルという花と同じ、薄紅色の瞳。

一般人はもちろん、魔道士でも同じ色の瞳を持つ人間に会ったことがなかった。

「この目の色って、きっと何か魔力の影響があって、変わっちゃったんだと思うんです」

「…なるほど。それが君が魔道士を目指す理由ですか」

シグルトは察しがいい。

「はい。私が記憶を失ったことには、きっと魔法が絡んでるはずで
す。魔法を学べば、記憶を取り戻せるかもしれない…」

「…それはどうかな」

リシエルの言葉に、シグルトは首を傾げる。

「君は覚えていないかもしれないけれど、君をここへ連れてきた時、君に魔法をかけて記憶を引き出そうとしたんですよ。でも駄目でした。魔法は万能ではない。特に、記憶や人格など、精神面にかかわる部分ではね。君自身が魔法を学んだところで、結果が変わることも思えません」

「先生、まるで私に魔道士になって欲しくないみたい…弟子にしたくせに…」

リシエルは口を尖らせた。シグルトは困ったように微笑む。

「君を弟子にしたのは、いつも一緒に居たいと思ったからです。弟子ということにもしないと、法院内までは連れて来れないですから」

「そんな人をペットみたいに…」

物珍しいペット——パリスの言葉が浮かび、言いかけたが、すぐにはっとして口をつぐんだ。

シグルトの優しい眼差しに、幼い日の記憶が蘇る。

いつも一緒に居たい——そう望んだのは、シグルトというより、自分だった。

ここに連れて来られたばかりの頃、リシエルは精神的に不安定でシグルト以外に心を許せず、一人にされると不安で泣いてばかりいた。シグルトが仕事に行く時間になると、行かないで欲しいと泣いて縋って、シグルトや家の使用人たちを困らせたものだ。法院内は原則魔道士以外立ち入り禁止となっており、リシエルを連れて行けるはずがなかった。

だがある日、仕事に行く時間になると、シグルトはリシエルを馬車に乗せ、一緒にエテルネル法院まで連れて行ってくれた。不思議がるリシエルに、シグルトは優しく言った。

今日から君は私の弟子ですから、これからずっと一緒ですよ——シグルトがリシエルを弟子にした理由——それは、リシエルを一人にしないためだったのだ。

なのに、魔法を覚えてくれないことを責めて、自分勝手なことばかり言ってしまった。

とんだ恩知らずだ。

「…先生、ごめんなさい。さっきは怒鳴っちゃって…」

「謝るのは私の方ですよ。君のためには、君を弟子にして傍に置いて、魔法は教えない方がいいと思っていました。でも、それで君を苦しめてしまったんですから」

恥ずかしくなってリシエルは謝ったが、シグルトは首を振る。

「私はね、君が大人になって、魔道士を目指すことのいい面も悪い面もきちんと理解した上で、自分の道を決めて欲しいと思ってるんです。私は父も母も魔道士でしたから、幼い頃から術を学んで、魔道士になるべく育てられました。他の選択肢なんてなかった。でも、若い君には色々な可能性がある。それを最初から潰したくなかったんです」

「先生は、魔道士になったこと、後悔してるんですか？」

魔道士として最高位を極めたというのに？

思いもしなかったことだったが、シグルトは否定せず、曖昧に答えた。

「さあ、どうでしょう？ 生まれ変わってもまた魔道士になりたいかと言われると、微妙ですが…でも、魔道士になっていなかったら、君と出会うこともなかったわけだし…」

「確かに、先生がもしも普通の靴屋さんとかだったら、あんな紛争地域の雪山に来ることなんて、ありえなかったですもんね」

リシエルとしては、シグルトの両親に感謝したいところである。シグルトは細めてリシエルを見つめた。

「…そうですね」

妙な間があった。

しかし、すぐにシグルトはいつものにこにことした笑みを作り、ふざけるように言った。

「私と君が出会ったのは運命だったのかもしれませんが。やっぱり運命の赤い糸ってあるんだな」

「ありません！」

リシエルは赤くなって否定した。ふざけているだけだとわかっていても、先ほどの「世界で一番大切な子」という言葉を思い出すと、変に意識してしまう。

「リシエル、君がどうしても魔法を学びたいと言うなら仕方ありません。でも、君には魔道士になる以外にも色々な可能性がある。朝、来月君が成人したら大事な話があると言いましたね。その話を聞いた上で、どうするのか考えてもらいたいです。それが私の方

針です」

シグルトの言い方は優しかったが、有無を言わせないものがあった。

師にそれが自分のやり方だ、と言われてしまえば、弟子としては従うしかない。

大事な話とは何なのか、今問い詰めたところで、シグルトは絶対に答えないだろう。

結局、来月まで待つしかないのだ。

「わかりました」

リシエルが頷くと、シグルトはにっこり笑った。

「よかった。じゃあ、行きましょうか」

「え？ どこへです？」

「君と行きたいところがあると言ったでしょう？」

「仕事はどうするんです？」

今日シグルトは導師会議に出ただけで、他の仕事は一切していない。

「そんなことよりもっと大事な用なんですよ。さ、行きましょう。あ、馬車の中で食べますから、お弁当も持ってきて下さいね」

あっさりと職務を切り捨て、さっさと部屋を出て行ってしまおう。リシエルはため息をついて、師の後を追った。

6 仕立て屋で

シグルトに連れられてやってきたのは、王都でも有名な仕立て屋だった。主に王族や上流貴族を得意先とする、一般庶民にはいささか敷居の高い店である。

店内に入ると、初老の店の主人が待ち構えていた。

「お待ちしておりました、シグルト様」

恭しく頭を下げる。

シグルトはこの店の常連である。リシエルが日ごろ着ている服も、シグルトがすべてこの店で仕立ててくれたものだ。

「例のもの、用意できていますか？」

「はい、ご案内致します。こちらへ」

主人の案内で、二人は奥の個室へと通される。ソファとテーブル、壁に巨大な鏡が設えてある。部屋の隅、鏡の横には大きな黒い布を被せた物体があった。その傍に立っていた店の制服を着た女性が二人を見て頭を下げる。

「さ、リシエル様。こちらへどうぞ」

「え？ 私ですか？」

リシエルは戸惑いながら、主人に言われるまま、黒い布を被せた物体の前に立った。

主人が布に手をかけ、一気に引き剥がす。

中から現れたのは、洋服掛けにずらりと並んだ、ドレスの数々。色とりどりのドレスは、どれも見るからに上質な素材の、最新の流行のものばかり。

「こ、これは…?」

困惑顔で師を振り返る。

「私からの成人祝いですよ」

シグルトは満面の笑顔である。

「な、なんでドレスなんですか?」

「来月、ちょうど君の誕生日の日に、リンベルト伯爵邸で夜会があります。それに出席するのにドレスがいるでしょう?」

「や、夜会?」

「成人したら夜会に出て社交界デビュー。一般常識です」

「それは貴族だけでしょう? 私なんか出ていいんですか?」

「君は私の弟子ですよ。いいに決まってるでしょう」

エテルネル法院の導師は、就任と同時に、国王から宮廷魔道士の称号を与えられる。それは世襲の許されない、一代限りのものだが、王族に準じる高い地位である。リシエルにはまったく実感がなかったが、導師の弟子である自分も、後継者として身分的には貴族と同じ扱いであるらしい。

「大丈夫。もちろん私も行きますから」

「でも、先生そういう夜会とか舞踏会とか、今まで誘われてもほとんど出てないじゃないですか。嫌いだと思ってました」

立場上、シグルトはそういった貴族の集まりによく招待される。だが、華やかなことがあまり好きではないのか、どうしても出席しなければならぬものを除いて、ほとんど出たことがない。

「嫌いですよ。でも君は出てみたいでしょう？」

「それは…」

リシエルも年頃の女の子である。そういった華やかな世界に、まったく憧れがないと言ったら嘘になる。どうやらシグルトは、たまに夜会に行く度、リシエルがその様子を事細かに知りたがる様子から、そんな乙女心を察していたらしい。

「それに、大人になった君と一曲踊るのは私の夢だったんですよ」

シグルトは楽しそうに笑った。

「さあ、好きなのを選んで下さい。あ、もちろん選んだ一着だけでなく、全部君のですけどね」

「全部!？」

ずらりと並んだドレスは、おそらく一着で一般庶民の数カ月分の生活費に相当するだろう。

「とりあえず今度の夜会で着るのを選んでしましましょう。ドレスに合わせて、靴とか装飾品も買いに行かなきゃいけないし…あ、これとかどうです？」

シグルトは白いドレスを手にとった。宝石と思しき輝きが上品に散りばめられている。

話が勝手に進んでいくことに焦りを覚えて、リシエルは叫んだ。

「成人祝いだからってこんなにたくさん頂けません！」

「なんでです？」

シグルトはきよんとしている。

「大人になれば、こういうドレスが必要になることが多くなりますよ。たくさんあった方がいいと思ったんですが…」

「だ、だってこんなに高価なもの…」

「そういう心配なら、大丈夫です。私は普段は好んで質素な暮らしをしているだけで、お金なら掃いて捨てる程ありますから」

庶民が聞いたら殴り殺されても仕方ないような台詞をしれっとう。

「そうかもしれないけど…」

「リシエル。遠慮することはありませんよ。これは日ごろ頑張ってくれている君への、私の感謝の気持ちなんですから。さ、着てみて

下さい」

シグルトはにこにここと、手に持ったドレスを差し出してくる。
無邪気ともいえるその笑顔に、リシエルはもう何も言えなくなっ
た。

「お着替え、お手伝い致します」

リシエルが折れるのを待っていたかのように、すかさず店員の女
性が、リシエルを半ば強引に鏡の前に立たせ、その周りにさつとカ
ーテンを引いた。

＊ ＊ ＊

試着が終わったのは、もう日が傾きかけた頃だった。店の窓から
橙色の日が差し込んでいる。

こんなに時間がかかったのは、十数着はあったドレスを、全部試
着するはめになったからだ。

リシエルが着替える度、シグルトは「かわいい！」と大喜びし、
他のも着て見せて欲しいと次から次へドレスを差し出してきた。

散々試着したあげく、結局最後に選んだのは、最初にシグルトが
選んだ白いドレスだった。上機嫌のシグルトはこの後装飾品も選び
に行こうとしたが、リシエルが必死で止めたため、それはまた後日、
ということになった。

いたく満足気なシグルトに対し、着せ替え人形よろしく、何着も
の試着をこなしたリシエルは、さすがにぐったりして、師の後に続

き、店の出口へと向かった。

「お、シグルトじゃないか！」

店の外へ出ようとした時、横手から声がした。

見れば、シグルトと同じ、濃紺に銀糸の刺繍の施されたローブをまとった、赤毛の男が歩み寄ってくる。大柄でがっしりした体形と、色黒の肌が精悍さを感じさせ、歴戦の戦士を思わせる。ローブをまとっていないければ、魔道士にはとても見えない。

「おや、ブランじゃないですか」

「リシエルも一緒か」

「こんばんは、ブラン様」

男に微笑みかけられ、リシエルは慌ててぺこりと頭を下げた。

この大男こそ、エテルネル法院六導師が一人、ブランである。六導師の中で最も人望が厚く、魔法が使えないリシエルにも、分け隔てなく気さくに接してくれる。人当りが良さそうに見えて、実際にはあまり他の魔道士と個人的な交流を持つとうとしないシグルトの、数少ない友でもある。

「お前らも買い物か？」

「ええ。あなたも？」

「ああ。弟子が来月成人するんで、ローブを新調してやろうと思っ
てな」

ブランはそう言って、振り返る。その視線の先にいる人物を見て、リシエルは思わず身を固くした。

しかし、その人物――パリスはリシエルには一瞥もくれず、シグルトに深く一礼する。

「お久しぶりです。シグルト様」

パリスの表情は明るく輝いており、昼間リシエルに見せた底意地の悪さなど微塵もなかった。

シグルトは横で固まっているリシエルをちらりと見やってから、笑顔を作り、パリスに答える。

「やあ、パリス君。そういえば君も来月成人だったね。私の弟子もなんだよ。奇遇だね」

「…シグルト様の弟子、ですか」

そこで初めて、パリスがリシエルに目を向けた。その青い目の奥にある強い敵意から逃れようと、リシエルは俯いた。

「そうか、リシエルもだったな。パリスとはさしずめ職場の同期ってことになるのか。仲良くしてやってくれよ」

（無理です、ブラン様！）

能天気なブランの言葉に、心の中で全力で拒否する。ちらりと見れば、パリスも疎ましげに師を見ている。彼も同じ思いなのだろう。ブランは弟子同士の気まずい空気には気付いていないようだが、さすがに二人の弟子が何も答えないので、

「ん？どうした？」

怪訝そうな顔をしている。

と、助け舟が入った。

「ああ、リシエル、馬車を待たせているんだった。君は先に乗ってなさい。私はブランともう少し話したら行きますから」

シグルトの言葉にほっとして、リシエルは一礼すると逃げるように店を出た。

その後ろ姿を目で追いながら、ブランが感慨深げに言った。

「リシエル、改めて見ると大きくなったな。この間までほんの子供だったはずのに、すっかり娘らしくなって…女の子の成長ってすごいな。驚かされるよ」

「そうでしょう？ 日を追うごとに大人っぽくなっていくものだから、もう毎日ドキドキしっぱなしですよ」

シグルトの冗談めかした言葉に、ブランは苦笑した。

「それは結構だが、リシエルもう大人なんだから、子供の頃からの調子で悪ふざけして嫌われるなよ」

「悪ふざけ？」

「何かとベタベタ触ったり、無理やり抱っこしたり、眠ってる間に自分の布団に運んで一緒に寝たり、だよ。今やったら本当に犯罪だぞ」

傍で聞いていたパリスの顔が引き攣った。

「…悪ふざけではないんですが。でも、さすがに今は我慢してますよ。彼女も年頃だし、嫌われたくないですからね」

「賢明な判断だ。ところで、リシエルにもローブ新調してやりに来たのか？ 来月から導師会議、出席させるんだろ？」

ブランの言葉に、パリスの表情が強張る。

シグルトは少し困ったような、苦笑に近い微笑みを浮かべて言った。

「ええ、まあ…彼女が望むなら」

「シグルト様！ 本気ですか！？」

パリスが不意に声を上げた。

「彼女は魔法を使えないのでしょうか？ なのに、導師会議に出させるおつもりなのですか？」

「魔法が使えないと、導師会議に出ててはいけないのですか？ そんな規則ありましたっけ？」

シグルトに逆に問われ、パリスは苛立った。

「当たり前じゃないですか！ 導師会議とは、国中の魔道士たちの頂点に立つ、選ばれし者の神聖な会議なんですよ！ そんな場所に、魔法の使えない人間が居ていいはずがない！」

「おい、パリス」

ブランがたしなめるように言ったが、パリスの眼中にはシグルトしかないかった。

不満と怒りが煮えたぎって、溢れるのを止められなかった。

「シグルト様、どうしてです？ 僕が弟子にして欲しいと頼んだ時、もう弟子がいるから、そう仰った。どんな天才かと思ったら、あれが弟子ですか？ あんな初歩の魔法すら使えない、才能のない奴が？ あんなのより、僕の方がずっと優秀だし、ずっと努力してきたのに、どうして僕を弟子にして下さらなかったのですか！？」

シグルトは黙ってパリスを見ている。

反応のなさにもどかしさを感じ、もっと想いを伝えようと言葉を重ねた。

「僕はずっとあなたに憧れて、頑張ってきたんです！ あなたの弟子になりたいくて！ どんなに苦しい修行にも耐えてきた！ 一度でいい！ 僕の魔法を見て下さい！ そしたらお考えもきっと変わります！ 今の僕なら、あのアーシェにだって——」

「パリス！」

ブランが大声で遮った。

本気の怒気を含んだ声に、パリスははっとしたが、遅かった。シグルトの目を見て、息をのむ。

冷たく、暗い、光の見えない紫の瞳が、自分を見ていた。

7 予兆

ぞくりと背筋が凍りついた。

シグルトの前で“彼女”の名を出すことがタブーであることは、法院内では暗黙の了解だったが、まさかこれ程までに怒りを買うとは思っていなかった。

何か言わねばと思うが、喉まで凍りついてしまったのか、声が出ない。

「シグルト、すまない」

弟子の代わりに、ブランが頭を下げた。

不意に、氷が溶けるように、シグルトが表情を緩めた。

「何を謝っているんです？ 君の弟子が私の可愛い弟子を散々に罵ったことですか？」

「それもあるが…とにかくすまん。本当にすまん。でも、こいつは本当にお前の弟子になるのが夢で…それでちょっと言い過ぎたんだ」

ブランは必死で弟子を擁護しようとする。

「男に慕われても別に嬉しくありませんね」

シグルトは肩をすくめて、パリスを見た。

「パリス君。君は一つ大きな思い違いをしています」

表情こそ穏やかだが、目の奥は暗く冷え切ったままだ。

「君は自分の方が優秀だと思っているようですが、君よりリシエルの方がはるかに強い」

思いがけない言葉に、パリスは目を見開いた。

その意味が理解できない。

だが、シグルトに説明する気はないようだ。

「私はリシエル以外を弟子にする気はありません。もし仮に君が、“彼女”——私の前の弟子を凌ぐ天才だったとしてもね。——まあ、そんなことありえませんが」

言って、口元に薄く笑いを浮かべた。

いつもの穏やかな笑みではない。

パリスへ向けられた、冷たい嘲笑。

シグルトは、すいっと店の窓の外へと視線を移す。

「私にとって、あの子は——」

店の窓からは、リシエルが馬車に繋がれた馬の首を優しく撫でているのが見えた。

シグルトの瞳から冷たさが消え、柔らかな微笑みはその顔に浮かぶ。

「——何よりも大切な、特別な存在なんです」

シグルトはそれだけを言うと、もうパリスに一瞥もくれることなく、店を出て行く。

パリスはその後ろ姿を呆然と見送る。

店の扉が、がしゃん、と重く鈍い音を立てて閉まった。
ブランが慰めるように、パリスの肩にそっと手を置いた。

「お前もいい加減諦めろ。お前は俺が立派に鍛えてやるから」

しかし、パリスは師の言葉など聞いていなかった。

（あのカラス娘が僕より強い？）

ありえないことだった。

シグルトの前の弟子——シグルトすら越える天才と噂された“彼女”が自分より強い、というのならばわかる。

だが、あのカラス娘——あんな初歩の治癒魔法さえ使えない奴が？

幼い頃から神童だと持て囃され、魔術学院を首席で卒業し、今最も将来を期待される魔道士である僕より？

特別な存在なんです——

シグルトの言葉が、ぐるぐると頭の中を巡る。

それは、本来自分がかけられるべき言葉のはずだ。

そのために、一番を目指してきた。

そのために、血が吐く程の努力をしてきた。

そのために、すべてに耐えてきた。

なのに——

窓の外で、シグルトがリシエルに笑いかけながら、頭を撫でてやっているのが見えた。

（なんであいつなんだ？）

胸の辺りを循環する血液が、急にどろどろと固まり、重みを増した気がした。

同時に、もやもやとした不快な感情がせり上がってくる。

生まれて初めて抱く感情だった。

常に他者の羨望の的として生きてきた彼は、それを“嫉妬”と呼ぶことを知らない。

（あいつさえ、いなければ――）

パリスは肩に置かれた師の手を振り払うようにして、何も言わずに店の奥へと消えた。

置き去りにされたブランはその様子に、怒るでもなく、深いため息をついた。

「俺の周りほんと、扱いにくい奴が多いな…」

＊ ＊ ＊

王都でも有名な仕立て屋。その前に、黒塗りの馬車が一台止まっている。

馬車の前には、灰色のローブを着た少女が一人、立っていた。この国では珍しい、長い黒髪が目を引く。可愛らしい顔立ちはまだ多分に幼さを残していた。馬車に繋がれた馬の首を撫でてやりながら、

御者と談笑している。時折、ぱつちりとした大きな瞳で、様子をおうように店の扉を見やる。

少女は、物陰から自分に向けられている視線にはまったく気付いていない。

店から少し離れた路地の裏。二人の男が少女を見つめていた。

一人は薄汚れたローブに身を包み、深くかぶったフードで顔を隠した、魔道士風の男。

もう一人は、身なりのよい、腰に剣を下げた、若い騎士である。

「…あの娘だ」

ローブの男が、騎士に囁いた。

「どうだ？　わかるか？」

「…間違いない」

騎士は、黒い瞳に少女を捕えながら、はっきりと答えた。

「会うのは6年ぶりだろう？　断言できるのか？」

魔道士風の男は、疑わしげに言う。

「俺があいつを見間違うはずがない。ただ…」

騎士は断じたが、微かに戸惑いを見せた。

「…目の色が変わっている…ように見えるな。ここからだとはっきりわからないが…」

「俺の仮説が正しければ、まあそういうことも有りうるな」

ローブの男が頷いた。フードからこぼれる、男にしては長めの髪が揺れる。その色は、濃い緑色がかっていた。

やがて店から、濃紺のローブをまとった若い男が出てきた。白銀の髪が夕陽を受けて、橙色に染まっている。

「…シグルトだ」

ローブの男が呟く。

「……！ あいつだ……！」

冷静に話していた騎士の声音が変わった。

黒い瞳が獲物を見つけた時の、飢えた獣のように、きらきらと輝く。

「やはりそうか」

ローブの男の声は、どこか満足げだ。

黒髪の少女は、店から出てきた男に駆け寄った。二人で何かを話し、笑い合う。男は、優しく微笑んで、少女の頭を撫でた。傍から見ていると、まるで仲の良い恋人同士のようにも見える。

騎士は、奥歯をぎりっと噛み締め、二人に向かって一歩踏み出そうとした。それをローブの男が腕を掴んで引き止めた。

「おい、もう行くぞ。シグルトは鋭い。感づかれる」

薄汚れたローブを翻し、男は路地の奥の闇へと消えた。

騎士は足こそ止めたが、なおも店の前の二人を凝視し続ける。

少女がシグルトに背を押されて、馬車へ乗り込んでいる。
触れられることに何の抵抗も覚えていない。信頼しきっている様
子が伺える。

少女を見つめる騎士の黒い瞳が切なげに揺れた。

「…エリック！」

路地の奥から苛立った声が呼び掛ける。

ようやく騎士は、踵を返した。

路地裏へと足を踏み出すが、一瞬だけ店の方を振り返る。

紫の瞳が、こちらを見ていた。

この子はもう手遅れです。諦めなさい————

6年前の記憶が蘇る。

地に這いつくばった無力な自分を、あの瞳は冷たく見下していた。
そして———全てを奪っていった。

騎士は、ローブの男を追って奥へと駆け出した。

彼の黒髪が、路地の闇と溶けあって、見えなくなった。

「先生？　どうしたんですか？」

馬車に乗ろうとして、動きの止まったシグルトに、リシエルが怪訝そうに声をかけた。見れば、反対の道路の方をじっと見ている。

「…いえ、なんでもありません。知り合いがいたような気がしたんですが…気のせいでしょう」

シグルトは微笑んで見せた。

「先生、早く乗って下さい。雲行きが怪しいから、急いで帰りましょう」

弟子の言葉に、シグルトは空を仰いだ。
西の方から、どんよりと曇った、灰色の雲が迫りつつあった。
さっきまで晴れていたはずの空に、眉をひそめる。

「…ひと雨きそうですね」

ぽつりと呟くと、馬車に乗り込んだ。

7 予兆（後書き）

嫉妬に目覚めたパリス君と謎の二人組：
ようやく雲行きが怪しくなってきました（笑）

8 お返し

シグルトの家にある、リシエルの部屋。

リシエルは、先日シグルトから贈られた、白いドレスを掲げ持ち、眺めていた。

窓から入る日の光を受け止め、滑らかな絹がうつすら光を帯び、縫い散りばめられた宝石が、きらきらと輝く。

うっとり眺め、自然と顔が緩む。

なんだかんだ言っても、こんな贈り物をされて、嬉しくないわけがない。

ドレスの試着の時も、疲れはしたが、シグルトに「かわいいですよ」と誉められて、照れ臭いものの、悪い気はしなかった。

ふと、リシエルは顔を上げ、自分の部屋を見回した。

広くはないが、日のあたる、居心地のいい部屋。

柔らかいベッド、ふかふかのソファ、勉強しやすい机と椅子、整然と本の並んだ書棚、クローゼットにある上質な服：

すべて、シグルトが買い与えてくれたものだ。

シグルトは自分で言う通り、随分と質素な暮らしをしていた。エテルネル法院の最高権力者であり、ヴァーリス王国の宮廷魔道士として、大貴族にも劣らぬ地位にありながら、この古い家に住み、使用人もほとんど雇わず、静かに暮らしている。

だが、彼は弟子のこととなると、何のためらいもなく、湯水のごとくお金を使う。

お金だけでなく、この間のように職務もそっちのけで、リシエルのために時間を作ってくれることも度々ある。

それが有り難くもあり、申し訳なくもあった。

リシエルは、手にあるドレスに視線を落とした。

(…先生からもらってばかりだな、私)

紛争地帯の雪山で、記憶を失って倒れていた自分。

シグルトが見つ付けてくれなかったら、凍死するか、争いに巻き込まれて殺されるか、いずれにせよ今こうして生きてはいなかっただろう。

この命すら、シグルトが与えてくれたものだと言ってもいい。

何一つ持っていなかった自分に、名前も、住む場所も、教育も、何もかも与えてくれた人――

なのに、自分は与えられるばかりで、何一つ返せていない。

いや、返せていないどころか、自分の記憶を取り戻すため、魔道士になりたくて、魔法を学ぶ機会を与えろと、要求すらしている。

この間、魔法を教えてくれないことに対して、つい頭に血が登ってシグルトに言ってしまったことを思い出すと、恥ずかしくて、自己嫌悪に陥ってしまう。

なんでもいい。

なんでもいいから、シグルトにお返しできることはないだろうか。

(お返しに何かあげられたらいいんだけど…)

シグルトの欲しいものを考える。

恋愛小説を読むのが趣味だということは知っている。だが、本などいくらでも買える。本に限らず欲しいものがあれば、シグルトに買えないものはほとんどないだろう。自分にこんな高価なドレスを買ってくれるぐらいなのだ。生活ぶりからは考えられないが、実際には相当お金持ちであることは間違いない。

そもそも、リシエルの持っているお金も、シグルトが給料として支払ってくれたものだ。それだって、リシエルがしている仕事を考

えれば、お小遣いのようなものだ。

（先生が欲しいもの…で、先生が買えないもの…）

考え込んでいると、部屋のドアをノックする音がした。

リシエルは慌ててドレスを衣装箱の中へしまうと、どうぞ、と返事をする。

「失礼致します」

声と共に入ってきたのは、メイド服の若い女。

シグルトが唯一雇っている、メイドのセイラだ。

4年前のある事件をきっかけに、シグルトはそれまで雇っていた使用人たちを解雇し、どこからか彼女を連れてきた。それ以来、炊事、洗濯、掃除、買い物から庭の手入れまで、ほとんどの家事を彼女一人でこなしている。シグルトもリシエルも、基本的には自分のことは自身でやるとはいえ、今まで数人の使用人に割り当てられていた仕事を全て任されているのである。それにも関わらず、彼女の仕事ぶりは完璧で、文句も一つも言わない。加えて、かなりの美人である。

欠点といえば、表情に乏しく、たまに相当ずれた発言をする、という点くらいだろう。

「これから市場へ買い出しに行つて参りますが、何かご入用な物はございませんか？」

セイラは人形のように整った顔立ちに、何の表情も浮かべず、淡々と事務的に話す。セイラがここへ来て4年経つが、リシエルは彼女の笑顔を見たことがなかった。表情というものがないので、黙って立っていると、その端正な容姿とあいあまって、本物の人形のよ

うに見える。

「特にないから大丈夫。ありがとう」

返事をする、彼女は静かに出て行こうとする。

「あ、待って！」

ふと思いついたことがあって、リシエルが呼び止めると、セイラが振り返った。肩口で切りそろえられた、暗めの茶髪が揺れる。

「セイラに聞きたいことがあって…」

「なんででしょうか？」

「先生って、何か欲しいものとか、好きなものってあるか、知ってる？ お金で買えないもので」

セイラは無表情のまま、声のトーンを変えることなく、答えた。

「ご主人様は、リシエル様のことが好きです」

リシエルは思わず赤くなったが、否定したり、笑ったりすることはしなかった。

別に冗談でも、からかっているわけでもなく、彼女は真面目に答えているだけなのだ。

相当変わっているとは思いますが、彼女はこういう人なのである。さすがに4年もすれば慣れた。

質問を変えてみる。

「えーと、じゃあ、先生が貰って喜ぶものって何だと思う？」

「お金で買えなくて、喜ぶもの、ですか？」

セイラはしばし考えてから、

「ご主人様は、いつもリシエル様のお作りになった料理を、喜んで召し上がられます」

「料理、かあ…」

確かにシグルトはいつも、リシエルの作った料理を、大げさなま
でおいしいといって残さず食べてくれる。

料理の腕に関して言えば、正直リシエルのほうがセイラより上で
ある。セイラは他の一切は完璧なのだが、料理だけはさほど上手く
ない。まずいわけではないが、特別おいしいわけでもない。本人曰
く、「味というものがよくわからない」そうだ。そのため、リシエ
ルが料理をすることも多く、腕にはそこそこ自信がある。

お返しにもならないかもしれないが、シグルトの好物を作って、
少しでも感謝の気持ちを伝えられたら。

今の自分には、それくらいしかできないし、シグルトならきつと
喜んでくれる。

「先生、食べ物だと何が好きかな？ キノコが嫌いなのは知ってる
けど、なんでもおいしいって言うから特に好きな物がよくわかん
なくて」

「アップルパイ」

「え？」

セイラがじつとりシエルを見つめながら言った。藍色の瞳の奥には、何の感情も読み取れない。

「ご主人様は、アップルパイが、好物でいらっしゃいます」

「そうなの？ 知らなかった」

6年間、一緒に暮らしているが、シグルトがアップルパイを食べているところを見たことがない。

「セイラ、よく知ってるね」

「以前、ご主人様にお仕えしていた頃には、よく召し上がっていらつしゃいました」

「以前？ セイラって、私がこの家に来る前もここで働いてたの？」

「はい」

初耳だった。セイラは基本的に自分からはあまり話さないし、シグルトもそんなことは一言も言っていなかったからだ。リシエルの好奇心がうずいた。

「そうなんだ。どうして辞めちゃったの？」

「ご主人様に、もう必要ない、と言われたからです」

「ええ!？」

何でも卒なくこなすセイラに対して、シグルトがそんなことを言
ったというのが信じられなかった。

「先生がそんなこと言うなんて…なんかしっちゃったの？」

「理由は存じません。ご主人様の都合だったようです」

「そうなんだ…」

一体どんな事情だったのだろうか？

自分の知らない、過去の話。

自分は本当に過去のことを何も知らないのだと思う。

シグルトの過去も、自分自身の過去も。

ふと、セイラが手に提げている買い物かごが目に入り、慌てて言
った。

「あ、ごめん！ 買い物行く前に引きとめちゃって」

「いえ。では、失礼致します」

セイラは一礼すると、静かな足音と共に去って行った。

（アップルパイかあ…）

リシエルは本棚から、料理の本を引っ張り出す。

お菓子作りはあまりしたことがなく、持っている本にもレシピが
載っていないかった。

（本買いに行こうかな…）

シグルトのために、アップルパイを作って、喜ばせる。

もはやこれ以外、リシエルがシグルトにできるお返しはないように思えた。

リシエルは早速、薄手の外套をはおると、部屋を出て階下へと降りて行った。

階段を半ばまで降りると、玄関にシグルトが立っているのが見えた。誰か来たようだ。

足音に気付いて、シグルトが振り返る。

「おや、お出かけですか？」

「はい。ちよつと…」

「よお、リシエル」

扉から、赤毛の大男が顔をのぞかせた。

「ブラン様！」

「近くまで来たんでな。寄ってみた」

今日は休日のため、二人とも導師が纏う、いつもの濃紺のローブではなく、シグルトは簡素な麻のローブを、ブランはごく一般的な街の人間が着る服を、それぞれ着ている。

ゆったりしたローブではなく、体に沿ったすっきりしたラインの服を着ていると、ブランの鍛え上げられた筋肉がよくわかる。魔力だけでなく、体力と腕っぷしにも自信があると以前言っていたが、嘘ではないようだ。

「あ、今お茶お入れしますね」

リシエルが言うのを、シグルトは手で制して、

「大丈夫ですよ。自分で出来ますから。それより、出掛けるなら本屋にお使いに行ってきてくれませんか？ さっきセイラに頼むのを忘れてしまって…ローラ・シャルトルの最新作が今日発売されているはずなので、買ってきて下さい」

ローラ・シャルトルとは、王都で若い婦女子に熱烈な支持を受けている、恋愛小説家である。シグルトは彼女の熱狂的読者の一人で、書齋には彼女の作品が全巻揃っている。

「またですか？ 先生、ほんと好きですね」

呆れ口調で言うと、シグルトも同じ口調で返してきた。

「リシエル、君こそああいう本を読むべきです。年頃なのに、恋とか愛について興味が無いのはどうかと思いますよ。大人になるためには、そういう勉強もしないと」

「私は恋より、魔法の勉強がしたいんです」

リシエルは口を尖らせた。

「君が大人になってくれないと、私が困るんですけどねえ」

シグルトはため息をつく。

「なんで先生が困るんですか？」

「君がそんなんだから、私と君の仲が進展しないじゃないですか」

「進展とかしませんから！ 弟子に変な妄想抱くのはやめて下さい！」

傍で聞いていたブランが噴出した。

「お前ら仲いいな。うらやましいよ」

「まあ、君の弟子はあの勘違い自惚れお坊ちゃんですからね。仲良くななんてできませんよ。同情します」

シグルトはさらりときついことを言う。どうやら彼もパリスのことは嫌っているらしい。あれだけシグルトに憧れているにも関わらず、こんな言い様をされるパリスに、リシエルはほんの少し同情した。

「あいつはあいつで、いいところもあるんだがな…」

ブランは苦笑して言った。

パリスのあの言動から察するに、おそらく師であるブランに対し、日頃からかなり無礼な態度を取っているに違いない。にも関わらず、弟子を擁護しようとするブランは、本当に優しい、いい人だと思う。きっとパリスがどんなに態度が悪くても、見捨てることなく、師としてきちんと指導しようとしているのだろう。

「ブラン様が先生だったらなあ…」

「何か言いましたか？」

内心の想いが、つい外に漏れ、師の紫の瞳がじろりと睨む。

「なんでもありません！ お使い行ってきます。ブラン様、ごゆっくり！」

リシエルは一礼すると、慌てて二人の脇をすり抜け、外へと出た。

「日が暮れる前には帰ってくるんですよ！」

「はい！」

背後からかかった保護者の声に、返事をして、リシエルは家を後にした。

8 お返し（後書き）

今回、金曜日に更新しました。
次話も金曜日更新予定です。

9 本音

シグルトに通され、客間に入るなり、ブランはシグルトに頭を下げた。

「シグルト、この前はすまなかった。パリスにはよく言っておいた」

「おやおや、もしかしてわざわざ弟子のために謝罪に来たんですか？ 君は真面目ですねえ…まあ、座って下さい」

シグルトは苦笑すると、部屋の隅のテーブルに置いてある水差しを手に取る。

ブランは来客用の革張りのソファに腰掛けた。

「それで、パリス君は反省してくれましたか？」

「…一応表面上は謝ってたが、正直不貞腐れてた。あいつ、俺のこ
と内心師匠だって認めてないからな…」

ブランは頭を掻いた。困ったときの彼の癖である。

「君も大変なのを弟子に取りましたね」

シグルトは言いながら、水差しを左手で軽く撫でた。瞬間、中の水が沸騰する。

「前から聞こうと思ってたんですが、なぜ彼を弟子に？」

「なんでだろうな…俺もそろそろ弟子を取らなきゃと思ってたし…」

お前にあっさり弟子入りを断られて、しょげてたあいつに同情したってのもあるが…まあ、直感、かな」

「君らしい」

シグルトはくすりと笑って、水差しから茶葉を入れたティーポットに湯を注ぐ。芳しい香りが立ち上った。

「あいつは確かに性格にちょっと難はあるが、実力は確かだし、努力家だ。これからまだまだ伸びる。…人間的にもな。その成長を見てみたい…そう思った」

ティーポットから立ち上る湯気を見つめながら、ブランが言った。

「俺もお前に聞きたい。お前、どうしてリシエルを弟子にしたんだ？」

「彼女を弟子にした経緯は君も知ってるでしょう？ 傍に置きたいからですよ」

シグルトがティーポットからカップに茶を注ぎ、ブランの前に置くと、自身も向かい合ってソファに腰掛けた。

「ああ。俺もリシエルのことは小さい頃から知ってるから、ちょっと不安定だった時期があったことも知ってる。それでお前が心配して弟子にしたことも。弟子ってことにすれば、法院内で連れまわしても、誰からも咎められないからな。それはいい」

ブランはまっすぐに友を見た。

「どうしてリシエルに魔法を教えてやらない？」

シグルトはさりげなくブランから視線を自分のカップへと移し、一口啜ってから、短く答えた。

「それも前に言ったと思いますが」

「子供の頃から魔法なんて使うようになったら、ろくな人間にならない……か？」

ブランは口の端を皮肉っぽく吊り上げた。

「まあ、それは確かにそうだ。お前がいい例だ」

「私が代表例、君が例外ってどこですかね」

シグルトが茶化すように言った。

「けどな、たとえ子供の頃から魔法を学んだって、実際そこまでの力を手にするのはほんの一握りだ。悪いが、リシエルにそこまでの才能はない。それはお前だって、あいつが子供の頃からわかってたはずだ。俺達導師や、上級魔道士になる人間はみんな、子供の頃にその強力な魔力を制御しきれず、周囲の人間を傷つけたり、物を壊したりした経験が少なからずある。魔力に関して言えば、どの程度の力を手にするかは、生まれた時からある程度決まってるんだ」

「そうは言っても、子供っていうのはいろんな可能性がありますからね。思いがけず才能が開花するってこともあるでしょう」

シグルトはゆっくりとカップの中の茶色い液体を揺らして眺めて

いる。

「それに、魔法で人を傷つけることが心配なら、治癒魔法とか、防御系魔法とか、そういう術だけ教えてやればよかったじゃないか」

「最初はそれでいいかもしれませんが。でも、そのうちもっと大きな力を求めるようになってしまう：それが魔法の怖さです」

シグルトは淡々と反論する。

ブランは眉をひそめて、シグルトの言葉を受け入れられないかのよううに、首を振る。

「俺にはお前が理屈をこねて、リシエルを魔道士にさせまいとしてるとしか思えない：」

「……」

「お前、リシエルをどうするつもりなんだ？ 魔法が使えないリシエルが、法院内でどう言われているか、お前だって知らないわけじゃないだろう？」

ブランの声には、責めるような響きがあった。

「ほんととは弟子じゃなくて、お前の愛人なんじゃないかって噂までされてるんだぞ」

「愛人ですか。なんかやらしいな。まだ清い関係なのに：恋人って言って欲しいですね」

真剣なブランに対し、シグルトはどこかおどけた調子だ。

ブランはため息をつく。

「リシエルは美人だからな…魔法が使えないのに弟子をしてるとなれば、そう思われても仕方ないだろう。お前も、いい年して子供が趣味の変態だの、女にうつつを抜かしてすっかり腑抜けただの、結構いろいろと言われてるみたいだぞ」

シグルトは可笑しそうに笑った。

「変態って…まあ、否定はできませんね。私は他人にどう思われようと構いませんけど」

「お前はいいかもしれないけどな、リシエルは傷付いてる」

シグルトの飄々とした態度に、ブランは苛立ったように眉を寄せた。

「パリスのことは悪かったが、あいつの言ったことは、そのまま法院の魔道士たちが思っていることでもある。お前のことが怖くて、はつきり言ってくる奴はいないだろうが…このままリシエルを導師会議に出して、自分の後継者として示せば、絶対に内部で反発が起こる。結局つらい思いをするのはあの子だぞ」

そこで初めて、シグルトは顔を上げ、まっすぐにブランを見た。紫の瞳に強い光が宿っている。

「…あの子は私が守りますよ。何があっても。絶対に」

「お前…」

ブランは何かを言いかけたが、躊躇うようにしばらく沈黙する。自分のカップを手に取り、一口だけ茶を飲み下すと、カップを戻し、そのまま俯く。カップの中の液体がゆらゆらと波打っていた。その波が収まるのを見届けると、意を決したように口を開いた。無意識に一段声の大きさを落とす。

「リシエルに魔法を教えたくないのは：アーシェのことが原因か？」

その名を口にしたのはいつぶりだろう。

あの事件以来、シグルトはこの名を聞くと、決まっていとも浮かべている微笑みを消し、無口になる。法院内ではシグルトの機嫌を損ねないように、その名を出さないようにすることが暗黙の了解となった。ブラン自身も、親友の心の傷を払うことを恐れて、気づけば彼女の話題は避けるようになっていた。

シグルトは答えない。

ブランは彼の表情を確認することなく、俯いたまま慎重に言葉を選ぶ。

「シグルト、その、アーシェのことは：」

「まさか、“お前は悪くない”：なんて言わないでしょうね」

シグルトの声音は、先程と変わらない。

だがその言葉の裏には、ブランも想像もできない程、複雑な感情が渦巻いているに違いなかった。

「：言わないさ。言えない」

ブランは正直に答えた。

ここで下手な慰めを口にすることは、何の意味もない。

「そう、彼女のことは私の責任です」

シグルトは、静かにカップをテーブルの上に置くと、淡々と言葉を紡ぐ。

「魔道士を辞めたい：そう彼女が望んだ時、私が引きとめず、すぐに法院から出していれば、あんなことにはならなかったかもしれない」

「…」

「いや、そもそも、私が彼女を魔道士になんかしなければ、彼女は普通の女の子として、普通の幸せを掴めたはずです。私がこんな歪んだ世界に引き込んだばかりに、彼女をあんなに苦しめてしまった：その挙句に、私は…」

そこまで言って、シグルトは口をつぐんだ。

6年前に起こった事件。

あれ以来、シグルトときちんと彼女の話を話すのは初めてだった。

初めて聞く、親友の後悔と自責。

同時に、疑問が湧き上がる。

「そこまで後悔しているのに、なぜあの時、お前は…」

言いかけて、ブランは浮かんだ想いを振り払うように首を振った。

「いや、悪い。いまさら過去のことをどうこう言っても仕方ないな」

そこでようやく、ブランは面を上げた。

「俺が言いたいのは、リシエルとアーシェは違うってことだ」

「……」

「性格も、容姿も、才能も、まるで違うのに、俺にはお前がリシエルにアーシェを重ねているように見えるんだよ…アーシェにしてやれなかったこと、全部リシエルにしてやろうとしてるんじゃないのか？」

ブランの脳裏に、一人の少女の姿が浮かんた。

灰色の髪に、灰色の瞳。美人ではないが、妙に人を惹きつける、理知的な顔立ち。

シグルトの初めての弟子。

師すら越える天才と謳われた魔道士。

ずば抜けた才能への嫉妬から、周囲にその容姿を“灰かぶり娘”と馬鹿にされても、負け犬の遠吠えだと鼻で笑い飛ばしていた、気の強い娘。

目を引く美少女だが、それ以外に目立つ賢さや魔力もなく、その出自ゆえか、人見知りで、大人しく気の弱いリシエルとは、すべてが真逆だった。

「お前はリシエルにアーシェとは違う道を選ばせたいのかもしれないけどな、リシエルとアーシェはそもそも違うんだ。リシエルの想いも尊重してやれ」

「…記憶を取り戻したい、ですか…」

「それだけじゃない。前に一度リシエルが俺に言ったことがある。

“いつか先生みたいな魔道士になって、先生の役に立ちたい”ってな」

「……」

シグルトの表情が、かすかに歪んだ。

「なんだかんだ言って、リシエルはお前を信じてるし、心から慕ってる。それがお前が望んでいる形でかどうかは、俺にはわからないが……うらやましいよ。お前は本当に弟子に恵まれる」

ブランは、カップに残された茶を飲み干すと、立ち上がった。

「リシエルのこと、ちゃんと考えてやれよ。魔道士にするにせよ、しないにせよ、だ。あいつは、お前の後悔とは無関係なんだから」

見送りはいい。そう言って、ブランは友を残し、部屋を出て行った。

残されたシグルトは、しばらく瞑想するかのように目を閉じていた。

やがて席を立ち、ゆっくりと窓辺へ歩み寄る。

窓の外では、花壇に慎ましく咲く、薄紅色のリシエルの花が風に揺れていた。

その様子をぼんやりと眺める。

「…役になんて、立たなくていい…」

ぽつりと―――眩きがこぼれた。

まるで、リシエルの花に向かって囁くように。

「…魔道士になんて、ならなくていい…」

それは、愛弟子に隠している、本音。

「……記憶なんか、取り戻さなくていい…」

自分勝手だとわかっていても、それが、本音。

「君はただ、そのまま…私の傍に居てくれさえすれば、それでいい…」

シグルトは苦しげに表情を歪めると、窓のガラスにそっと手を這わせた。

指の隙間で、何も知らない無垢な花が揺れていた。

9 本音（後書き）

予約投稿機能を使ってみました★

徐々に過去の話が出てきました。

シグルトの前の弟子、アーシェという存在。

果たして6年前に何があったのか…？

次話はあの人再登場予定。

10 夜道

王都で一番大きな書店。

店内は広かったが、シグルトに頼まれた小説はすぐに見つかった。人気作家の最新作とあって注目度が高いのか、店の一番目立つ所に積み上げられている。

貴族学院の男性教師と、身分の高い貴族の女生徒との禁断の恋を描いた、今王都で売れに売れているシリーズの最新刊、だそうだ。リシエルは興味本位で、試しにぱらぱらとページを捲り、目を通してみる。が、しばらくして勢いよくぱたんと閉じた。いささか刺激の強い表現を目にし、頬が熱くなる。

（先生ってば、なんでこんなのはっかり読んでるんだろう？）

この小説に影響されて、弟子に妙なちょっかいをかけるようになったに違いない。今回の話は、教師と女生徒がついに関係を持ってしまう、それを女生徒の同級生に知られ、窮地に陥る——という、なかなか過激な展開になっているようだ。シグルトがこれを読んだら……ほんの少し、身の危険を感じる。

（現実と小説の区別がつかなくなっているのかも……気をつけないと……）

師に対して、結構ひどいことを思いつつ、リシエルは料理本が並んでいる一角に移動した。

魔法は教えてくれないし、気があるかのようなそぶりを見せて、年頃の弟子をからかって楽しむ——そんなシグルトでも、リシエルにとっては、大切な師であり、自分を守り育ててくれた恩人なの

だ。

リシエルは熱心に本を読み比べる。

一口にアップルパイといっても、様々な作り方があった。

その中で、一つのレシピが目をつけた。

隠し味として、ミールの実の粉末を入れる、というものだ。

ミールの実とは、独特の甘みが特徴の木の实である。疲労回復の効用があり、魔道士が薬として調合に使うこともある。それなりに値が張り、王都でも売っている場所は限られている、希少な品だ。

（ミールの実か…東オルベ通りの薬草屋さんにあったような…）

どうせ作るなら、こだわっておいしいものを作りたい。

東オルベ通りは少し遠いが、リシエルは買いに行くことにした。

シグルトに頼まれた小説と、アップルパイのレシピの載った本を
買うと、店の出入り口へ向かう。

「おかあさん、これほしい」

途中、子供向けの絵本が並んだ書棚の前を過ぎる時、幼い女の子
の声が耳に入った。

「絵本なら、こないだ買ってあげたばかりでしょう？」

女の子と手を繋いでいる、母親と思われる女性が優しく言い聞か
せる。

「こないだのと、ちがうのだもん」

少女は口を尖らせ、主張する。どこか甘えたような響きもあった。

「困ったわねえ…ほんとに絵本が好きなんだから…」

母親は、口では困ったと言いながら、柔らかな微笑みを浮かべている。

娘を見る目には、愛しさが溢れているようだ。

リシエルは一瞬、足を止め、親子を見つめていた。

胸がざわつく。

昔からそうだ。

親子連れや、仲の良さそうな家族を見ると、胸にぽっかり穴が空いたような、落ち着かない気持ちになる。

家族――

普段は見ないようにしている、本当はずっと心に空いている穴。シグルトがいつも傍に居てくれたから、寂しさはほとんど感じなかったけれど、その穴がなくなるわけではなかった。

ふとした瞬間、意識してしまう。

自分にも、どこかに家族がいるのだろうか――？

その可能性がないに等しいのは分かっている。

リシエルが拾われた、カロンの村は国王軍と反乱軍の激しい戦いで壊滅状態に追いやられ、生き残っている人間もないという。シグルトもリシエルの家族を探してくれたらしいが、結局見つからなかったらしい。自分に家族がいたとしても、きっともう生きてはいないのだろう。

それでも――もし記憶を取り戻せたら、あるいは――

自分の本当の名を知る家族に会えるかもしれない。

リシエルはその想いを捨てきれないでいる。

＊ ＊ ＊

「おや、お嬢ちゃん、好きな人でもできたのかい？」

「え？」

東オルベ通りにある、小さな菓草屋。

店番をしている老婆に、ミールレの実があるかどうか尋ねると、老婆はにやにやと笑った。

「ち、違いますけど…な、何ですか？」

「知らないのかい？ ミールレの実はね、惚れ菓の原料なのさ。まあ、本格的な惚れ菓なんて、材料揃えるのが難しくてなかなか作れないけどね、ミールレの実を入れた料理を意中の相手に食べさせる…っていう一種のおまじないが、若い娘たちの間で流行ってるのさ。なんかの小説に出てきたらしいけど、おかげでこっちは商売繁盛させてもらってるよ」

（それってまさか、先生の読んでる小説じゃないよね？）

ミールレの実が入っているとわかったら、シグルトはまたからかってくるに違いない。

「隠し味にアップルパイに入れるとおいしいって、本に書いてあつて…」

「アップルパイ？ ああ、そういうえば昔、同じようなこと言って、よくミールレの実を買いに来てた子がいたねえ…私も気になって作ってみたけど、ありゃ絶品だね」

おいしいと聞いて安心したが、同時に心配になる。

「あの…食べたならミールレの実が入ってるって、わかっちゃいますか？」

リシエルの問いに、老婆は笑った。

「なんだ、やっぱり好きな人に食べさせるんじゃないか」

「ち、違いますってば…」

「安心しなよ。粉末にして入れれば、まずわかんないから。そんなしょっちゅう口にするもんじゃないしね」

老婆は背後にある柵から、網籠を引っ張り出す。

「お嬢ちゃん、運がいいよ。ミールレの実、残り一つだ。幸先がいいねえ」

「ですから、本当にそんなんじゃない？」

「なんなら、作り方教えてやろうか？ お嬢ちゃんの恋がうまく行くように」

「本当ですか!？」

すっかり誤解されているようだが、有り難い申し出だった。老婆は片目をつぶってみせる。中身は外見より若いようだ。

「ああ、わたしや恋する乙女の味方さ」

＊ ＊ ＊

「遅くなっちゃったなあ…」

老婆にミールの実の粉末の作り方、アップルパイを上手く作るコツなどを聞き、さらに老婆の若かりし頃の恋愛話——これが長かった——を聞かされるうちに、時間はあつという間に過ぎ、気づいたらすっかり日が暮れていた。

昼間はあれだけいた、通りを行きかう人もめっきり減っている。通りに沿って立つ外灯に、ローブを着た、何人かの男たちが手を翳しているのが見えた。ぱっと外灯に明かりが灯る。男たちは、並んでいる外灯に順番に手を翳し、明かりを灯していく。リシエルはしばらくその様子を眺めていた。彼らは、役所に勤める下級魔道士たちだ。

魔術学院を優秀な成績で卒業した者は、たいていはエテルネル法院に仕える魔道士に弟子入りし、法院の仕事をこなしながら、技を磨き、より高位の術を修得していく。特別優秀なパリスのような者は、導師の弟子となることもある。だが、それ以外の卒業者、際立った才のない者の多くは、役人になったり、魔法医になったり、法院の外で、それぞれの道を見つけていく。

法院の魔道士たちは、そんな法院の外で働く魔道士たちを、エリート自分たちとは違う、能力の低い者として馬鹿にしていた。

その馬鹿にされている魔道士たちでも、ああやって闇に光を生み出すことができる。リシエルにはそれすら出来ない。

リシエルは卑屈になりそうな心を振り払うように、足早に家路を急いだ。

日が暮れる前に帰ると言ったのに、こんなに遅くなってしまった、きつとシグルトは心配しているだろう。

少し迷ったが、リシエルは近道を使うことにした。

大きな通りから、狭い裏通りに入る。

設置されている外灯は大通りよりはるかに少ないため、通りは薄暗く、夕食時で通る人もいない。

少し怖かったが、以前にも遅くなってしまった時、この道を使ったことがある。

それに、これ以上遅くなって、シグルトを怒らせる方が怖かった。シグルトは普段優しいし、ほとんどのことは適当なのだが、リシエルの門限にだけはかなり厳しいのだ。もうすぐ成人なのだから少しくらいいいじゃないか、と思わなくはないが、それが4年前の出来事が原因だとわかっていただけに、リシエルも文句は言えない。

リシエルは急く気持ちのまま、足早に歩いていく。

角を曲がろうとした時だった。

どんっ！

正面から何かにぶつかり、リシエルは足を止めた。

同じく反対から角を曲がろうとしていた人にぶつかったらしい。

「あ、ごめんなさ——」

反射的に言いかけ、ぎよっとした。

ぶつかった男が、顔に覆面をしていたからだ。

顔を覆う黒い布の、二つ切り抜かれたところから、眼だけがのぞいている。

近くにある外灯の明かりに照らされ、爛々と輝いている様気が不気味だった。

男は無言でリシエルに掴みかかってきた。

恐怖で悲鳴を上げようとするが、出来なかった。

背後から別の男の手が伸び、布で口を塞がれたからだ。

甘い香りが鼻腔をつく。

（ネルン草…！？）

睡眠薬の原料として使われる植物だ。

濃縮されたその香りを嗅げば、数秒で眠りに誘われる。

リシエルは吸い込むまいと、必死で抵抗する。

「こら、大人しくしないかっ！」

目の前の覆面の男が怒鳴る。

不意に、その覆面がぼやけた。

頭がぼんやりとし始める。

急速に体の力が抜けていく。

たまらず膝から崩れ落ちようとしたところを、背後の男に支えられる。

「よし、効いてきたな」

リシエルの口を押さえている男が安堵したような声を漏らす。

「お前、びびってたのか」

覆面の男が嘲るように言った。

「だって、もし術使われたら…」

「大丈夫だって言われてただろーが」

「そうだけどさ…」

男たちの会話が、一枚膜を通して聞いているかのように、遠くへ
っていく。

怖い。

4年前に感じた、あの恐怖が蘇る。

（先生！）

シグルトの顔を強く想い浮かべる。

4年前のあの時、そうしたように。

（先生！ 助けて！）

今にも失いそうになる意識の中で、リシエルは叫んでいた。

そのとき――

「のわあっ！」

耳元で悲鳴が上がると同時に、自分を拘束していた男の力が弱まる。

支えを失って、リシエルは地面に投げ出された。

口元に充てられていた布もはずされ、リシエルは夜のひんやりした空気を吸い込み、むせた。

「な、なんだ貴様っ!？」

「ぐわっ!!」

背後で人の争う気配がする。

カランと、石畳の上を何か硬質なものが叩く音が2回。

ドゴッと、鈍い音が数回。

「ひっ！ 強い！」

「逃げるぞ！」

最後は石畳の上を走り去る足音が、狭い道に反響する。
朦朧としていた意識が、急速に覚めていく。

「せ、んせ…？」

シグルトが助けに来てくれた。

4年前の、あの時みたい。

そう思い、リシエルは地面に尻もちをついたまま、後ろを振り返る。

だが、そこに師の姿はなかった。

立っていたのは、一人の騎士。

鞘に納めたままの剣を片手に、じっとリシエルを見下ろしていた。
外灯の明かりで照らされた、その髪と瞳の色は、黒――――

11 エリック

(黒い瞳に黒髪…)

思わずまじまじと騎士を見つめる。

年の頃はリシエルより少し上くらいだろうか。大人びた整った顔立ちのせいか、冷たい印象を受ける。薄緑の騎士服の上に茶色のマントをはおっていた。

騎士は鞆を腰のベルトに吊るすと、

「…立てるか？」

リシエルに手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

リシエルは騎士の手を取ると、よろよろと起き上がる。

ネルン草の香りを嗅がされたせいで、まだ少し頭がふらふらとした。

「あ」

よろけたリシエルを、騎士の腕が支えた。

騎士の整った、伶俐な顔に間近に見つめられ、リシエルは赤くなつた。

シグルト以外の男に、こんなに間近に近寄ったことはない。

「す、すみません！」

慌てて離れる。

騎士は表情を変えず、じっとリシエルを見つめる。

「あの…?」

「…お前、魔道士じゃないのか?」

問いかけられ、リシエルは自分のローブを握りしめた。
騎士の言いたいことはわかった。

ローブを着ていたし、リシエルの瞳の色は、常人にはありえないもの。誰もが魔道士だと判断するはずだ。

魔道士なのに、なぜ魔法を使って身を守らなかった?
そう騎士は言いたいのだ。

「一応、そうです…」

「一応? 術は?」

「その、まだ新米なもので…」

6年も魔道士の、それもエテルネル法院の導師の弟子をやっています、とは恥ずかしくてとても言えない。

「そうか…」

それで納得してくれたのか、騎士は深くは追求しなかった。

「家はどこだ? 送ろう」

「あ、いえ、そんな」

正直また夜道を一人で歩くのは怖かった。だが、人見知りのリシエルには、見ず知らずの人にそこまでしてもらうのも勇気がいる。

「また襲われるかもしれないだろう」

「え、また？」

「あいつら、ただの通りすがりの暴漢じゃない」

「え？」

思わぬことを言われ、リシエルは目を丸くする。

ただの暴漢じゃない？

「お前のその格好を見れば、誰だって魔道士だと思う。ただの物盗りや、女に悪さしようとする奴なら、魔道士は絶対狙わない。魔法が怖いからな。あいつら、お前が魔法が使えないってこと、知ってたんじゃないのか？」

騎士の推測に、背筋がぞくりとする。

誰かが自分を狙って、襲ってきた――？

「誰かから恨まれてるとか、心当たりはないのか？」

リシエルは首を振った。

自分を恨んでいる人間。

確かに法院内の魔道士の多くが、自分を疎ましくは思っているかもしれない。だが、襲ってどうこうしようという程、恨まれる覚え

はない。

「お前じゃなくても、お前の身近な人間とか、な」

「身近な人間…先生？」

リシエルにとって、最も身近な人間。シグルトが誰かから、恨みを買っているというのか。

「先生？ お前の師か？ そいつが誰かから恨みを買っていて、とばっちりを受けたのかもな」

騎士の声はどこか冷ややかだ。

「まさか。ありえないです。先生は、恨みを買うような、そんな人じゃありませんから」

リシエルは強く否定した。
いつも穏やかで優しい師。彼が誰かから恨みを買うわけがない。
騎士はなぜか眉をひそめる。

「……信じてるんだな、そいつのこと」

「はい。私の恩人ですから」

「…恩人、か」

騎士が口の端を吊り上げた。
自分を助けてくれた人ではあるが、なんとなく不愉快に感じた。

「まあいい。家まで送る。どこだ？」

「…西シャトラン地区の8番街です」

「貴族街の端のほうだな。行くぞ」

有無を言わず、騎士は歩き出す。

リシエルは一人で帰る勇気をもう完全に失い、黙って後に従った。騎士は黙々と進んでいく。なんとなく、ではあるが不機嫌そうである。

家まで送る、と言ってはくれたが、内心は面倒事に巻き込まれてしまったことを悔やんでいるのかもしれない。

まだ家まではかなり距離がある。

このまま沈黙が続くのも気まずいので、リシエルは思い切って、前を歩く騎士の背に話かけた。

「あの…お名前伺ってもいいですか？ あ、私、リシエルと申します」

「…エリックだ」

無視されるかもしれない、と思ったが、きちんと返事が返ってきた。

「エリック…さん」

リシエルは、時折外灯で照らされる、エリックの黒髪を見つめる。自分と同じ、この国では珍しい黒髪。

「エリックさんは、もしかして大陸東方部のご出身ですか？」

「…いや」

「違うんですか？」

「この国で生まれ育った」

「そうなんですか。黒髪、この国だと珍しいから…」

「お前も黒髪だろう」

「そうですけど…」

それきりリシエルもエリックも黙りこむ。

会話が続かない。

エリックがごく短い返事しか返さないため、会話が得意ではないリシエルは、上手く話題を広げられない。

気まずい沈黙の中、二人は夜道を進んだ。

靴音だけが、石畳の道に響く。

しばらくして、エリックから口を開いた。

「…お前のその、瞳の色…」

「はい？」

沈黙が破られたことに、いくらかほつとして、リシエルは顔を上げる。

「それ、魔力の影響か？」

「多分、そうだと思います」

「多分？」

歩みは止めないまま、エリックが怪訝そうに顔だけ振り返る。

「この瞳の色は子供の時からなんですけど、私、10歳より前の記憶がないんです。ほら、6年前にカロンで国王軍と反乱軍の衝突があったじゃないですか。私、カロンの雪山で倒れていたところを、師に拾って頂いて…リシエルっていう名前も、先生がつけてくれたんです」

自分から誰かに身の上話をするのは、初めてだった。

また気まずい沈黙が来るのを避けたかったからかもしれない。

「記憶…ないのか？」

「はい」

「まったく？」

「はい、まったく」

リシエルの記憶の始まり。

それは、自分を心配そうに覗きこむ、シグルトの顔だった。

それより前のことは、今日に至るまでまったく思い出せない。

「何にも思い出せないんです。先生が魔法をかけて、記憶を呼び戻そうとしてくれたこともあるみたいなんですけど、それもまくいかなかったみたいで…」

「……」

「でも、諦めるつもりはないんです。頑張って魔道士になって、私の本当の名前を知る、家族に会いたいから……」

「……そうか」

ふつと——エリックの表情が柔らかくなった。

微笑んだ、と表現するにはあまりにも小さな変化だったが、リシエルはどきりとした。

胸に温かいものがじんわり広がる。

何かとても貴重な、大切なものを見た気がした。

自分でもよくわからない想いを誤魔化そうとするように、リシエルは尋ねた。

「エリックさんは、ご出身はどちらなんですか？」

自分の重い身の上話から、話題を変えようとしたつもりだった。

だが、エリックの顔が一瞬で強張った。それを隠すように再び顔を前へ向ける。

意外な一言がその口から発せられた。

「……カロン」

「え？」

「俺もあの戦いで、すべてを失った……」

リシエルは動揺した。

自分の記憶の手掛かりとなるかもしれない、カロンの生き残り――
シグルトが手を尽くして探して見つからなかったのに、こんなところで会うとは信じられなかった。

「そんな：先生はあの戦いで、生き残った人はいないって：」

言った途端、突然エリックが足を止め、振り返った。

端正な顔に、明らかな苛立ちと怒りが見えた。

「お前、本気で記憶を取り戻したいと思ってるのか？」

発せられる声も、鋭く、冷たい。

「え？それはもちろん：」

彼は明らかに怒っている。

一体何が逆鱗に触れてしまったのか。

彼のがわからない。

戸惑うリシエルを見下ろしながら、エリックが言い放つ。

「じゃあ、6年前、あの日、あの場所で、何があったのか、自分の力できちんと確かめろ。それしか真実を知るすべはない」

意思の強そうな黒い瞳が、まっすぐリシエルを捕えていた。
睨んでいると言ってもいい、その目。

なのに――

どこか泣きそうに見えるのはなぜだろう？

「それはどうい――？」

「リシエル！」

背後から聞き慣れた声がした。

振り返ると、シグルトが不安と安堵の入り混じった表情で立っていた。

家まではまだ距離がある。

帰りの遅くなったリシエルを心配して、探しに来てくれたに違いない。

「あ、先生。遅くなってごめんなさ…」

心配をかけてしまった申し訳なさに、謝ろうとするが、言い終わることはできなかった。

駆け寄ってきたシグルトに強く抱きしめられ、圧迫された肺から空気が言葉にならずに出て行ってしまう。

「こんなに遅くまで一体何してたんです！？ 心配したんですよ！」

「……あんたがそいつの保護者か？」

男の声に、シグルトは視線を、腕の中のリシエルから前へと向けた。

黒髪の騎士の姿を認め、シグルトの目がずっと細められた。

リシエルを抱く腕に力がこもる。

「…あなたは？」

「保護者ならこんな時間に若い娘一人、出歩かせないことだな」

騎士は問いには答えず、まっすぐにシグルトを見た。
そこにあるのは、明確な敵意。

紫の瞳と、黒い瞳が刹那、交差する。

リシエルは両手でシグルトの胸を押し返して、少し離れると、師を見上げた。

「実はさっき変な人たちに攫われそうになって…」

「攫われそうになった？ 怪我は!？」

シグルトはリシエルの無事を確認するかのように、彼女の頬を撫でた。

「大丈夫です。この方が、エリックさんが助けてくれましたから」

リシエルは自分を救ってくれた恩人を振り返る。

「…そうでしたか」

シグルトはいつもの人懐っこい笑顔を作り、騎士に向かって言った。

「弟子を助けて頂いて、本当にありがとうございます。なんとお礼を申し上げてよいか…」

「…別に。暴漢共には逃げられたしな」

エリックはシグルトから顔を背けた。

「しかし、人攫いとは…地方だけの話かと思っていましたが、王都

も物騒ですね…警備隊に夜間の見回り強化をお願いしなければ」

シグルトが優しくリシエルの頭を撫でながら言う。

奴隷制が廃止され、人身売買を禁じる法が施行されて久しいが、いまだにそうした商売は秘密裏に行われている。

「…ただの人攫いじゃないかもな」

「どういう意味です？」

エリックの小さな呟きを、シグルトは聞き逃さなかった。

「…師匠が“紫眼の悪魔”じゃ、誰から恨みを買ってもおかしくない」

エリックは視線をシグルトに戻すと、口元に薄く、決して好意的とは言えない笑みを浮かべながら言った。

シグルトの眉が不快そうにぴくりと動く。

「…おや、よくご存知で。あなたは一体？」

「別に。あんた有名人だしな」

「しかし、その不愉快な二つ名…私のことをそう呼ぶのは、軍の関係者くらいですよ…」

師と恩人の間に流れる不穏な空気を感じて、リシエルはおろおろと二人を交互に見やる。

初対面であるはずなのに、エリックの言動は明らかにシグルトへの敵意が感じられた。

「王都では見かけない騎士服ですが、どちらの騎士団所属で？」

「気にするな。所属ももうすぐ変わるしな」

「…アーデン騎士団、ですか」

シグルトの言葉に、今度はエリックが眉を動かす。

「噂で聞きました。東の国境を守るアーデン騎士団で、凄腕の傭兵が騎士に昇格し、異例だが今度新設されるクライル王子直属の騎士団に招かれたらしい、その人物は黒髪の若い男だ、と」

「魔道士っていうのは魔法のことにしか関心がないのかと思ったら、意外に耳が早いな」

エリックは鼻先で笑った。

「世間に興味の無い私ですら知っているくらい、あなたは今注目の有名人なんですよ、エリックさん」

シグルトの声は穏やかだったが、何か含むような言い方だった。

「…大魔道士様にはかなわないけどな」

エリックは一度リシエルを見た後、再びシグルトへ視線を戻し、

「誰かの恨みが原因なら、またそいつ狙われるかもな。せいぜい気をつけるんだな」

「ご心配なく。この子は私が守りますから」

何の危険もないと言わんばかりに微笑みながら答えるシグルトを睨んだ後、エリックは踵を返す。

「あ、待って下さい！」

リシエルは師の腕からするりと抜け出すと、駆け寄る。

「お礼がしたいんですけど…よかったらお茶でも…」

「…結構だ」

エリックは振り返りもせずと言う。

「でも…あの、私…！」

本当は、カロンのことが聞きたかった。

あの村の出身なら、記憶を取り戻す手掛かりを与えてくれるかもしれない――

「リシエル」

なおも食い下がるうとするリシエルに、シグルトが静かに言った。

「もう夜も遅いし、この方もかえってご迷惑でしょう」

「…はい」

師の言う通りだ。助けてもらった上に、送ってもらった。これ以

上迷惑は掛けられない。それに、理由はわからないが、彼は明らかに師を嫌っている。一緒にお茶などしたくはないだろう。

リシエルはうなだれ、ぺこりと頭を下げた。

「エリックさん、今日は助けて頂いて、本当にありがとうございます」

エリックはやはり、振り返らない。

だが、

「…また、な…」

そう彼の声で小さく聞こえたのは、聞き間違いだろうか。

リシエルは、歩き出した黒髪の騎士の姿を、彼が通りを曲がり、見えなくなるまで、じっと見送った。

11 エリック（後書き）

来週も日曜更新の予定ですが、事情によりなかなか執筆時間が取れない状況で、遅れる可能性があります。

なんとか更新できればと思っておりますが、どうぞ宜しくお願い致します。

12 二つ名

「…なるほど。初めから君を狙ってた、か」

リシエルから話を聞き終えると、シグルトは眉をひそめた。

家に戻ると、居間でセイラの入れてくれたお茶を飲みながら、リシエルは襲われた時のことをシグルトに話した。

エリックがカロンの出身だということは黙っておいた。それを知ればシグルトは、リシエルのためにエリックと連絡を取ろうとしてくれるだろう。だが、エリックはどうもシグルトを嫌っている。シグルトが間に入ると彼は協力してくれないのではないか。そんな不安があった。だから、カロンのことは、自分が直接エリックと会って話したかった。

それに、エリックに6年前何があったのか、自分の力で確かめろと言われたことも引っ掛かっていた。

リシエルが知る6年前の事件の内容は、すべてシグルトから聞かされたものだ。もちろん師のことは信じているが、それが全て正しいわけではないのかもしれない。そう思い始めていた。現に、カロンに生き残りはいないと言われていたが、こうして目の前に現れた。シグルトの話だと、エリックはクライル王子直属の騎士団に入るようだし、きっとこれから王都にいるはずだ。師に頼らずとも、居場所もすぐ調べられるだろう。しばらくしたらお礼の名目で訪ねてみるつもりだった。

シグルトは組んだ手の上に顎をのせ、しばらく考え込んでいる。リシエルはおそらくシグルトが考えているであろうことを口に出した。

「先生、4年前と同じ目的、でしょうか？」

「…その可能性もありますね」

4年前。リシエルが12歳の時も、誘拐されそうになったことがある。

犯人は、シグルトの家に住み込みで働いていた中年の夫婦とその息子だった。リシエルを引き取ると同時に、シグルトが雇った使用人たち。

あの時のことを思い出して、リシエルは身震いした。

あの日、リシエルは風邪を引いてた。シグルトは心配して仕事を休もうとしたが、その日はたまたま国王と六導師の会議があり、どうしても行かざるおえなかった。

寝込んでいたリシエルが熱を出し始めると、使用人夫婦は、近くの医者に行こうと言って、リシエルを馬車に乗せた。息子が御者を務め、走り出した馬車に揺られて、リシエルはいつの間にか眠っていた。

目が覚めた時には、見知らぬ部屋のベッドの上。口には猿ぐつわを噛まされ、体は固いロープで縛られていた。

あの時、横たわる自分を見つめていた彼らの目を、リシエルは一生忘れられない。

2年間、一緒に暮らし、いつだって優しくかった彼らが自分に向けて、感情の籠らない、冷たい目。

信じていた人たちの裏切り。

ただひたすら悲しかった。涙がこぼれた。

彼らはリシエルを乱暴に扱うことこそしなかったけれど、一言も話さず、義務的に食事を与え、物を見るような目で彼女を見た。

どうして、と尋ねても、答えはなかった。

リシエルにとって、不安と、恐怖と、悲しみしか抱けないその時間、永遠に思えた。

しかし、この誘拐事件はあっけなく終わる。

熱にうなされ眠っていたリシエルが目を覚ました時、そこには自分を覗きこむシグルトの優しい顔と、彼によって気絶させられ、床に横たわる犯人たちの姿があった。

それが彼らを見た最後だった。

彼らは、多額の借金を抱えており、身の金目的でリシエルを誘拐した。今は警備隊に引き渡され、牢の中だ。仮にも導師の弟子を誘拐しようとした彼らの罪は重く、そう簡単には牢屋から出ることはできない。シグルトはそう説明し、安心しなさいと微笑んだ。

そして、次の日にはセイラという新しい使用人を連れてきた。

たった1日の出来事。

でも、リシエルにとって、忘れられない心の傷だった。

普段見えている顔の下に潜む、思いもよらない裏の顔。

そういう人間の怖さを知ってしまったのだ。

「でも、ただの金目的の不屈き者が、君が魔法を使えない、ということを知っていた：というのは気になりますね」

落ち着いて思い出すと、ネルン草をかがされ、薄れていく意識の中で、犯人たちが術を使われる心配はないと言われたから大丈夫、というような会話をしていた気がする。

彼らは誰かからリシエルが魔法を使えないということを聞いて知っていたのだ。

「そんなことを知っているのは、法院の魔道士だけでしょう」

プライドの高い、エテルネル法院の魔道士たち。彼らにとって、魔法が使えない者が導師の弟子をしていることは、法院の恥である。その彼らが、安易にそれを部外者に漏らすとは考え難かった。

「とにかく、君はしばらく一人で家から出ないこと。出る時は、私

かセイラと一緒に。いいですね？」

「…はい」

リシエルは素直に同意した。ミレの実はもう手に入れたし、狙われている可能性がある以上、一人で外出するのも怖かった。エリックを訪ねるのは、彼の居場所を調べてから時期を見計らえばいい。不安げなりシエルに、シグルトは安心させようとするかのように微笑んだ。

「大丈夫ですよ。君は私が絶対に守りますから」

その言葉の力強さに、リシエルの心が軽くなる。

（大丈夫。私には先生が：最強の魔道士がついてるんだから）

実はシグルトがどれほど強い魔道士なのかは、リシエルにはよくわからない。

なにしろ、シグルトがリシエルの前で今まで使った魔法は、うつかりつけたかすり傷の治癒か、水を湯に変える、くらいなのだ。それくらいは下級魔道士でもできる。

誘拐事件の時も、目が覚めた時には犯人たちは気絶していて、シグルトが何かの魔法を使ったということは推察できたが、実際にそれを目にはしていないのだ。

なかなか魔法を教えてくれないので、もしかして本当は大した魔法が使えなくて、それがばれるのが怖いのでは…と疑ったことすらある。

大魔道士とは思えぬ、日頃の怠惰な言動が、その疑いを強めた。

だが、師の実力に対する周囲の評価は驚く程高かった。

ブランも「あいつには絶対勝てない」と言っていたことがあるし、

神童と言われるパリスに「大陸一の魔道士」と熱烈に崇拝されている。

魔道士ではない、このヴァーリス王国の人々にも、その实力は知れ渡っており、

“第2次統一戦争の英雄”

“ヴァーリスの守護者”

“伝説の大魔道士ガルディアの生まれ変わり”

などなど、様々に呼ばれているらしい。そのほとんどは、好意的な、彼を讃えるものばかり。

さすがに、師が相当の実力者であるらしい、ということは認めざるおえない。

ふと、リシエルはエリックの言葉を思い出した。
躊躇いながらも、気になって確認する。

「あの、エリックさんが言ってた“紫眼の悪魔”って…先生のことですか？」

言った途端、シグルトの表情が曇り、リシエルは後悔した。

「…ええ。隣国との戦争が激しかった頃、そんな二つ名で呼ばれたことがあります」

戦争でついた二つ名。

それは、自分の知らない師の過去を表しているように思えた。

シグルトは自嘲気味に笑う。

「私が誰かから恨みを買っている…という彼の推測は、当たっているのかもしれませんが」

「そんな…先生を恨む人なんて、いるんですか？」

リシエルにはどうしても信じられない。

いつも穏やかで、声を荒げることもなければ、金や物に執着することもなく、一緒に長い間暮らしてきて、誰かと争っているのを見たこともない。

「前にも言ったでしょう？ 私は、君と出会う前、この地位に就くまでに、酷いことをたくさんしてきた、と」

そう言うシグルトの瞳は悲しげで——胸が締め付けられた。

「あの日、君と出会った日も、私はまた一つ、取り返しのつかない罪を重ねた。その重さに耐えかねて、もう死んでしまいたい、とすら思いました。それでも生きようと思ったのは、君のおかげです」

「私？」

「無邪気に眠る、幼い君の寝顔を見て、とても安らかな気持ちになったんです。何も遅くはない。今からだって、やり直せる。今まで奪うこと、壊すことにしか使ってこなかった自分の力を、大切なものを守ることに使おうと、そう決意できた。君と出会って、私は生まれ変わろうと思えたんです」

シグルトは柔らかく微笑んだ。

「そんな、私、何も…」

「そうです。君は何もしていない。そして何も知らない。私の重ねた罪のこと、この汚れた世界のこと…君という存在は完全に無垢で、その無垢さを守りたい、そう思いました。そして、君となら全てを

やり直せる、と…」

シグルトの紫の瞳がじっと見つめてくる。

いつもと変わらぬ、穏やかな優しさを湛えた瞳。

でも、その奥に常とは違う、何か熱のようなものを感じて、リシエルは戸惑った。

自然と鼓動が速くなる。

師の瞳に、この熱を感じることはたまにあった。

何かを待ち焦がれているような、切望しているような、そんな熱を持った瞳。

「わ、私、先生に拾って頂いた時のこと、よく覚えてます」

なんとなく落ち着かない気持ちになって、とりあえず口を開く。

このまま黙って見つめていたら、吸い込まれてしまうような気がした。

リシエルにとって、記憶の始まりである、シグルトとの出会い。

頭の中でその時のことを呼び起こす。

「目を開いたら、先生がいて――」

灰色の空を背景に、シグルトは苦しげに顔を歪めて自分を覗きこんで――

（あれ？）

頭に浮かんだ映像に、違和感を覚える。

苦しげに顔を歪めて？

違う。

あの時シグルトは、心配そうな表情で自分を見下ろしていた。

だとすれば、今浮かんだ映像は一体何なのか？

別の時に見た記憶だろうか。

でも、あんな苦しそうな表情のシグルト、見たことがない。

まるで、今にも泣き出してしまいそうな――――

「リシエル？ どうしました？」

シグルトの声にはっと我に返る。

急に黙り込んでしまったリシエルを、怪訝そうに見ている。

「いえ、なんでもありません。 ちょっと疲れてて……」

「無理もありませんね。 あんなことがあったんですから……もう休んだ方がいい」

「すみません……お先に失礼します」

疲れているというのは本当だった。 リシエルは立ち上がり、居間のドアへ向かった。

「リシエル」

呼びかけられて、振り返る。

シグルトが無邪気とも言える笑顔で言った。

「今日一緒に寝ますか？」

「え、ええ！？ ね、寝ませんよ！」

急に何を言い出すのだ、この師匠は。

「そうですか。小さい頃は、怖いことがあると、よく私のベッドにもぐり込んで来たのに…残念です」

シグルトはわざとらしく肩をすくめた。

確かに4年前の誘拐事件の時は、怖くてしばらくの間、シグルトのベットで一緒に寝ていた記憶がある。

「そ、それは小さい頃の話ですから！」

「ほんの4年前の話なんですけどね。私はいつでも大歓迎ですよ」

「行きませんって！」

昔を思い出し、頬を赤らめて否定するリシエルに、シグルトはくすりと笑う。

絶対にからかっている。

「寝ます！　おやすみなさい！」

リシエルはそれだけ一方的に言って、そそくさと居間を出て行った。

シグルトは弟子を微笑みながら見送る。

階段を駆け上がっていく音が消えてから、テーブルの上にある、今日弟子に買ってきてもらった小説を手にとった。

「さて、こちらもそろそろ動き出す頃ですかね」

そう呟いて、本を開いた。

13 知らない瞳

一面に咲く、薄紅色の可愛らしい花。

心地いい風が花々を一つの方向へとそよがせる。

薄紅色の花畑の中に、少女の姿を見つけて、少年はほっと一息ついた。

「エレナ！」

呼び声に、しゃがみこんでいた少女が立ち上がり、振り返る。

「ここにいたのか…心配したんだぞ」

駆け寄った少年は、少女の艶やかな黒髪を撫でてやった。

少女の手の中には、編み上げられた花冠があった。

「これ…アーシエに…」

少女は、小さな、ほとんど聞き取れないほどの声で言った。

「アーシエのために作ったのか？」

少年の言葉に、少女はこくんと頷く。

「エレナはアーシエが好きなんだなあ」

少年は優しく微笑んだ。

「アーシェ…私、大好き…」

少女は大きな黒い瞳で少年を見上げる。

「エリックも、アーシェ、好き…」

少年の頬がかあっと熱くなった。

「あ、いや、俺はだな…あんな気の強い女はだな、男友達みたいなもんでさっ」

「アーシェのこと…みんな大好き…」

しどろもどろになる少年に、少女は構わず続ける。

「あ、うん、そうだな。あいつ、みんなに慕われてるよな」

少年はほっとしたようにいい、それから笑った。

「しかし、なんで花冠なんだ？ あいつがそれしてたらちよつと笑えるな」

少女は真面目な顔のまま、小さな声で言った。

「アーシェは…聖女様…」

「まあ、確かにそんな風に言ってる奴もいるけどな…母性も色気もない、凶暴な聖女様もいたもんだよな」

「悪かったわね。母性も色気もない凶暴な女で」

突然背後からかかった声に、少年は顔を引き攣らせて振り返った

目が覚めた。

ゆっくりと寝台から身を起こす。

また、夢を見た。

彼女に会ってしまったせいかな、今日の夢はとりわけ鮮明だった気がする。

自分の人生の中で、唯一幸せだった頃の夢。

夢の中の自分は、この幸せがいつまでも続くと信じて疑っていない。

多分、彼女も。

あれが束の間の幸せだと知っていたのは、一人だけだ。

突然ドアがノックされた。部屋の主の返事を待たずに開かれる。

「エリック、あの娘と接触したそうだな」

扉から現れた男は、ずかずかと遠慮なく部屋に足を踏み入れ、ベットの傍まで来ると睨みつけてくる。

エリックはため息をつく、頭をがしと乱暴に掻いた。

「別に問題ないだろ」

「大アリだ」

「襲われてたんだ。助けないわけにいかないだろう」

エリックは顔を上へ向けた。

男の深い緑色の瞳が鋭く自分を見下ろしていた。ただし、右目だけ。左の目は黒い眼帯で覆われている。その眼帯と、浅黒い肌と彫りの深い顔立ちのせいで、まるで海賊のようだ。緑色がかった長い髪は後ろで束ね、左肩の上に垂らしていた。

「それはいい。あの娘にはどのみち近づく予定だったしな。問題なのはシグルトと接触したってことだ」

眼帯の男は苛立たしげに眉を寄せる。

「前にも言ったろう。あいつは鋭い。見かけに騙されるな。お前のことだって、もしかしたら…」

「ああ、気づいてただろうな。あれは」

エリックは口元に薄く笑いを浮かべた。

あの時——リシエルを挟んで、シグルトと対峙した時。

シグルトの全身から立ち上った、殺気。

笑顔こそ崩さなかったが、彼はその殺気を隠そうとはしていなかった。

彼はおそらく気付いたのだ。

目の前にいる男が、6年前のあの時の少年だ、ということに。

眼帯の男はため息をついた。

「…わかってるのか？あいつに気付かれたら、俺たちの計画は潰さ

れる。今度こそ、終わりだ」

「へえ、エテルネルの導師なんて大したことないんじゃないのか？日頃大口叩いてるあんたでもあいつが怖いんだな」

エリックは馬鹿にしたように言った。

「ああ、怖いさ」

挑発で口にした言葉はあっさり肯定された。

「シグルトは導師の中でも別格だ。あいつの強さは…普通じゃない」

男の言葉に、エリックはゆっくりと頭を振った。

「わかってるさ…俺だって、あいつの力は目の前で見たんだから」

黒い閃光。

白い雪。

飛び散る赤い血。

頭の中を駆け巡った映像に、エリックはシートを強く握りしめた。

「で、どうだった？」

頭上から問いが降ってくる。

「何が？」

「あの娘だよ。確かめたいから尾行していたんだろう？」

エリックはシーツを握りしめる自分の手へと視線を落とした。

「よく…わからない…それほど話したわけじゃないし…本当に何も覚えてないみたいだった…」

「記憶がない、か。完全に消えたか、それともシグルトに封印されているだけか…それによってあの娘の利用価値が大いに変わってくるな」

エリックがきつと男を睨みあげた。男が口元に薄く笑いを浮かべる。

「気に障ったか？　だがな、俺はお前と違って、あの娘のことは単なる道具としか思っていないんだ。お前だって俺の目的は承知の上だろう？」

「…あんたの話が正しいなら、あんただってあの子に情があってもよさそうなもんだけどな」

「情なんて甘っちょろいこと言ったら、この戦争には勝てない」

男は肩をすくめた。

「情はないが、襲ってきた奴らについては今調査中だ。あれは“紫眼の悪魔”に対する切り札になるかもしれない、大切な“道具”だからな」

エリックの刺すような視線を避けるように身を翻すと、来た時と同様、ずかずかとドアへ向かい、

「とにかく、勝手な行動は慎めよ」

最後に釘を刺して部屋から出ていく。

足音が遠ざかると、エリックは後ろへ倒れ込んだ。

寝台に身を沈め、ゆっくり目を閉じる。

浮かんでくるのは、薄紅色の瞳。

自分を知らない瞳。

自分の知らない瞳。

「エレナ…」

小さな呟きが虚空に溶けて消えた。

* * *

「はあ？失敗したあ？」

目の前の少年の呆れ声に、居並んだ三人の男たちはびくりと肩を竦ませた。痩せぎずの男と小柄な男、それに中年の男が一人。

「も、申し訳ございません。邪魔が入りまして…次は必ず…！」

真ん中に立つ、商人風の中年の男が揉み手をしながら少年の顔色

を伺う。

「ちょっと勘弁してよ。2回目なんて、向こうも警戒してるだろ」

男たちよりはるかに年下の少年はビロードの張られた椅子にふんぞりかえり、彼らに軽蔑の眼差しを向ける。

「まさか、こんな使えない奴らだとは思わなかったよ」

「ど、どうかお許しを！ 次は、次こそは必ず！！」

中年の男は突き出た腹を揺らしながら、必死でぺこぺこと頭を下げる。

「…次って、いつを狙うんだよ。あの女、いつもシグルト様にべったりで、なかなか一人にならないよ。法院内にはお前たちは入れないし」

椅子の肘置きに肘を立て、頬杖を付きながらじっとりと睨んでくる少年に、男は媚びた笑顔を作る。

「もちろん、ちゃんと考えておりますよ。今度、リンベルト伯爵邸で夜会が催されるそうで、それに二人で出席するようです。そこを狙います。人が多い所では油断するでしょうし、かならず機会はあるかと…」

「ふーん…夜会ねえ…」

少年は青い目で、まるでその力量を推し量るかのように男をじっと見つめる。

男は冷や汗が浮き出てくるのを感じた。

「わかった。…次はしくじるなよ、ロドム」

「もちろんでございます!」

ロドムと呼ばれた男は、激しく頷く。

少年はその少女と見まごう程美しい顔立ちに、小悪魔のように妖しげな笑みを浮かべた。

「成功したら父上に、お前の商会にうちの領地のワインの占売権を与えてくれるよう頼んでやるからさ」

「あ、ありがとうございます! 必ずやご期待に添ってみせます」

「もう下がっていいよ」

唾を飛ばさんばかりの勢いで身を乗り出してきたロドムを、少年は手で追い払うようにして疎ましげに言った。

「失礼致します」

三人の男たちは、ぺこぺこ頭を下げながら、部屋を出た。

王城にほど近い、大きな屋敷。

その内装の豪華さは、王城にも引けを取らない。主の権勢の程が伺えた。

そのまま放り出されれば確実に迷ってしまう程、広い屋敷内を用人に案内され、外に出ると、男たちの顔に安堵が浮かんだ。

「しかしロドム様、あのお坊ちゃんの我がままには困ったもんです

ね…」

痩せぎずの男が漏らすと、ロドムが渋い顔をする。

「仕方あるまい。父親が我が商会の一番のお得意様なんだ」

「あの顔だから、女だったらまだ可愛げもあったのに…」

「あとう…」

一番小柄な男がおそろおそろ口を開く。

「今回の件、本当に大丈夫でしょうか？そこいらの娘を攫うのとは訳が違うじゃないですか。導師の弟子ですよ。ばれたらタダじゃ済まないんじゃない？」

「当たり前だ。下手をすれば首が飛ぶ」

「ひっ」

尋ねた男の顔が青ざめる。

「だが成功すれば格別の報酬を頂ける。だからお前たち、絶対にしくじるなよ」

ロドムは部下2人を睨みつけた後、待たせていた馬車に乗り込もうと近づく。

「待って、ロドムさん」

突然、後ろから若い男の声がした。

怪訝そうに振り返れば、さっきまで誰もいなかったはずの場所に、ローブ姿の男が立っていた。

深くフードを下ろし、顔は見えない。

「あなた様はもしや…？」

ロドムは目を見張った。

目の前の男が纏うのは、銀糸の刺繍が施された、濃紺のローブ。

「もし君のところに近々入荷する予定があったら、売ってほしいものがあるんだ」

フードの下から覗く、形のよい、赤い唇が、にいつと吊り上がった。

「黒髪の、可愛い女の子」

14 アップルパイ

「うぐぐうゝ固い！」

リシエルは低くうめき声を漏らす。

シグルトの家の台所。

リシエルはミールエの実を割るべく、一人奮闘していた。

明日はリシエルの誕生日。

今日は法院が休みで、シグルトもリシエルも家で過ごしていた。

天気がよく、昼食後にシグルトは一緒に散歩へ出ようと言っていた。

「先生：私、狙われてるかもしれないですよね？」

のほほんと散歩に誘ってくる師に対し、半ば呆れながら尋ねる。

「だからって家に引きこもる必要なんてありませんよ。私の傍から離れなければ、何の心配も入らないんですから。実際そうだったでしょう？」

師の言葉通り、事件後もリシエルは師について、いつも通り法院に通った。それどころか、師に連れられて夜会のための装飾品を街に買いにも行った。

自分がいるから大丈夫、という言葉に押されて、なるべく師の傍を離れないように気を付けてはいたが、普段通りの生活を送っていたのだ。

「むしろ私という時に襲ってきてくれれば、犯人を捕まえられるし、私も君に格好いいところを見せられるだろうし、一石二鳥なんですよがね」

シグルトは少し残念そうに言った。

いつ何時、誰に襲われようとも、リシエルを守り切る自信があるのだろう。

その自信の根拠となっている、皆が畏怖する師の実力を見てみたという気もするが、わざわざ危険な目にはあいたくない。

それに、今日はなんとしても家に居たい理由があった。

「私はいいです。お散歩は先生お一人でどうぞ」

そして、シグルトから離れたい理由も。

「そうですか。君が行かないなら私も行きません。君の傍を離れるわけにはいきませんからね」

事件以後、シグルトはリシエルを守るため、という理由で四六時中彼女を傍に置いて離さなかった。家でも風呂にまで付いてこようとしたので、さすがに怒って、入浴と就寝に関してはどうにか一人を守ったが、おかげでエリックの居場所もまったく調べられていない。

「大丈夫です。私、ちゃんと家にいますから。家なら安全って、先生が言ったんじゃないですか」

もともと、シグルトの家には防犯用に様々な術が施されているらしい。

導師の家に侵入しようとする度胸のある泥棒や強盗はいないのか、それらは一度も発動したことがないので、一体どのような術がこの古い家にかかっているのか、リシエルも知らないのだが。

「私、ちよつと一人で勉強したいですし」

「勉強するなら私がみてあげます」

「先生がいるとむしろ進まないじゃないですか」

シグルトは教え方は下手ではないのだが、すぐに話を脱線させる癖があった。正直、一人で勉強するほうがはかどる。もっとも今日は勉強する気はないのだが。

リシエルは駄目もとで付け加えた。

「身を守る魔法の勉強でしたら、喜んでお願いしますけど」

「君、最近冷たいですねえ…」

案の定、シグルトは頷かない。

「昔は私の後にくっついて離れなかったのに…年頃の女の子って本当に難しい…」

ぶつぶつ言いながら、

「じゃあ、私はお茶の時間まで一人さびしく昼寝でもしてようかな」
渋々自分の部屋へと引き上げて行った。
リシエルはほっと胸を撫で下ろした。

ようやく一人になれた。

今日は例のアップルパイを焼いて、シグルトを驚かすつもりだった。

明日も法院は休みだが、夜会の準備で昼から慌ただしくなりそうだったので、今日のお茶の時間に出すことにしたのだ。

事件以後、シグルトが自分の傍から離れないので、練習する機会も作れず、いきなり本番になってしまったが、なんとかなるだろう。そう思っていたが、甘かった。

ミールの実が割れない。ここまで固いとは：

木の棒でどんなに叩いても、全体重をのせてみても、殻にヒビひとつ入らない。

「リシエル様、何かお困りですか？」

台所に入ってきたセイラが、呻いているリシエルを見て声をかけた。

「うん、これを碎いて粉末にしたいんだけど、すつごく固くて：全然割れないの」

「碎けばよろしいのですね？」

言うなり、セイラはほっそりした白い右手に、ミールの茶色い実を包み込み、握りしめた。

すぐにバキツと音がする。

セイラが手を開くと、粉碎された茶色の殻と白い実が器にパラパラと落下していった。

「セイラって：何気に力強いよね」

見た目はとても華奢なセイラだが、固いビンの蓋をやすやすと開けたり、重い荷物を息も切らず運んだり、一体どこにそんな力が秘められているのかと、リシエルは常々不思議に思っていた。

「そうでしょうか？」

セイラは無表情のまま首を傾げる。

彼女は愛想笑いというものをしない。いつも無表情。

リシエルの知る限り誰に対してもそうで、主人であるシグルトすら例外ではない。

それはメイドとしては、もしかしたら失格なのかもしれない。

だが、それがむしろリシエルを安心させていた。

彼女には笑顔で飾られた表の顔が存在しない。表が無いなら、きつと裏も無い。

4年前の信頼していた使用人たちの裏切りで、少し人間不信になっていたリシエルも、セイラに対しては不思議な安心感を感じていた。

ふと、師のことが頭をよぎる。いつも微笑んでいるシグルト。師にも自分の知らない裏の顔があるのだろうか。

：きつと、あるのだろう。

詳しくは語ろうとしない過去に、それが隠されているであろうことが最近の出来事でわかってきた。

でも、それはもう昔の話だ。この6年間で築かれた師への信頼は、そう簡単には覆らない。

リシエルはセイラに礼を言って、殻から出てきた実をさらに木の棒で叩いて細かく砕いた。固いのは殻だけで、中のは実はクルミに似ており、簡単に潰すことができた。その粉末を皮をむいたリングの入った釜に入れ、じっくりと煮込む。そしてリングが煮崩れしないように、慎重にゆっくりとかき混ぜていく。

本と鼻を突き合わせながら、慣れない手つきながら熱心に作業を

進めていった。

セイラはしばらくの間その様子をじっと見ていたが、やがて静かに台所から立ち去った。

「よし、後は焼くだけ！」

悪戦苦闘しつつ、どうにか形になったパイの表面に溶いた卵を塗り、熱したオーブンに入れた。

後は待つだけなのだが、リシエルはその場を離れず、オーブンをじっと見守った。

中は見えないが、やがて甘い香りが漂い始める。

「ふあゝよく寝た。おや、何やらいい匂いがしますねえ。何か作ってるんですか？」

昼寝から起きたらしいシグルトが、匂いに誘われて、あくびをしながら台所に入って来た。

「あ、先生！ 入っちゃだめです！ 居間にいて下さい！ 今お茶をお持ちしますから！」

慌ててシグルトを外へ押し返す。

訝しげな顔をしながら師が居間へ消えたところで、オーブンへ駆け寄り、蓋を開けた。

「うゝん、おいしそう！」

こんがり黄金色に焼けたアップルパイにリシエルは満足げに声をあげた。

2人分切り分けてから、一口味見してみる。

「うん、成功！」

さくさくとしたパイ、ミールの実の隠し味の効いたほのかな甘み、リンゴの酸味。

今まで食したどのアップルパイよりも、おいしい。そう自信を持って言える。

初めて作ったのに、こんなにおいしく作れるなんて、案外お菓子作りの才能があるのかもしれない。

そんなことを考えながら、満面の笑顔でお茶のセットと共にトレイに乗せ、居間へと運ぶ。

シグルトはソファに腰掛けていた。

「おや、どうしたんです？ ご機嫌ですね」

「先生、私から先生へプレゼントです」

言って、アップルパイをのせた皿をシグルトの前のテーブルの上に置いた。

一体どうしたんです、君が作ったんですか、すごくおいしそうです。ね——師の口からそんな言葉が出るのを待った。

だが、訪れたのは、沈黙。

「……………」

見ればシグルトは、アップルパイを凝視したまま、動かない。

「先生？」

絶対に喜んでくれるはずだと思っていたのに、あまりの反応のな

さに戸惑ってしまふ。

「セイラに先生の好物だって聞いたんですけど…もしかして違いました?」

リシエルのしょんぼりした問いかけに、シグルトは我に返ったように笑顔を見せた。

ただ、それもどこか無理に作った感が漂っていた。

「いえ…大好物ですよ。そうですか、セイラに…」

アップルパイが載った皿を手前に引き寄せる。

「君がお菓子を作ってくれるのは初めてですね…いただきます」

フォークを取ると、一口すくう。

リシエルはシグルトがパイを口に運ぶのを、息を飲んで見守る。

「……」

シグルトは最初の一口を飲み下すと、しばらく何か考えるようにしていたが、

「この味…ミールの実、ですか?」

「え? ええ? なんてわかったんですか?」

食べてもわからないって言ってたのに。葉草屋の老婆を恨んだ。

「どうしてミールの実を?」

「ふ、深い意味はないです！　ただ、入れるとおいしいって本に書いてあって…それだけです！」

てつきりシグルトは意中の相手にうんぬんという話を知っていて、からかってくるものだと思います、必死で説明したが、

「そうですか…」

そう言って、また黙り込んでしまう。

いつもリシェルの料理を食べる時は、必ず何かしらの感想を言うてくれるのに、今日はなんだか様子がおかしい。

「あの…おいしくないですか」

傷つく覚悟で思い切って尋ねると、シグルトは首を振った。

「いえ、とてもおいしいですよ。食べたのは本当に久しぶりだなあ。こんなにもおいしかったっけ…」

そう言うシグルトの目は、ここではないどこか遠くを見ているように思えた。

「好物なのに、ずっと召し上がってなかったんですか？」

「…ええ。とてもおいしいアップルパイを作れる人がいたんですが、その人がいなくなってからは、他のは食べる気がしなくてね」

ずきり、と胸が痛んだ。

（私が作ったのも、本当は食べたくないのかな？）

シグルトにここまで言わせるアップルパイを作れた人とは、一体誰なのだろう。

師の様子はなんだかどこか寂しげで、何か事情がありそうだ。

「その人の作ってくれたパイにも、やっぱりミールの実が入っていて……すごく懐かしくなりました」

意中の人にミールの実を——
薬草屋の老婆の言葉が蘇る。

（もしかして、昔の恋人、とか？）

この6年間、シグルトに女の影など感じたことはなかった。でも、シグルトだってまだ若いし、リシエルが知らないだけでそういう話があってもおかしくないだろう。

なんだか、面白くない。

それがシグルトが期待した反応を返してくれなかったからなのか、一生懸命初めて作ったのに他人と比較されたような不快感のせいなのか、自分でもよくわからなかった。

「そうなんですか……先生はアップルパイが好きなんじゃなくて、その人が作ったアップルパイが好きだったんですね」

出た言葉は、少し棘を含んでいたかもしれない。

「あ、いえ、そういうわけでは……君の作ってくれたアップルパイは、昔私が食べていたのに負けないくらいおいしいですよ」

リシエルの気持ちを察したのか、シグルトが言うが、なんだか取り繕って言ってるだけののように聞こえた。

いつものシグルトだったら、迷いなく“世界一おいしい”と言ってくれるのに…

そう思ってしまったから、はたと気づく。

シグルトにとって、どんな時でも、自分が1番。

それが当たり前だと思いこんでいる自分に。

（私、すっかり甘やかされてたんだなあ…）

いつだって、シグルトはリシエルのことを一番に考えて、大事にしてくれた。

でも、それは決して当たり前のことではない。

シグルトは親でも、兄弟でも…恋人でもないのだから。

（もう明日で成人なんだし、大人にならなきゃ…）

「ならよかったです。頑張って作った甲斐がありました」

にっこり笑って、機嫌を損ねていない、ということを態度で示す。その様子に、シグルトも胸を撫で下ろしたようだ。

「でも、どうして急に私の好物を作ろうなんて思ったんです？ しかも、ミーレの実なんて入れて…君もようやく恋に目覚めたのかな？」

シグルトが少し意地悪そうな笑みを浮かべながら言った。やはり、ミーレの実のおまじないは知っていたらしい。

「ち、違います！ ただ、先生に何かお返しがしたかったんです」

「お返し？」

シグルトは不思議そうに首を傾げる。

「私、先生に拾ってもらって、ここに住まわせてもらって、弟子にしてもらって、勉強を教えてもらって…本当にもらってばかりで…私も何か先生にお返しできないかなって、そう思ったんです」

「そんなことはなんでもないことです。前にも言っただけけど、君のおかげで私はそれまでの生き方を変えることができた。お返しをしなくてはならないのは、むしろ私のほうですよ」

リシエルは首を振った。

「先生がいなきゃ、私は16歳の誕生日なんて、迎えられなかったはずですよ」

「……」

シグルトの紫の瞳がわずかに翳ったことに、リシエルは気付かず続けた。

「先生には本当に感謝してるんです。いつも生意気なこと言っちゃってるけど、本当です。だから、成人になるのを機に、何か先生にお返しがしたかったんです。でも、先生お金持ちだから何でも買えるだろうし、第一何が欲しいのかもよくわからないし、それでセイヤに先生がアップルパイが好きでよく召し上がってたっていう話を聞いて、作ることにしたんです。あ、ミールの実は入れるといいしって聞いたからです。ほんとにそれだけですから！」

最後にミールの実を入れた理由を慌てて付け加えてから、リシエルは深く頭を下げた。

「先生、いままで、本当にありがとうございました。本当に、本当に感謝してます」

「私の欲しいもの…わかりませんでしたか」

シグルトの言葉に、頭を上げる。
なぜか苦笑する師の顔があった。

「君、鈍感だから魔道士には向いてないかもしれないですね」

「ええ！？　なんでそうなるんです？」

弟子の気持ちを聞いて涙ぐむ師——そんな感動の場面になってもおかしくない状況で、思いがけないことを言われ、リシエルは面食らう。

「まあ、すぐにわかりますよ」

師は涙ぐむ様子もみせず、にやりと笑う。

「でも本当においしかった。よかったらこれからも時々、作ってくれますか？」

「はい！」

自分の感謝がちゃんと伝わったのかどうかは怪しかったが、とり

あえずシグルトが喜んでくれたようなのでほっとする。

「お茶入れますね」

シグルトはいそいそとお茶の準備を始めた弟子を、微笑んで見ていた。

「リシエル」

「はい？」

「ありがとう」

師の言葉にリシエルは少し照れたような笑みを返した。
胸の奥からじんわり優しい温かさが湧いてくる。
師もきつと同じ温かさを感じてくれている。
そう思っていた。

＊ ＊ ＊

夜。しんと静まり帰った家の中。

薄暗い廊下で、シグルトはその部屋の扉の前に立ちすくんでいた。
背後でぎしっと、床が軋んだ。

あたりが明るくなる。

「ご主人様」

ランプを手に掲げたセイラが、主を呼ぶ。
シグルトは振り返らない。

「セイラ、君がアップルパイのこと、リシエルに教えたんですね？」

「はい。何か不都合がございましたでしょうか？」

セイラは感情の籠らない声で問う。

「いや…責めてるわけじゃない」

シグルトの口元に苦笑が浮かんだ。

「むしろ、久しぶりにアップルパイ、食べられてよかったですよ」

その手がそっと、目の前の扉に置かれる。

「後ろ暗い気持ちになってしまうのは、私の問題です…」

紫の瞳は、置かれた手、扉の向こう側を見ていた。
もう長いこと、この部屋には入っていない。

部屋は6年前のままにしてあり、入ればこの部屋の主のことを思い出してしまうからだ。

「私に、あの子に感謝される資格なんてない…」

呟く主を、セイラは何も言わずただ見つめていた。

「それでも私は、あの子を……」

シグルトは扉の上で手を握りしめる。

その手を緩め、振り返った顔には、いつもの笑顔があった。

「明日はあの子の成人の日です。正装する機会なんて今までなかったから、準備も不慣れでしょう。手伝ってやって下さいね」

セイラは黙って頭を下げた。

シグルトは扉からそっと離れ、数部屋先の自分の部屋へと戻って行った。

残されたメイドは、自分がこの家に戻ってから一度も開かれたことのない扉をしばし見つめた後、静かに立ち去った。

14 アップルパイ（後書き）

今週はなかなか時間が取れなかったのですが、なんとか更新できました（汗）

気づいたらお気に入り登録件数が50件を越えてまして、すごく嬉しいです。

登録してくださっている方々、ありがとうございます！本当に励みになります。

来週も日曜更新を目指して頑張ります！

15 誕生日

「あ、あの…先生？」

「はい？」

「あんまり見られると、落ち着かないんですけど…」

リシエルの誕生日当日。夜会へと向かう馬車の中。

正面に座った師は、馬車が走り始めてからずっと自分を見つめてくる。

一瞬たりとも目を離すまいとするかのように、頬杖までついて、じつくりと。

どうにも居心地が悪く、ついにリシエルは言った。

「仕方ないでしょう？ あんまりにも君が可愛らしいんで、目が離れなくなっちゃったんですよ」

シグルトは微笑んで目を細めた。

リシエルは、シグルトに贈られた白いドレスを着ていた。腰から裾に向かって広がるドレスは、リシエルの上半身の華奢さを強調している。腕も胸元も露出しているが、肩の部分を覆うふんわりしたシフォンが、清楚さと上品さを醸し出していた。

長い髪は半分だけ結い上げ、残りは下ろしたまま、ダイヤモンドが輝く髪飾りを付けている。最初はすべて結い上げるつもりだったのだが、シグルトが下ろしている方がいいと言ったので、そのままにした。普段はしない化粧も、セイラに施してもらった。白い肌に赤く紅を挿した唇が艶やかだ。

昼過ぎから準備を始め——といってもすべてセイラに任せきり

で、ただ立ったり座ったりしているだけだったが――すべて終わって、自分の姿を鏡で見た時は、別人になったようで気分も高揚した。だが、慣れない正装は動きにくく、夜会できちんと振舞えるかどうか、時間が近づくにつれ、だんだんと不安の方が大きくなってきた。

シグルトも、今日はいつものローブ姿ではなく、黒の礼服に身を包んでいる。裾の長めの上着をさらりと着こなし、タイを締めていた。普段は隠されている手足の長さや、細身ながら引き締まった体形がよくわかる。いつもと雰囲気が違う師も、落ち着かない原因の一つだ。

「家でもその格好でいてくれればいいのに」

「嫌ですよ。落ち着かない」

「それもそうですね…私も自制できなくなりそうだ…」

一体何を自制しているというのか。突っ込むと危険な予感がしたので、師の呟きは、聞かなかったことにする。

「君、普段からローブばかり着てますが、ドレスじゃなくても、もっと女の子らしい格好をすればいいのに。おしやれは女性の特権でしょうに」

「おしやれとか別に興味ないです」

リシエルが普段ローブを好んで着るのは、そうすれば自分の容姿がさほど奇異な目で見られないからだ。エテルネル法院の本拠地を擁する王都の人間は、シグルトやブランのように魔力によって髪や瞳の色が変わってしまった魔道士を比較的見慣れているため、さし

て驚きはしないが、地方からやってきた人間にはやはり好奇の目で見られる。ただでさえ、黒髪は珍しい。だが魔道士だとわかる格好をしていれば、黒髪や薄紅色の瞳も、ああ魔力の影響による変色かと、周囲が勝手に納得してくれる。実際には、魔力の影響で黒髪になった例はないのだが、一般人にはわからない。

「君は変わってますね。君くらいの年頃は好きな人の気を引くために、みんな見た目のことばかり気にするものだと思ってましたが」

「好きな人なんていませんから」

嘘ではなかった。異性に対して、そういう気持ちを抱いたことがなかった。普段の生活で同年代の異性と接する機会がほぼ無かったせいもある。読み書き等の基本的な勉強はシグルトが教えてくれたため、学校には行かなかったし、法院では魔法が使えないのに導師の弟子をしていることで、パリスを筆頭に同世代の魔道士たちからは妬まれ、避けられていたからだ。

シグルトは複雑そうな表情を浮かべる。

「うーん、喜ぶべきか、悲しむべきか…」

「勉強一筋の弟子を持って喜ぶべきじゃないですか？」

「君が真面目なのは認めますけどね」

リシエルが年頃の少女なら誰もが夢中になるおしゃれや恋愛をしてこなかったのは、真面目な性格もあるが、もうひとつ理由がある。昔の記憶がないからだ。

普通の人には皆、記憶があり、当たり前のこととして、自分が何者かを知っている。

だが、自分は自分が何者なのかを知らない。

自分の名前も、きつといたであろう家族のことも、忘れてしまっている。

もしかしたら生き別れた家族が、自分の本当の名を呼びながら、今でも探しているかもしれないのに。

たとえその可能性が限りなく低いとしても、そんな人間が恋やおしやれに気持ちを向けるのは、なんだか不謹慎な気がしたのだ。

真面目に頑張っていれば、神様はきつと全てを思い出させてくれる。

でも、そのためにはもっと努力しなければいけない。

だから――――

「先生。私、魔法の勉強もきつと一生懸命やるって誓います。どんなに厳しい修行にだって耐えます。だから」

師の目をしっかりと見て、精一杯の気持ちをぶつけようとした。だが、言葉は師によって遮られる。

「まあまあ、その話は後にしましょう」

「前に仰ってた大事な話の後、ということですか？」

「ええ」

「話って何なんです？ 今日こそ話して下さるんですよ？」

シグルトが何を言ってこようと、リシエルは魔道士を目指すつもりでいた。

薄紅色の瞳。

常人にはありえないその瞳には、必ず魔力の影響がある。

それを解き明かせば、自分のことがわかるはずだ。
そのためには、どうしても魔道士となって、魔法を学ばなければ
ならない。

「いや、ここじゃあちよつと…」

シグルトは苦笑いを浮かべる。

リシエルは疑わしそうに師をじっとり見た。

「ごまかす気じゃないですよね？」

「まさか。私はいつだって君に誠意を持って接してきたつもりです
よ」

「あんまり伝わってないです、それ」

「じゃあ今日は精一杯伝えないといけませんね」

シグルトが言うと同時に、馬車が止まった。いつの間にかリッベ
ルト伯爵邸に到着したらしい。

「魔道士になることばかり考えている君も、今日は違う世界もある
んだってことを知って、楽しんで欲しいな。お誕生日おめでとう、
リシエル」

馬車の扉が外から開いた。

シグルトがさつと降り、恭しく片手を差し出してくる。

「さ、どうぞ。お姫様」

リシエルは照れながらも、その手にそっと、自分の手を重ねた。

王都の一角にある屋敷。

夕暮れ時のこの時間、いつもなら閉じられているはずのその門は開かれ、黒塗りの馬車が次々と吸い込まれていく。

屋敷の照明は最大限に灯され、庭までもが明るく照らし出されている。

リンベルト伯爵邸。今宵、この屋敷で夜会が催されるのだ。

開始時間よりかなり早く屋敷に到着した少年は、テラスの手すりにもたれ、ぼんやりと馬車から下りてくる人々を見下ろしていた。

やがて、開始時間も間近になって、一台の馬車が滑り込んできた。屋敷の使用人が、すばやく近づいて、馬車のドアを開ける。

「来た」

少年が呟く。

馬車から白銀の髪、礼服姿の男が現れる。男はすぐに振り返り、片手を差し出した。馬車の中からのばされたほっそりした白い手が、その手にのせられる。

男に手を引かれて、白いドレスをまとった、長い黒髪の少女が降り立った。

「ほら、あの女だよ」

「ほお、本当に黒髪ですな」

少年の脇に立つ、小太りの男——ロドムは感心したように声をあげた。

「では、あとは手はず通りに」

「…しくじるなよ」

少年の言葉に、媚びた笑いを浮かべ、ロドムはその場を離れた。残された少年は、姿勢を崩さず、テラスの下を見下ろし続ける。馬車から降りた少女は、物珍しそうにきよろきよろとあたりを見回していた。

そんな少女に、礼服の男が微笑みながら何かを話しかける。少女が恥ずかしげに顔を伏せた。

パリスはこみ上げてくる苛立ちに眉をひそめた。

もしも。

もしも、あそこに立っているのが、灰色の髪の少女であったなら。おそらくこんな苛立ちを感じなかっただろう。

——私は、私が正しいと思ったことをしているだけです。

あの時の彼女の言葉は今でも鮮明に覚えている。

凜とした彼女の横顔には、何にも屈しない強さがあった。

そして知った、彼女の実力。

負けた。勝てない。

生まれて初めてそう感じた。

悔しさは不思議となかった。

それほどまでに、アーシェの存在はパリスを圧倒した。

シグルトの横には彼女がいる。

最強の魔道士の弟子として、彼女ほど相応しい人間はいない。
だが、パリスが目撃したその事件を機に、彼女は法院を去った。
そして――

シグルトが新たな弟子として連れてきたのは、自分と同一年の少女。

法院の魔道士たちはどんな天才かと注目したが、少女は前の弟子とはあらゆる点で正反対だった。

気が弱くて大人しく、いつも師の後ろに隠れるようにして歩き、
ずば抜けて賢いという話も聞かない。

何よりも、魔法が使えないということが、間もなく判明した。

その美貌以外、優れたところのない、平凡な娘。

周囲はシグルトが優秀な愛弟子を失って自暴自棄になり、身寄りのない少女を拾って困い、慰めを得ているのだろうと噂した。

浮いた話一つなかったシグルト様も男だったということですね――

それにしてもあのような子供がご趣味とは――

それまで畏怖と敬意を持って呼ばれてきたシグルトの名。今はそこに嘲りが加わった。

最強の魔道士として憧れ続けた存在がそのように貶められることは、その真偽がどうあれ、許せることではなかった。

それでも、いつかシグルトも目を覚まし、後継ぎとすべき真の弟子を選ぶ日がやってくると思っていた。

そして、アーシェなき今、選ばれるのは自分しかない、と。

彼女が去ってから、それまで以上の努力と修練を重ねてきた。

同世代で、パリスに勝てる魔道士などいない。

もはや確かめることはできないが、魔法の分野によっては、アーシェにも負けていないはずだ。

なのに。

シグルトはあのカラス娘――リシエル以外を弟子にする気はない、とはつきりと告げた。

何より許せなかったのは、シグルトのリシエルを見る目が、かつてアーシェを見ていた目と同じだということだ。

特別な存在にだけ注ぐ、特別な視線。

それが自分よりも劣っているはずの者に与えられる。

耐えられなかった。

アーシェがいらないならば、自分にこそ、それは与えられるべきものののに。

なぜシグルトはあのカラス娘に執着するのか？

あの娘の色香——そんなものがあるとは思えないが——に惑わされているというのなら、自分が目を覚まさせてやろう。

これは引いてはシグルトのためでもある。

魔法の使えない人間を導師の後継者として指名するなど、シグルトの名に傷が付く。

今や最強の魔道士として知られるシグルトの名に傷がつけば、エテルネル法院の権威も落ちる。

自分がやろうとしていることは、これからの魔道士社会を救うことにも繋がるのだ。

「パリス！」

背後から呼びかけられ、思考が中断する。

振り返ると、濃紺のローブをまとった大男が歩み寄ってくる。

「ブラン様」

無視するわけにもいかず、パリスはテラスの手すりから身を離れた。

「こんなところにいたのか。もう到着してるって聞いたから探してたんだぞ」

パリスはうんざりした。

師匠だからといって、何かと自分に構ってくるのはやめて欲しかった。

何かすごい術を伝授してくれるというのなら尊敬もするが、ブランは「お前は人間修行が先だ」などと言って、法院の外壁周辺を走らせたり、庭の掃除や魚釣りなど、到底魔道の修行になるとは思えないことばかりやらせようとする。ある時は、「街に行って困っている人を見つけて助けてこい」などと、無茶苦茶なことを言ってきた。

自分のシグルトへの強烈な憧れがなかったとしても、きっとこの師匠とは合わない。

シグルトに弟子入りを断られ、ブランに声を掛けられたので弟子になったが、ブランが導師でなかったら絶対になっていなかった。

“シグルト導師の弟子”になれなくても、“導師の弟子”という地位だけは確保する必要があったから、仕方なく弟子入りしたのだ。

将来導師になるための足がかり。

パリスはブランのことを、そう思っていた。

「しかし、面子を見たが、魔道士はほとんどいないみたいだな。ローブ姿だと結構浮くな…」

ブランがパリスの正装を見、自分のローブに目をやりながら言った。

「ですから、ブラン様は無理していらして頂かなくてもよかったんですよ」

パリスにとって、ブランまでこの夜会に来たのは計算外だった。ロドムからシグルトとリシエルがリンベルト伯爵主催の夜会に出

席すると聞いて、伯爵に頼んで、パリスも招待されるように手を回した。伯爵は最初難色を示した。伯爵は兼ねてより、シグルトと懇意になりたいと望んでおり、何度も茶会や夜会の招待をしては、断られてきた。だが、今回、他の魔道士を招待しない、ということを条件に出席の返事を取りつけたらしい。

おそらくシグルトは、リシエルの社交界へのお披露目にあたり、彼女を快く思わない魔道士たちの視線から彼女を守ろうと考えたのだろう。それもパリスを苛立たせた。

結局、伯爵はパリスの圧力に屈し、ユーメント公爵家の子息としてパリスを招待することにした。ただし、その師であるブランも招待する、という点は譲らなかった。弟子を招待して師を招待しないのは、礼を失するというわけだ。ブランとシグルトが懇意であることは、伯爵も知っており、ブランなら招待してもシグルトも怒らないだろうし、上手くすれば導師二人に取り入ることができる。本音はそんなところだろう。

どうせ来ない。そう考えていたのに、ブランは出席を決めた。

「まあ、弟子が行くなら、師匠として挨拶しておかないとな」

ブランは笑って言った。内心認めていない存在に師匠面をされるのは、迷惑以外の何者でもない。

シグルトの弟子になれていれば、こんな暑苦しいおせっかいな男に苛々させられる毎日を送ることもなかったのに……ますますリシエルへの恨みが膨らんでいく。

「さ、そろそろ始まるぞ。行こう」

「はい」

表面上は素直に返事をして、先に歩き出したブランの後へと続く。

一歩踏み出してから、一瞬だけテラスの下へ目をやる。

黒髪の少女は、彼女の師に手を引かれて、屋敷へ向けて歩き始めていた。

パリスは、師の背中を追った。

16 夜会

扉をくぐると、そこにはリシエルの知らない眩しい世界が広がっていた。

豪華なシャンデリアに明るく照らされた広間。食べきれないほどの色とりどりの料理の並んだテーブル。その間をひしめき合う何十人もを着飾った人々。人々のおしゃべりを邪魔しない程度に奏でられる、楽団の美しい音楽。

圧倒され、目を見張ってあたりを見回すリシエルの手を引いて、シグルトは広間の中へと進んでいく。
途端に会場がざわついた。

「あれはシグルト様…？」

「シグルト導師だ…！」

「まあ珍しい…！」

「隣の方は一体どなたかしら…？」

周囲からそんな囁き声が聞こえてくる。

自分たちが注目されているのだと知って、戸惑いながらリシエルはシグルトを見上げた。

シグルトはくすりと笑った。

「みんな私たちがあんまりにもお似合いなんで、驚いているみたいですね」

「違うと思いますけど」

「シグルト様！ シグルト様ではありませんか！」

声のかかった方を見れば、白髪交じりの年配の男が立っていた。

「リンベルト伯爵」

シグルトの呼びかけで、男がこの夜会の主催者であることがわかった。

「まさか本当にお越し頂けるとは…いやはや光栄ですな」

伯爵は顔を皺くちやにして、満面の笑みを浮かべている。

「ご招待いただき、ありがとうございます」

「こういった会はお好きでないと伺いましたが、何度も諦めずご招待を続けた甲斐がありましたな。今日はどうぞ楽しんで下さい」

シグルトと伯爵が挨拶を交わしている間に、周りの招待客たちが集まってくる。

「伯爵。私にもぜひ導師様を紹介して下さいよ」

「まさか伯爵がシグルト様とお知り合いだなんて…驚きましたわ」

「さすがは伯爵、お顔が広い」

口々に言われ、伯爵は得意げに、周りの客たちをシグルトに紹介

していった。

皆爵位を持つ貴族ばかりだ。

「シグルト様、お会いできて光栄です」

「以後お見知りおきを…」

「今度はぜひうちの夜会にもいらしてください」

彼らは一様に愛想笑いを浮かべ、口々に言う。

シグルトもまた、笑顔を貼りつかせ、彼らに当り障りのない返事を返していく。

「そちらのお嬢さんは？」

客の一人に問われ、シグルトが微笑みながら言った。

「弟子のリシエルです。今日で16歳になりました」

リシエルは慌てて頭を下げる。

「リシエルです。宜しくお願いいたします」

「まあ、可愛らしいお嬢さんだこと…」

「ええ本当に…お名前の通り、リシエルの花のようですわ」

「白いドレスがよくお似合いですよ」

「こんな美人が導師様の弟子とは…才色兼備とはこのことですな」

「あ、ありがとうございます…」

口ぐちに褒めそやされて、リシエルは戸惑いながら礼を言った。
日頃シグルトとセイラ以外の人間とあまり接する機会のないリシエルにとって、こんなにたくさんの人に囲まれるのは初めての経験だった。

しかも日頃は法院で魔道士たちの冷たい視線に晒されているのに、今日は会ったばかりの人々にこれでもかとかばかりに褒めちぎられる。

「リシエル様。宜しければこの後、私と一曲踊って頂けませんか？」

リシエルより少し年上と思われる、若い男が愛想笑いを張り付けてすり寄ってきた。

「いえ、あの…」

答える前に、シグルトがリシエルの肩に手を回して、ぐいっと自分の方へ引き寄せた。

「申し訳ありません。この子は今日成人したばかりで、こういった場に出るのは初めてなのです。緊張してどんな粗相をするかもわかりません。今日一日は私が付きっきりで作法を教えますので、またの機会に誘ってやって下さい」

「そんなこと言って、お前がリシエルを独占したいだけじゃないのか？」

聞き覚えのある声に振り返れば、濃紺のローブをまとった大男の姿があった。

「ブラン様！」

「君も来てたんですか…」

滅多に姿を見れないもう一人の導師の登場に、周囲はさらにざわめいた。

リンベルト伯爵はますます得意げに胸を張る。

だが、シグルトと目が合うと明らかに動揺した。

彼の目が笑っていなかったからだ。

「シ、シグルト様…」

「魔道士は私たち以外招待されていないと聞いていましたが…」

「じ、実は、ユーメント公爵のご子息がですね」

「別に私は理由は聞いていませんよ？」

伯爵はシグルトの機嫌を損ねてしまったらしいと知って、青ざめた。ブランなら呼んでも大丈夫だろうと思っていたが、違ったようだ。

シグルトは話を聞く気はないと言わんばかりに、伯爵から顔を背けた。

ブランは二人の傍に寄ってくると、リシエルをしげしげと眺めた。

「はー、どこのご令嬢かと思ったら、リシエルか。いつもローブ姿しか見てなかったけど、やっぱり女の子だな。ドレス、よく似合ってるよ」

「ありがとうございます」

リシエルははにかみながら礼を言った。

ブランは今度はシグルトを見て、目を丸くした。

「シグルト、お前も今日は珍しくめかしこんでるな…驚いたよ」

「君はいつも通りですね」

「この格好が落ち着くんだよ。導師の正装だし、別に問題ないだろう？俺はこういう華やかな場はほんと苦手だよ…」

ブランはうんざりした様子で頭を掻いた。

「君の弟子も来ているんですか？」

「ああ、パリスも来てるよ。さっきまで近くに居たんだがな。どこ行ったんだか」

「そうですか…」

しかし、3人の会話もそこまでで、そのあとは再びブランを加えての、次から次に寄ってくる招待客たちとの挨拶が始まってしまった。

落ち着いて話せるようになったのは、夜会が始まって大分経ってからだった。

「お二人って本当に人気者なんですね」

ひっきりなしに人に囲まれ、師に恥をかかすまいと笑顔を作り気

を張っていたリシエルは、ようやく一息ついて二人に向かって言った。

「そんなんじゃないよ。皆私たちの力を利用してやろうっていう下心があって近づいてくるんです。リシエル、君も気をつけなさい」

にこにこ愛想よく集まってくる人々に対応していたシグルトだったが、3人だけになるとうんざりした表情を見せた。

「そうだな。特にシグルトは宮廷の権力争いには中立の立場を取ってるからな。シグルトを味方に引き入れようって考えて、リシエルにも寄ってくる奴らは多いだろう」

ブランも同意するように頷いた。

「宮廷の権力争いって何ですか？」

リシエルに問われ、ブランは頭を掻いた。

「うーん、まあいろいろ複雑なんだが、簡単に言うと次の王を誰にするかで、宮廷は今もめてるんだよ。候補者が3人いて、貴族たちも分裂状態になってる」

「現王の幼い王子、先王の残した病弱な姫と、妾腹の弟王子…その3人にそれぞれ貴族がついて争ってるんですよ」

シグルトの話によると、このヴァーリス王国では、前国王が何者かに毒殺されてから、残された幼い姫と王子に代わり、前国王の弟ジュリアスが王位に就いた。それが現国王だ。

王には長い間子がいなかったが、5年前に男の子が誕生した。トルシュ王子だ。そうになると、現国王や王妃は当然、自分たちの子に王位を継がせたい。だが、ヴァーリス王家は長子継承が伝統だ。先王の娘と息子らがいる以上、それを破るわけにはいかない。

だが、その本来王位を継ぐべき2人には問題があった。まず長女のミルレイユ王女は、先王の王妃から生まれ、申し分ない血筋だが、生まれつき病弱で、しかも前国王の毒殺事件に巻き込まれ、歩けない体になっている。とても王の激務には耐えられない、というのが大半の見方だ。その腹違いの弟、クライル王子は、先王が側仕えの侍女に産ませた子で、伝統を重んじる古い貴族には王として血筋が相応しくない、と毛嫌いされている。

宮廷は今、この3人のうち誰を次の王にするかで貴族たちが派閥を作って争っているらしい。

「：といっても、当の本人たちには王位に興味はないみたいです。ね。現王のトルシュ王子はまだ5歳。先王のミルレイユ姫が一番血筋は正統性があるけど、病弱で自分が王になるべきじゃないと考えている。弟のクライル王子は遊んでばかりの道楽息子だし」

「結局、周りの国王や貴族が自分の利益になりそうな候補者について、勝手に対立してるって感じだな」

長く続いた戦争も落ち着いて、今は平和だとばかり思っていたこの国も、宮廷内ではいまだ争いが絶えないらしい。

そこで疑問が湧いてくる。

「なんで宮廷の争いで先生たちを味方につけようとするんです？
誰が次の王になるか決めるのは、国王様や、国政に直接関わる偉い貴族の人たちでしょう？」

いくら導師に与えられる宮廷魔道士という地位が高いものであっても、その権限はあくまで魔道に関わることだけであるはずだ。

「私たちが国王に直接進言できる立場にいるから、ある程度王の判断に影響を与えられると思われてるんでしょうね。それに…」

「それに？」

「争いつていうのはね、別に口げんかするだけじゃないですよ。時には実力行使も伴う。政敵を魔道士に頼んで消してもらう…なんてこともあるわけです。暗殺や呪殺を恐れて、今では保身のため、有力貴族たちはみんなお抱え魔道士を雇っています。どれだけ強い魔道士を味方にできるか…貴族たちにとっては己の命運のかかった切実な問題というわけです」

シグルトは鼻先で笑った。

「まったく…本当にくだらない」

「先生はどなたの味方もされないんですか？」

「しませんよ。誰が王になろうと、私には関係ないことです」

仮にも国王を支える立場にある人間の発言とは思えなかったが、シグルトの日頃の仕事の怠惰ぶりを見ていれば、いまさら驚きはしない。

「ブラン様は？」

「俺か？ 俺はまあ、クライル王子派ってことになるのかな」

「あの馬鹿王子につくなんて、君は本当に物好きですよ」

「おいおい、相手は一応王子なんだから口は慎めよ」

クライル王子：先代の王の妾腹の息子、ということくらいしか知らない。王族なんて、リシエルにとって遠い存在で、今までも興味も抱いたことがなかった。

だが、エリックがこれから所属するという新設騎士団を作った人物となれば多少関心が湧く。

「クライル王子ってどんな方なんですか？」

「遊ぶことしか頭がない、どろしようもない馬鹿ですよ。あと女性に手が早いですから、今後会うことがあっても、君は近づかないように」

「最近騎士団を作ったって聞きましたけど…」

「ああ、噂だと各地の騎士団や警備隊からあぶれた問題児ばかりが集まった、ろくでもない集団らしいですけどね。王子なら普通どころかの騎士団長を務めるっていうのが普通ですが、あの王子に正規のまっとうな騎士団を任せるのを国王が嫌がって、急遽作らせたみたいです。まあ、要は王子として格好をつけるための、お飾りです。言っときますけど、“白馬の王子様”なんて期待しないほうがいいですよ」

「別にそんなじゃありませんって」

ミーハー心で質問したと思われたのが心外で、リシエルはふくれ

た。

その時、会場内で流れていた曲が変わった。定番の舞踏曲である。何組もの男女が手を携えて広間の中央へと進み出る。

「お、お前らも踊ってきたらどうだ？」

「あ、私、踊りはあんまり…」

ブランの言葉に、リシエルは反射的に言いかけたが、シグルトが遮った。

「一曲踊って頂けますか？ お姫様？」

左手を差し出してくる。

大人になった君と一曲踊るのは、私の夢だったんです——
仕立て屋でのシグルトの言葉を思い出す。

踊りは正直得意ではないが、師匠孝行はすべきだろう。

リシエルが今日、成人を迎えられたのは、師のおかげなのだから。

「はい」

リシエルははにかみながら笑って、シグルトに手を預けた。

16 夜会（後書き）

週末忙しくて、月曜更新になってしまいました（汗）
週一更新を守れるように頑張りますへへ；

17 告白

広間の中ほどへ出ると、向かい合い、預けたのと逆の手をシグルトの肩に置く。シグルトはリシエルの腰にもう片方の手を回した。ゆったりした曲に合わせてステップを踏む。

踊りは得意ではないリシエルでも、定番の曲で、ステップも基本的なものがほとんどなので、案外上手く踊れた。

「上手いじゃないですか」

シグルトが感心したように言った。

「わざわざ踊りの先生まで呼んで習わせてくれたんですから、さすがにこれくらいは踊れないと、先生に申し訳ないですよ」

シグルトは魔法だけは教えてくれなかったが、その他の勉強や教養を学ぶ機会は惜しまず与えてくれた。おそらく良家の子女並みの教育は受けてきたと思う。

「先生こそ、こういう華やかな場所は嫌いだって仰ってたのに、すごくお上手です」

リシエルの知る限り、シグルトがこういった会に出席することはほとんどなかったはずだ。なのに、基本的な踊りとはいえ、シグルトは先ほどから完璧なステップを踏んでいる。それだけでなく、他の踊っている男女とリシエルがぶつかりそうになると、さりげなく位置を変え、それを避けてくれた。かなり慣れているように感じた。

「まあ、私も君よりは人生経験積んでますからね」

リシエルは頭一つ分高い、目の前にあるシグルトの顔を見上げた。動きに合わせて白銀の髪が揺れている。特別美男子という程ではなかったが、それなりに整った顔立ちには善良そうな柔らかな微笑みが浮かんでいた。紫の瞳は優しさを湛えて自分を見下ろしている。6年前、自分を拾ってくれた時と何も変わらない。

「…前からお聞きしようと思ったんですけど…」

「なんです？」

「先生ってもしかして、ほんとに100歳越えています？魔法で若返ってるのか？」

シグルトは噴出した。

「君ね、いくら私の髪が白いからって、それはないんじゃないんですか？まだぎりぎり20代ですよ、私」

「だって、先生くらいの地位になれば、それくらいいっててもおかしくないのかな、って…」

「導師になるのに年齢は関係ありません。基本的に魔道士の世界は実力主義ですからね。それに、私が導師になったのは、君と出会った直後くらいですから、そんなに前じゃないんですよ」

「でも、先生6年前とちっとも見た目が変わらないし…やっぱり魔法ですか？」

6年前、自分を拾ってくれた時、20代前半くらいに見えたシグルトの容姿は、今も何一つ変わっていない。同い年だというブランドは、年齢相応に年を重ねているというのに。

「導師の中には、私より年上で、私よりずっと若い外見の人もいますよ」

シグルトは笑った。

「魔力の影響で、髪の色が変わったのはショックでしたが、老化が著しく遅くなったのは良かったかな。君とこうして踊っていても、周りからはきっとお似合いの恋人同士に見えているだろうしね。いつそほんとに恋人だってことにしちゃいましょうか？」

「また先生はすぐそういうこと言う…」

「口説いてるんです」

「弟子をからかわないで下さい」

「からかってなんかいませんよ」

紫の瞳に覗きこまれながら言われ、その距離の近さになんとなく気恥ずかしくなって目を逸らす。

そして気づいた。

自分達をじっと見つめる視線に。

シグルトの肩越しに、踊る人々の間から、柱にもたれてこちらを凝視している若い男がいた。

見たことのない赤い騎士服をまとった、黒髪の青年。

（エリックさん？）

気を取られて、ステップを踏み間違えた。シグルトの足を踏みそうになるが、シグルトは素早くそれを避けた。

「リシエル、踊りの最中によそ見はいけませんね」

「す、すみません…」

もう一度ちらりと見やったが、エリックと思われる騎士の姿はもう消えていた。

見間違いだったのかもしれない。

「見目麗しい貴公子でもいましたか？」

「そんなんじゃないかもしれません。ブラン様どうしてるかなって探してただけです」

リシエルは適当なことを言っではぐらかそうとした。

「ブランねえ…目の前にこんないい男がいるのに、どうしてそっちに目が向くんですかね」

「自分で言いますか」

曲が終了すると、二人は手を離し、礼にのっとり、リシエルはドレスのスカートを両手でつまんで、シグルトは片手を胸に置いて、お互いに一礼した。

次の曲が始まり、踊りだす人々の合間を縫って、広間の端のほうへ移動して一息つくつと、

「喉が渴いたでしょう？」

シグルトが給仕からジュースのグラスを受け取って持ってきてくれた。

リシエルは礼を言って、濃い赤色をした液体を喉に流し込む。

おいしい。甘すぎず、濃厚な深みのある味わい。二口、三口と立て続けにグラスを傾けた。

貴族というのはこんな贅沢なものを飲んでいるものなのか。

あっという間にグラスを空にした。

なぜか、次第に顔が火照って、頭がぼんやりしてくる。

シグルトがにやにやしながら言った。

「リシエル。それお酒ですよ」

「ええ！？ 騙したんですね！？」

「私はお酒じゃないなんて言ってますんよ」

「先生、ひろい…」

初めて経験したアルコールに酔いが急激に回る。くっつかかろうとしたが、舌がもつれた。

「酔っちゃったみたいですねえ。お酒、弱いのかな。少しテラスに出て覚ましましょうか」

シグルトは苦笑すると、リシエルの手を引いてテラスへと出た。広いテラスへ出ると、中の喧騒が少し遠くに聞こえる。

夜のひんやりした空気が、火照った肌に心地いい。

「リシエル。いいものを見せてあげますよ」

師に手を引かれ、リシエルはテラスの手すりへ近づいた。

屋敷の庭が一望できる位置まで来ると、リシエルは思わず声を上げた。

「わあ…！きれい…！！」

庭は清らかな青白い光で満たされていた。

屋敷に到着した時は、気にも止めなかった庭中に咲く白い花が、ぼんやりと淡く光を発しているのだ。

まるで夜空に輝く月と星の光を受け止め、照らし返しているかのようだ。

「月光花ですよ。月の光を受けると、こんな風に淡く光るんです。王都では滅多に見れないんですが、リンベルト伯爵の地方の領地がこの花の産地だね。庭中に植えて、夜会の名物にしてるんですよ。これを君に見せたくてね」

「ほんとうにきれいですね…！」

酔いも手伝って、リシエルは幻想的な光景にうっとり見とれた。

「喜んでもらえたならよかった」

そういうシグルト自身も、嬉しそうに目を細めてリシエルを見ている。

しばらく二人で庭を眺めていたが、やがてシグルトが口を開いた。

「リシエル」

呼びかける声にどこか真剣さを感じて、リシエルは庭から師に視線を戻した。

「…大事な話、しましょうか」

「…はい」

師の言葉に、リシエルは表情を引き締め、師へと向き直った。話とは一体なんなのだろうか。確か、お願いしたいことがある、そう言っていた。

君に魔道士としての素質はない、成人を機に弟子を辞めて欲しい——そう言われてしまうのではないか。

そんな不安に胸がざわつき、酔いが急激に覚めていく。

「君は、記憶を取り戻したいから、魔道士になりたい——そう言いましたね」

リシエルは頷いた。

「どうして記憶を取り戻したいんです？」

「え？」

師の問いかけに、リシエルは面食らう。

失われたものを取り戻したいと願うのは、当然のことではないのか。

まさか理由を問われるとは思わなかった。

「私は…自分が誰なのか知りたいんです。本当の名前や、生まれた場所、どんな家族がいて、どんな風に育ったのか…みんなが当たり前知っていることを、私も知りたいんです」

「…それがどんなに辛くて悲しい過去でも？」

「え？」

「…あくまで仮定の話ですよ」

シグルトはテラスの手すりに身をもたせて、淡く輝く庭を見下ろす。

「私はね、リシエル。こんなことを言ったら君は気を悪くするかもしれないけれど、時々、君が羨ましいんです」

リシエルは青白くほのかに照らされた、師の横顔を見つめる。庭を見下ろす師の瞳は、どこか悲しげだった。

「私もできれば、過去のことなんて忘れ去ってしまいたい。そうできたらどんなに素晴らしいか」

自分は過去がないことで、自分の存在に自信が持てず、ずっと悩んできた。

でもこの人は逆に過去があることによって苦しめられている。忘れ去ってしまいたい過去とは一体何なのか。知りたいと思った。

でもそれを聞くことで、師の心の傷を抉ってしまうのは怖かった。

「…君には、過去よりも未来を考えて欲しい。私と一緒に」

シグルトは手すりから身を離し、リシエルに向き直った。
いつになく真剣な、紫の瞳がまっすぐに見つめてくる。

「魔道士になるのは諦めてくれませんか？」

やっぱり————予想していたことではあったが、はっきりと言われてしまうと、思った以上の動揺があった。

どうして、と理由を問う声もすぐには出せなかった。

だが、次のシグルトの言葉は、それ以上の動揺、いや衝撃をリシエルにもたらした。

「魔道士になるのは諦めて————私の妻になってくれませんか？」

18 忠告

何を言われたのか、一瞬わからなかった。

あまりに突然で、予想もしていなかった言葉を、すぐには理解できない。

「私と、結婚して欲しいんです」

結婚――――

頭の中でシグルトの声が、ゆっくりと、ようやく言葉として意味を成した。

冗談ですよね―――言いかけて、シグルトの真剣な眼差しに息をのむ。

「心底驚いてる……って顔してますね」

硬直しているリシエルを見て、シグルトは困ったように笑った。

「私としては、気持ち精诚一杯態度で示してきたつもりなのですが……どうやら君には伝わってなかったみたいです」

「……私に気があるようなことを言うのは……私をからかって……冗談だと思ってました……」

絞り出した声は少しかすれて、いつもより小さかった。

「まあ、私は君よりずっと年上だし、親代わりみたいなものですが、君が私をそういう対象として見てこなかったもわかりますが……それにしても君は鈍い方だと思いますよ」

「すみません…」

他に適当な言葉が見つからず、とりあえず謝る。

シグルトはくすりと笑った。

「私もね、最初はただ君の後見人に、親代わりになろう、そう思ってたんですよ。年頃になったら立派に嫁に出してやろうって…でもね、君と一緒に暮らすうちに、君と過ごす時間が私にとってかけがえのないものになっていった。君とずっと一緒にいたら…そう願うようになったんです」

シグルトの言葉を聞きながら、混乱した頭の片隅で考えた。

彼がリシエルに対して、まるで師弟関係以上の関係を望んでいるかのような言動をするようになったのはいつからだったろう。

多分、4年前の誘拐事件以降からだった気がする。

「子供だった君が成長してどんどん綺麗になっていくのを見て、その気持ちは日を追うごとに強くなっていった。いい年をして、まだ成人も迎えていない少女にそんな気持ちを持つなんて…自分でも信じられなかったけれど、認めざるおえなかった。私は君に恋してるんだってね」

シグルトは穏やかに語っていたが、その紫の瞳には、たまに感じていた、あの“熱”が宿っていた。

「君が子供のうちはいい。けれど、君が大人になったら、自分の元を離れてしまうんじゃないか、誰か他の男に取られてしまうんじゃないか…そう思ったら気が気じゃなかった。だから、君が成人したら、真っ先に妻になって欲しい…そう言おうと思ってたんです」

シグルトは片手を持ち上げ、そっとリシエルの頬を撫でた。
リシエルの頬が一気に熱くなる。

「リシエル。愛しています。この世界で一番：いや、唯一、君だけを」

月光花の青白い光で照らされるシグルトの真剣な表情と、彼の口から紡がれる言葉が、リシエルの思考を痺れさせる。

シグルトは囁くように続けた。

「君はどうですか？ 君にとって私はどういう存在なんだろう？」

「せ、先生は：私の恩人で：」

「君が私に恩を感じてくれていて、感謝してくれているってことはわかっていますよ。でも、それだけですか？」

シグルトは、何かを探そうとするかのように、じっとリシエルの瞳を覗きこんでくる。

（私にとって、先生は——）

混乱し、言うべき言葉が見つからないまま、それでも何かを言わなければならないという一心で、口を開く。

「私にとって、先生は——」

「シグルト！」

突然、ブランの大きな声が響いた。

ローブをまとった大男ははずかずかと二人へと歩み寄ってくる。シグルトがさっとリシエルの頬から手を離し、ため息をつく。

「…ほんと、絶妙なタイミングでやってきますね、君は」

「は？」

「いえ、なんでも。そんな大声を出して、何かありましたか？」

「向こうでクライル王子が呼びだ」

ブランは親指で自分の背後を指した。

「クライル王子？ 彼も来ているんですか？」

「ああ。さっき遅れて到着した。お前が来ているのを知って、呼んでるぞ」

「…まったく、あの馬鹿王子は…」

シグルトは忌々しげにつぶやくと、リシエルを振り返り、

「リシエル、君はここで待っていて下さい。すぐに戻りますから」

まだぼんやりしているリシエルを残し、シグルトはブランと共に、再び会場内へと戻る。

「リシエル連れて行かなくていいのか？」

「少し酔ってるんで休ませたいんです。それにあの王子の視界にはなるべく彼女を入れたくないんでね」

「まあ…そのほうがいいな」

テラスに一人取り残されたりリシエルは、再び眼下に広がる青白い光を放つ庭に目を落とした。

だが、先ほどあれほど興奮して見ていたその美しい光景も、今は何の感動も呼び起こさない。

景色を楽しむ余裕などなかった。

シグルトの告白に、心臓がばくばくと音を立てていた。

酔いは覚めたはずなのに、顔の火照りが収まらない。

私の妻になってくれませんか——結婚して欲しいんです——

シグルトに言われた言葉が何度も頭の中で繰り返される。

愛しています——

（先生…ずっと…そんな風に想っててくれたの…？）

自分にまるで気があるような言動も、ただふざけているだけだと思っていた。自分をからかって遊んでいるのだ、と。

なぜなら、リシエルとシグルトの関係は、そんな感情が入り込むことのない、いわば家族のような関係だと思っていたからだ。初めて出会った時からシグルトは自分よりずっとずっと大人で、自分を守ってくれる保護者であり、異性として意識したことなどなかった。当然、シグルトだってそうだと思っていた。

だからこそ、法院の魔道士たちが自分たちの関係を勘ぐり、噂し

ていることを知った時、自分のせいでシグルトの名誉が傷つけられたことにショックを受けたのだ。

（私にとって、先生は…）

記憶を失って目覚めてから、ずっと側にいてくれた人。

側にいるのが当たり前すぎて、シグルトが自分にとってどういう存在かなんて、きちんと考えたこともなかった。

恩人…師匠…家族のような存在…

思いつく言葉を頭の中で並べてみる。

好きか嫌いかでいえば、

「好きに決まってる…」

口に出して言ってみると、“好き”という言葉の響きに、ますます顔が熱くなってくる。

（先生のことは好き…）

でも、それが果たして恋愛感情といえるのかどうか。

初恋と自覚できる経験もないリシエルにはわからなかった。

「恋って何…？」

「…いつまでもそんなところでぼーっとしていると、風邪引くぞ」

突然の背後からの声に、再び心臓が跳ね上がる。

「エリックさん…！」

振り返れば、テラスの壁にもたれ、腕を組んだエリックの姿があった。

この間会った時とは違い、白と赤を基調とした見たことのない騎士服をまとっている。以前来ていた騎士服よりも、都会的で洗練された雰囲気があり、彼の怜悯な顔立ちによく似合っていた。

やはりさっき見たと思ったのは、見間違いではなかったのだ。

（さっきの、聞こえてなかったよね？）

動揺し、うわずった声で問う。

「ど、どうしてここに？」

「クライル王子の護衛」

エリックは短く答え、つかつかとリシエルに歩み寄ってくる。
相変わらず無表情だ。

「熱でもあるのか？」

月光花の青白い光だけで、リシエルの顔の赤さに気付いたはずはないのだが、エリックが問う。

「大丈夫です。初めてお酒飲んだら酔っちゃって…」

「…保護者はどうした？」

「保護者？」

「シグルト・アルフェレス」

突然出てきたシグルトの名に、また心臓が跳ねる。

「お、王子様に呼ばれて、行っちゃいました」

「そうか」

エリックの黒い瞳がじっと見つめてくる。

なんだか、シグルトの告白によって動揺している心を見透かされているようで、居心地が悪かった。

その場を離れたくなったが、思い出す。

（そうだ、カロン…！）

「先日はありがとうございました。私、エリックさんにお聞きした
いことが…」

「カロンのことか？」

予想していたかのように、エリックが言った。
リシエルは頷く。

「悪いが、カロンについて、俺は何も話してやる気はない」

「え？」

「俺が何を話したところで、今のお前は何も信じないだろうからな」

「ど、どういふことですか？」

まさか、こんなにべもなく突き放されるとは思ひもしなかった。
シグルトを嫌っているらしいということはわかっていたが、もし
かして弟子である自分も嫌われてしまったのだろうか。

エリックはリシエルの問いに答えることなく、唐突にリシエルの
腕を強引に掴んだ。

「それより、一曲付き合え」

「え、ええ!？」

何がなんだかわからないまま、掴まれた腕を振りほどくこともで
きず、リシエルは広間へと引っ張られて行った。

「やあ、シグルト。久しぶり」

気の抜けた、能天気な声がシグルト達を迎えた。

着飾った若い婦人たちに囲まれた若い男が、にこにこ上機嫌で
手を振ってくる。

少しくせのある、色素の薄い柔らかな茶髪がふわふわと揺れる。
人懐っこそうなたれ目から覗く緑色の瞳が、酒に酔っているのか、
とろんとしていた。

「クライル王子。ご無沙汰しておりました。殿下におかれましては、
お変わりないようで…」

シグルトは改まった口調で頭を下げた。

「堅苦しい挨拶はいいよ」

クライルと呼ばれた男は、ぱたぱたと手を振った。その仕草が見るからに軽薄な印象を与える。

それからきよろきよと周りを見渡し、

「あれれ？今日は君、弟子を連れてきてるって聞いたんだけど？」

「少し酔ったようでしたので、テラスで休ませております」

「ふーん…あ、もしかしてあの黒髪の子？ 珍しいね。なんか小柄で可愛いなあ。後で紹介してよ」

クライルがシグルトの背後、テラスの方に視線をやりながら言った。

「それは構いませんが…」

どこか気乗りしないシグルトの返事に、クライルはにやにやと笑った。

「あれ？もしかして僕に会わすの心配？ 大丈夫だよ。君の弟子になんか間違っても手を出せないよ。師匠が怖いからね」

「あれは私の大事な弟子ですので、ご配慮いただければ幸いです」

「へー、君の愛人だって噂、本当なんだ？」

「そんな噂、よくご存じですね」

ブランが呆れたように言った。まだ法院内だけで留まっている噂だと思っていた。

「僕はゴシップには詳しいよ。で、どうなの？」

「ご想像にお任せします」

にっこりと微笑んで答えるシグルトに、クライルは目を丸くした。

「へえ、意外。今回ははっきり否定しないんだねえ」

ごほん、とブランがわざとらしく咳をした。

それに気付いているのかいないのか、クライルはのんびりした口調で続けた。

「それはそうと、君の大事な花に悪い虫がついちやったみたいだよ」

シグルトはクライルの視線を追って後ろを振り返る。

リシエルが赤い騎士服をまとった若い男に、引きずられるように手を引かれ、広間へ出てくるところだった。

「あ、あの、エリックさん!？」

呼びかけてもエリックは止まらず、そのまま広間の中央まで連れて行かれてしまった。

ようやく立ち止まったかと思うと、くるりと振り返り、片手でリシエルの腰を引きよせた。

「ひゃっ!？」

間の抜けた声を上げたと同時に、新しい曲が広間に流れだす。先ほどシグルトと踊ったよりも、かなりテンポの速い曲だった。一応習ったことはあるが、難しくて覚えきれなかった曲だ。

「わ、私、こんな難しい曲踊れなっ…!」

抗議の声もお構いなしに、エリックはステップを踏み出す。そのまま突っ立っていたら足を踏まれてしまう。リシエルは反射的に足を動かした。

黒髪の男女の組み合わせは目立つらしく、周囲の人々が自分たちに注目しているのがわかる。

こんな衆人環視の中、転んで恥をかきたくない。必死で昔の記憶を手繰り寄せ、動く。

（ん? あれ?）

ステップを踏むというよりも、ただ迫ってくるエリックの足を避けるように動いていただけなのだが、次第にエリックの足の動きを覚え、合わせて動けるようになっていった。

意識せずとも足が動き出し、ステップがどんどん軽くなっていく。繋いだ腕の下をくぐり、くるりと回転すれば、ドレスの裾が軽やかに広がる。

（なんか、気持ちいいかも…!）

苦手意識のあるダンスで、これほどに爽快感を得られたのは初めてだった。

「踊れてるじゃないか」

無表情だったエリックがうつすら笑みを浮かべた。

（違う。私が踊れてるんじゃないくて、この人が躍らせてくれているんだ…!）

「エリックさんがお上手だからです」

テンポの速い曲と、難易度の高いダンスを踊れているという嬉しさがもたらす高揚感で、リシエルはにっこり笑った。

エリックの黒い瞳がはっとしたように見開かれる。

それから、気まずそうにリシエルの顔から目を逸らした。

だが、逸らされた視線はすぐにある一点を見つめて止まる。

「エリックさん？」

リシエルは気付かなかった。

エリックがまっすぐに見ていたもの——自分たちをじっと見つめる紫の瞳に。

「エリックも意外にやるなあ」

クライルは感心したように二人の踊りに見入っている。

「王子、あの騎士をご存じで？」

ブランが問う。

「ああ、僕の新設騎士団の一員さ。腕が立つらしいからアーデン騎士団から引っ張って来たんだ。今は主に僕の護衛役をしてもらってるよ」

「いきなり王子の護衛役とは大抜擢ですね。そんなに強いんですか？」

「いやゝまだわかんない。ただ、あの容姿でしょ？ あいつを傍に置いておくと、女の子たちがどんどん寄ってきてくれるんだよねゝ。黒髪で無口でミステリアスゝとか言われてさ」

「それで…ですか？」

「うん」

クライルの無邪気な笑顔に、ブランは頭を抱えた。

それから先ほどからシグルトが一言も話さないことに気づき、

「おい、シグルト——」

呼びかけて、固まる。

シグルトは、微動だにせず、じっと踊るリシエルとエリックを見

つめていた。

その紫の瞳に殺意にも似た冷たさを見て、ブランは冷や汗をかいた。

周囲の気温が一気に下がったような気がする。

やがて、シグルトが口の端を吊り上げた。

「なるほど：宣戦布告というわけですか」

その顔に張り付いているのは、いつもの穏やかな微笑みとは明らかに種類の違う笑顔だった。

「シグルトこわく。 エリック、あいつ大丈夫かなあ…」

部下を案ずる言葉とは裏腹に、クライルは他人事のように呟いた。

曲も終盤に近付く。エリックとの息はぴたりと合い、頭で考えずとも体が勝手に動き、踊れていた。

リシエルは、エリックとの距離が少し縮まった気がして、もう一度尋ねた。

「エリックさん、カロンのことですけど――」

「何も教えるつもりはない」

返ってきたのは、先ほどと同じ、素っ気ない返事。

「だが、一つだけ忠告しておいてやる」

突然、エリックが顔を寄せてきた。

ふわりと黒髪がリシエルの頬を撫でた。

耳元で囁かれる声。

「————あいつを信じるな。お前が思っているような奴じゃない
————」

（え？）

何の事を言われたのかわからなかった。

「それってどういう——」

言っている途中で、曲が終わった。

同時に、エリックがリシエルから手を離し、一歩下がって一礼すると、さっと踵を返した。

「あ、ちょっと待っ——」

リシエルの制止も聞かず、すたすたと踊りを見物していた人垣の中へと行ってしまふ。

慌てて追いかけながら、先ほど囁かれた言葉の意味を考える。

（あいつ…あいつって？）

考えても、一人しか思いつかない。

（先生…？）

19 罨

リシエルは、エリックを追って広間の外へ出た。
だが、廊下には誰もいない。

しんと静まり返った廊下を少し進んでみたが、彼の姿を見つけることはできなかった。

（先生を信用するなって：どういうこと？）

囁かれた言葉に、得体の知れない不安が広がる。

彼は、自分の知らない師の顔を知っているのだろうか。

シグルトは自分を恨んでいる人間がいるかもしれないと言っていた。

彼がその一人なのか。

一体、彼と師の間に何があるというのか。

それは、彼がカロンについて語ろうとしないことと関係があるのだろうか。

疑問だけが次から次に生まれ、頭の中を飛び交う。

だが、こんなところで一人考えても答えが見つかるはずがない。

諦めて、広間に戻ろうと踵を返すと、すぐ目の前に背の高い男がいた。

「きゃっ」

驚いて声をのけざると、屋敷の使用人らしき男は丁寧に一礼した。

「驚かせて申し訳ございません。リシエル様ですね？」

どこかで聞いたことがあるような声だったが、気のせいだろう。

「そうですけど…」

リシエルが頷くと、男は広間へ向かうのとは別の廊下を手で示した。

「シグルト様がお呼びです。お二人でお話されたいそうで、客間をご用意してあります。どうぞこちらへ」

二人で話したい——さっきの続きだろう。

リシエルはまた心臓の鼓動が早まるのを感じた。

エリックと踊っていたせいで、シグルトの気持ちにどう応えればいいのか、何も考えられていない。

しかも、エリックにあんなことを言われた後だ。

どんな顔でシグルトに会えばいいのかもわからない。

シグルトがいつも読んでいる小説なら、この後どんな展開になるのだろう。

今さらだが、シグルトが言っていたように、恋愛小説くらい読んでおくべきだったと後悔した。

「わかりました」

波立つ気持ちを抑え、歩き出した男の背について行く。

男は無言で、魔法による薄明かりで照らされた廊下を進んで行った。

途中幾度か角を曲がり、その度に広間から漏れる音楽と喧騒が次第に小さくなって、やがてほとんど聞こえなくなる。

男が立ち止まったのは、廊下の突き当たりにある扉の前だった。

「こちらのお部屋です」

男が扉の取っ手に手をかけ、ゆっくりと扉を開いた。
途端に、ひんやりとした空気が流れてきた。
目に飛び込んできたのは、緑の草木。

（え？外？）

リシエルがそう思った瞬間、視界をまばゆい光が覆った。
そして、意識が途切れた。

「おかしいですね・・・」

人気のない廊下で、シグルトは呟いた。

「おい、シグルト。どうしたんだよ？」

リシエルが広間を出るのを見て、クライル王子への挨拶もそこそこ、人混みを掻き分け後を追ったシグルトに付いてきたブランが怪訝そうに言った。

「シグルト様、いかがなされました？」

広間を出ていく二人が見えたのか、リンベルト伯爵が後から焦った様子で追いかけてきた。てっきり、またシグルトの機嫌を損ねてしまい、途中で帰ってしまうのかと思ったらしい。

「リシエルがいない……」

「いないって……どこにはいるだろう？」

「あの子が初めて来た場所を勝手に一人でうろつくはずがない」

「先に帰ったとか？」

「馬車を使ったなら私に連絡が来るはずですよ。あの格好で歩いて帰るわけもないし」

「まあ、確かに……」

二人の会話を聞いて伯爵が慌てて言った。

「リシエル様がいらっしゃらない？ 屋敷内を捜させますか？」

シグルトはそれを無視し、しばらく腕組みをして考え込んでいる。

「……そういえば、君の弟子はずっと姿が見えないですけど、どうしたんです？」

「あ、ああ？ パリスなら、お前とリシエルが踊ってる間に、気分

が悪くなったからって帰ったぞ？」

「……そうですか」

ブランが不快そうに眉をひそめた。

「おい、なんだよ？ まさかパリスがリシエルになんかしたっていうのか？ まだリシエルがいなくなったって決まったわけでもないのに、俺の弟子を疑うのか？」

シグルトは答えない。ブランは苛立ち、弟子を庇おうと思いついた可能性を口にした。

「さっき踊ってた、あのエリックとかいう騎士と一緒にいるんじゃないのか？」

「……違うな」

全員が一斉に声のした方を振り返った。

いつからいたのか、赤い騎士服をまとった、黒髪の男が腕を組み、壁にもたれて立っていた。

シグルトは驚いた様子も見せず、微笑んだ。

「やあ、エリックさん。その節はどうも。先ほども弟子の相手をして頂いたようで……」

「また襲われないように、あんたの代わりについててやっただけだ」

「また？」

ブランがシグルトを見る。シグルトは肩をすくめ、

「ちょっと前にあの子を狙って攫おうとした輩がいますね。それをこの方が救って下さったんですよ」

「な…！ リシエルが誰かに狙われてるっていうのか！？」

リシエルがここにいないという事態の深刻さを悟って、ブランの顔色が変わる。

「なんと！ で、でも、リシエル様も導師様の弟子になられる程の優秀な魔道士。そうそう滅多なことは…だ、大丈夫でしょう？」

自分の屋敷で問題が起こったと認めたくない伯爵が上げた声に、答える者はいなかった。

しばしの重苦しい沈黙の後、口を開いたのはエリックだった。鋭い眼差しでシグルトを見つめながら言った。

「いずれにせよ、早く探した方がいいな。あいつはあんたが守るんだろ？ 大魔道士様」

「ええ、もちろん。あの子は私が守ります。私からあの子を奪おうとする人間を、私は許しません。…絶対にね」

シグルトは微笑みを崩さず、エリックの眼差しに怯むことなく、彼をまっすぐに見返した。

二人の様子にブランは不穏なものを感じ、怪訝そうにエリックとシグルトを見比べる。

シグルトがそれまで無視していた伯爵に向き直った。

「伯爵、人に見られずに屋敷に出入りする方法はありますか？」

「え、ええ。それなら、裏の通用口を使えば…でも、あそこは魔道士に防犯用の術を掛けてもらっていて、屋敷の人間以外は入れないようになっているはずですが…」

「案内していただけますか」

「わかりました」

伯爵を先頭に、シグルトとブランが続く。少し後に、エリックがついて来た。

「ここです」

伯爵が立ち止まったのは、何度か角を曲がった廊下の突き当たりにある扉の前だった。

シグルトは、扉の前にしゃがみこむと、廊下の床をそっと撫でた。傍から見ると何ら変わったところのない石の床。

「…なるほど。やられましたね」

「これは…！」

シグルトの肩越しに床を覗きこんだブランが、顔を歪めた。

「ど、どういふことです？」

シグルトの言葉の意味がわからず、伯爵が問う。

「先ほど伯爵が仰ったように、ここに防犯用の魔法陣が敷かれています。屋敷の人間以外が、その扉を使って外から侵入すると、術が発動し、侵入者は気絶する。これがついさっき発動した形跡があります。魔法陣に蓄えられた魔力がほとんど残っていないし、魔法陣自体消えかけている。あと少し来るのが遅かったら、この痕跡も消えてしまっているところでした」

「じゃ、じゃあ何者かがこの屋敷に侵入したと？」

「いえ。それならこの魔法陣を敷いた魔道士にすぐに伝わり、伯爵に報告がいくはずです。この魔法陣は、違う術式に書き換えられていたようです」

「書き換える？」

「屋敷内に既にいる部外者、外に出て行こうとする者に対しては効果が無いという点を利用して、犯人は堂々とこの魔法陣に触れ、術式を書き換えたんです」

シグルトが床に手を翳す。とたんに床が赤紫色に光る。浮かび上がった光の線が、幾何学的な文様を描いていた。

一般人には理解できぬその文様を見て、ブランが息を飲む。

「部外者の女性が踏むと術が発動するように書き換えられている。おそらく、書き換えを行った魔道士の他に男性の協力者がいるのでしょうね。その協力者がリシエルをこの魔法陣の上まで案内し、気絶させ、そのまま外へ出て連れ去った、ということでしょう」

「犯人はなぜそんな手の込んだことを？」

「私とブランに気取られないためでしょうね。近くで誰かが魔法を使えば、すぐに私たち魔道士は発生した魔力を感知し、術が使われたとわかります。しかし、魔法陣による魔法は、魔法陣が描かれた時点で術が完成・発生していて、単にその効果が条件が満たされるまでの間、先延ばしされているに過ぎない。犯人はその条件を書き換えただけで、新たに魔法を使っているのではないんです。つまり、私たちはこの魔法陣によってリシェルが倒れても、気付くことができないんですよ」

「は、はあ…」

伯爵は曖昧に頷いた。理解できていないのが表情にはつきりと出ている。

シグルトは意味ありげにブランを見た。

「正面口から堂々としてきて、こっそり魔法陣を書き換え、後は協力者に任せ、自分はさっさと屋敷を去る。いざとなれば自分は関係ないと、しらを切るつもりなのでしょう。これをやった人物はなかなか優秀ですよ。術者に気付かれることなく魔法陣を書き換えるなんて、並みの魔道士じゃできません。私や君なら簡単ですが。あとは、そう…」

「もういい。わかった」

ブランは遮り、顔を歪めて首を振った。

「あの馬鹿…!」

頭を掻きむしって、うなだれる。

「犯人の目星がついたらしいな。で、どうやって見つけるんだ？」

今まで少し離れてやり取りを見守っていたエリックが口を開いた。
答えたのはブランだった。

「シグルト、すぐにお前の家に向かおう。リシエルの持ち物が何かあれば、探知の術で居場所を突き止められる」

「そんな悠長なことをしている時間はありません」

「じゃあどうするんだよ？」

シグルトは立ち上がると、エリックを振り返った。

「エリックさん、協力してもらえませんか？」

「……」

「今も持っているんでしょう？ アレ」

「…あんだ、やっぱり俺のこと気づいてたんだな」

シグルトは答えず、黙って微笑んでいる。

「お前ら、何の話をしている？」

突如始まった会話を理解できず、ブランが言った。

エリックはため息をつくど、懷から何かを取り出し、シグルトに向けて放った。

シグルトが片手でそれを受け止める。

「恩に着ますよ」

シグルトの手の中には、小さなガラス玉が握られていた。細い金の鎖が付いており、ペンダントのようだ。透明なガラス玉の中には、装飾を施された細長い三角形の金属がふわふわと浮いていた。

「な…“魂の羅針盤”？」

声を上げたのはブランだった。

「それ、リシエルのだっていうのか？」

「ええ」

「嘘だろ？　だってリシエルは…というか、なんでこんなものあいつが持ってるんだよ？」

信じられないといった表情を浮かべ、動揺するブランに、シグルトは苦笑した。

「まあ、今はそんなことはいいいじゃないですか。それより、どうします？　君も来ますか？」

問われて、ブランの顔が陰しく引き締まる。

「ああ。弟子の不始末は師匠がつける。当然だ」

「では、行きましようか」

シグルトはくるりと伯爵を振り返ると、

「伯爵。今夜はお招きいただきありがとうございます。残念ですが、私たちはこれで」

それからエリックに向き直り、受け取ったガラス玉を振ってみせた。

「では、これ、ちょっとお借りしますよ」

「……」

「そんな怖い顔しなくても、ちゃんと返しますよ」

シグルトは困ったように笑った。その人の良さそうな顔を、エリックは無言で睨みつける。

その様子にシグルトは、ただ肩をすくめると、ブランを促して、屋敷の外へと出て行った。

エリックと伯爵だけがその場に残された。

「もう何がなんやら……」

呆然と二人を見送った伯爵は、エリックに言った。

「君は行かなくていいのか？ リシエル様の友人なのだろうか？」

エリックは伯爵に背を向けた。

「俺はクライル王子の護衛の任があるからな」

それから、少し間をおいて、付け加える。

「…それに、あいつとは別に友人っていうわけじゃない」

そのまま、緋色のマントを揺らしながら、去って行った。

19 罨（後書き）

更新遅れてしまいました！

次話は日曜に更新できる：かな？がんばります！

たくさんのお気に入り登録して頂きまして、本当にありがとうございます★

20 過去への手掛かり

…人の話し声がする。二人の男の声。

片方の声には聞き覚えがある気がする。

だが、頭がぼんやりして、何を話しているのかまでははっきり理解できない。

体中がだるかった。手足の先に軽いしびれを感じる。

それでもなんとか頭を少し持ち上げ瞼を開くと、数本の男の足が見えた。

背を壁に持たせる格好で床に座らされているようだ。

ここはどこだろう。

あまり広くはない、物置のような、色々なものが乱雑に置かれた部屋。

ゆっくりと意識が覚醒してくる。

（そうだ、私、気を失って…！）

はっとして、手前にいた男の足を辿って、上を見上げる。

青い髪を持つ少年の姿が目に見え込んできた。

「パリス…！」

リシエルの上げた声に気づき、パリスが振り返る。リシエルと目が合うと、その顔にいつもの人を嘲るような笑みを浮かべた。床に座らされているリシエルの前まで歩み寄り、彼女を見下ろす。

「目が覚めたか、カラス女」

リシエルは立ち上がろうとしたが、できなかった。手を前に出すことができない。後ろを振り返って確認すれば、両手が縄で縛られている。

仕方なく、自分を見下ろして笑う少年を見上げて問う。

「どうということ？」

目の前の少年が、自分を気絶させ、ここに連れてきたのは間違いない。

でも、一体どうしてそんなことをされなくてはならないのか。嫌われているのは知っているが、ここまでされる覚えはない。

「まさか、この間のもあなたが…？」

「ああ。邪魔が入ったらしいけどな」

「どうして、こんなこと…」

「シグルト様とエテルネル法院を守るんだよ」

パリスの目は笑っていなかった。

汚いものでも見るかのような目で見下ろしてくる。

「守る…？」

「お前みたいな無能な人間が、シグルト様のお側に図々しく居座っていると、シグルト様のお名前に傷がつくんだよ」

吐き捨てるようなパリスの言葉に、ずきん、と心が痛んだ。

弟子として法院について行くようになってしばらく経った頃、偶

然聞いてしまった魔道士たちの陰口を思い出す。

——シグルト様、なんだってあんな魔法の使えないガキを弟子にしてるんだ？——それは、ほら、やっぱりアレだろ？綺麗な子だしさ——浮いた噂がないと思ったら、そういう趣味だったのかよ——シグルト様も善人面してよくやるよな——自分に向けられた卑猥な噂話に子供心をひどく傷つけられた。でもそれ以上に傷ついたのは、自分を弟子にしたために、シグルトが悪く言われたことだった。

自分のせいで、シグルトの評判が下がってしまったことは事実だ。

「一体どうやってシグルト様に取り入ったのかは知らないけどな。お前みたいなの一つも魔法の使えない人間が、導師の弟子、それもシグルト様の弟子なんかやってること自体、罪なんだよ。お前はシグルト様にとっても、エテルネル法院にとっても、害にしかない。だから、僕は未来の導師として、お前を排除する」

「…私をどうするの？」

気丈に声を張ったつもりだったが、パリスの憎しみの籠った眼差しに声が震えた。

パリスの横にいた、商人風の小太りの中年の男が、にやにやと笑いながらリシエルの前にしゃがみこんできた。

「どれ、ちょっと失礼」

男はリシエルの顔に手を伸ばしてくる。反射的に顔を背けるが、顎を掴まれ、無理やり男の方を向かされる。男が目を見張る。その笑みが深くなった。

「ほお、これはなかなか…シグルト様が入れ込むのもわかるな」

「はっ！ ロドム、お前やっぱり田舎者だな」

パリスが鼻で笑う。

「王都じゃその程度の女、いくらでもいるよ。シグルト様なら、どんな女だってよりどりみどりだろうに、なんだってこんな女がいいんだか…」

「そうですかな？これほど高値が期待できる娘は王都にもそうはいませんぞ？黒髪自体、希少価値が高いですが、加えてこれほどの容姿となるとそうはいません。さらに、この娘の瞳の色。魔力で髪や瞳の色が変色した魔道士の女を欲しがるお客様は数多いですが、実際魔道士をどうこうするなど不可能に近いですから。断言してもいいですが、この娘なら、貴方様のお住まいの屋敷と同程度の価値はあります」

ロドムは明らかに興奮した様子で、饒舌に語った。

パリスは納得しかねる表情で、リシエルをじろじろと見た。

「ふーん…こんなのが？ 僕の家並みってなんかムカつくけど、人身売買のプロのお前が言うんだ。まあ、そうなんだろ」

「人身…売買…？」

不穏な単語に、声がかすれた。

「よかったな。お前、“高額商品”らしいぞ？」

パリスがにやりと笑う。

彼は、自分をどこかに売ろうとしているのだ。

思わず後ずさるが、すぐ後ろは壁だ。逃げられるはずがない。

リシエルの怯える様を愉快そうに見ていたパリスだったが、不意に表情を変えた。

「まあ、そんなに怯えるなよ。僕だって悪魔じゃない」

猫撫で声で言って、まるで天使のような優しい微笑みを浮かべる。こんな状況でなければ、その美しい顔に見とれていたかもしれない。

「お前がこのまま王都を離れて他の国へ行って、二度とシグルト様の前に現れないって誓うなら、見逃してやるよ。金も好きなだけやるし、好きなように生きればいい。…もちろん、戻ってこれないように、シグルト様の記憶は消させてもらうけど」

「パ、パリス様！ それは困ります！」

焦った表情で遮るように言ったのはロドムだった。

「この娘にはもう買い手がついております！」

「はあ？ 誰だよ？」

話を遮られて、パリスは不快そうに眉間にしわを寄せる。天使の笑みが崩れた。

「いかにパリス様といえども、お客様のお名前をお教えするわけにはいきません。黒髪の娘が手に入ったら譲ってほしいという方がいらっしゃるのですよ」

「こんなカラス娘がいいなんて…どこの変態貴族だよ。まあ、どんな貴族といえど、ユーメント公爵家に逆らえるわけがないんだ。いいから黙ってろ」

「いえ、貴族といいますか…あのお方は…」

なおも言い募ろうとするロドムを、パリスは氷よりも冷たい青い瞳で睨みつけ黙らせてから、再びリシエルへ視線を落とす。

「どうする？ お前にとって悪い話じゃないと思うけどな。お前だってその方が幸せだろう？ 魔法も使えないのに法院に居たって、いいことないぞ？ 周りから蔑まれて、お前だって辛いだろ？ 記憶操作の術は難しいけど、お前が忘れたいと願えば、僕なら全部忘れさせてやれる。一から人生やり直したらどうだ？」

シグルトを忘れ、異国へ行くか。

目の前の商人の“商品”になるか。

どちらかを選べということだ。

（どっちも絶対に嫌……！）

だが、とても逃げられそうにはなかった。

部屋にいるのはパリスとロドムという商人だけだが、リンベルト伯爵の屋敷でシグルトの元へ案内すると言ったあの男も当然彼らの仲間で、部屋の外にいるだろうし、他にも仲間がいるのかもしれない。

何より、パリスは新人の中でもっとも期待されている魔道士。自分が暴れるか何かしたところで、とうてい勝てるとは思えなかった。

（私に術が使えたら…）

状況は大いに違っていただろう。

そう思うと、シグルトを恨みたくなった。護身のために少しくらい教えてくれてもよかったのに、と。

だが、今さら無い力を嘆いても仕方ない。

リシエルにできるのは、時間稼ぎだけだ。誰かが気付いて助けに来てくれるまでの。

シグルトかブランか————

（エリックさん……）

夜会で踊った時の、彼の微笑みを思い出すと、なぜか力が湧いてきた。

（そうよ。エリックさんにまた会って、カロンのこと、なんとかして聞き出さなきゃいけないんだから）

「…そんなに私を先生から引き離したいの？」

リシエルはゆっくりと問いかける。

「わかりきったこと聞くなよ。お前はシグルト様の弟子に相応しくない」

「それは…そうかもしれない。でも、こんなことしてバレたら、あなただってタダでは済まないんじゃない？」

いくらパリスの実家がこの国で最も大きな力を持つ貴族だからといって、何のお咎めなしとはなるはずがない。

「自分に何かしたら、シグルト様がお怒りになるって？」

パリスの言い方は、何か含むものがあつた。

「たいした自信だな。よっぽど可愛がられてるらしいな」

「別にそういうわけじゃ…」

パリスも自分と師の関係を不純なものだと思っているのだと気づき、リシエルは頬を赤くした。

「確かにシグルト様はお前にご執着のようだ。だからこそ、さつさと目を覚まして貰わないとな。お前なんかそんな価値はないってことを」

どうもパリスは、リシエルを権力目当てにシグルトを誑かす悪女のように思っているようだ。

どこをどう見たらそんな発想が出てくるのだろう。

リシエルは自分に色気なんてないことは自覚していたし、一度だってシグルトの弟子だからといって威張ったりしたことはなかった。パリスはシグルトの弟子になれなかったことを、憧れのシグルトではなく、リシエルのせいだと思い込もうとしているのかもしれない。

「それに残念だが、バレない。周辺に結界を張ってあるから、探知の術を使ってもお前の居場所を探すのは無理だ。助けを期待してるなら諦めるんだな」

内心を見透かされて、リシエルは言葉に詰まった。

「周囲に結界が張ってあることもお前にはわからないわけか」

パリスは馬鹿にしたように笑い、それから急に真顔になった。

「……僕はな、最強の魔道士シグルト様に憧れて、ずっと努力してきた。シグルト様の弟子になりたいくて。人は僕のことを天才だの神童だの呼ぶけどな、僕は才能に甘えずに、自分を鍛え続けてきたんだ。それこそ血を吐く程の辛い修行にも耐えてきた。魔術学院でだって、いつも1番だった。なのに……なのにつ……シグルト様はっ……」

パリスがぎりっと歯を噛み締めた。

「なんでお前みたいなのを選ぶんだよ！ 僕の今までの努力は一体なんだったんだ！」

悲痛なパリスの叫び。

多分、彼は今まで望んで手に入らなかったものなどなかったのだろう。

元々才能があるうえに、出自にも恵まれ、でもそれに甘んじることなく、努力を積み重ねてきた。シグルトの弟子になるために。彼の傲慢とも言える言動は、すべてその努力がもたらす自信ゆえなのだ。

それに比べて、自分はどうかのだろう。

記憶を取り戻したい、魔道士になりたい、と願いながら、実際どこまで努力をしてきただろう。

魔法を覚えてくれないシグルトに文句を言うだけで、自力で修得してやろうとも思わず、記憶を取り戻すために他の手段を探すこともしなかった。

こんな自分が熱望した地位にいることに、パリスが耐えられないのも無理はない。

確かに、自分よりパリスの方が弟子になる資格はあるように思えた。

「…先生が私を弟子にしてくれたのは…同情…だと思う…」

シグルトが自分を側に置いてくれる理由。

こんな何の取り柄もない自分を、周囲に色々言われてまで側に置いてくれる理由など、他に考えられなかった。

愛している。そう言ってくれたのだって、記憶も身寄りもない自分がかわいそうで、放っておけないだけの話かもしれない。

シグルトの気持ちに甘えて、いつまでも弟子でいたら、パリスのように本当に優秀な人間や、シグルト自身にも迷惑を掛けてしまうのかもしれない――

うなだれるリシエルに、パリスの声が上から降ってきた。

「ああ、そういえばお前、孤児なんだってな。同情で弟子にして貰えるなら、僕も孤児だったらよかったのに」

…孤児だったらよかったのに？

何かがリシエルの中ではちんとはじけた。

湧きあがる怒りに、きつとパリスを睨み上げる。

「あなたに何も持っていない人間の気持ちなんてわからない」

パリスが目元を吊り上げた。リシエルも負けじと睨み返す。

パリスはシグルトの弟子である自分を妬んでいる。

でも、リシエルだってパリスをずっと羨んできた。

同い年なのに、出会った時には既に難しい魔法を使いこなしていて、彼の周りにはいつも魔道士たちの彼への賞賛が絶えなかった。

法院内で疎ましがられていたリシエルには、皆から認められてい

る彼が羨ましくて仕方なかった。

そして、ユーメント公爵家という家——家族があることも。

パリスがこれまで挫折を知らずにこれたのは、その才能もあるのだろうが、きっと大事に彼を守って、甘やかし、愛してくれる家族がいたのだろう。

何もかも失った自分と比べて、彼はなんて多くのものを持っているんだろう。

なのに、そのことに気付きもしないで、たったひとつのものが手に入らないばかりに駄々をこね、持っているものすべてに価値がなにかのように吐き捨てる。

許せなかった。

「何でも持つてるあなたと違って、私には…私には先生しかないの」

リシエルにとって、拠り所となる存在は、シグルトしかない。

シグルトが名前を与え、居場所を与えてくれたから、自分が何者かもわからない孤児は、“シグルトの弟子、リシエル”という存在になれた。

だが、シグルトと過ごした6年間の記憶を奪われ、引き離されたら、その今の自分すら失ってしまう。

それは、何よりも恐ろしいだった。

「先生を忘れるなんて絶対に嫌」

きっぱりと言い切ったりシエルを、パリスはしばらく睨んでいたが、不快さの滲んだ声で言った。

「……交渉決裂だな。どっかの変態貴族に買われて、シグルト様の代わりに可愛がってもらえ」

パリスの言葉に、ロドムは安堵の表情を浮かべた。

「見かけによらず、意外に気が強いねえ」

リシエルの顔を覗きこんでくる。

「…しかし、さっきから気になっているんだが、お嬢さんの顔、ずっと前にどこかで見たような気がするんだが…」

息がかかりそうな程、顔を寄せられて、リシエルは必死で顔を背けた。

「ああ、そうだ！ 思い出した！」

ロドムがぼんっと手を叩く。

「お嬢さん、カロンのいただろう！？」

（え—————？）

背けた顔を元に戻し、今度はリシエルが食い入るようにロドムを見つめる。

「なんだ、こいつのこと知ってるのか？」

パリスが怪訝そうに問う。

「ええ。昔カロンの攫おうとした子供です。目の色が変わってますが、間違いない。名前は…なんだったかな？ リシエルなんて名前

じゃなかったと思うんだが…」

「そいつがなんでシグルト様の弟子に収まってるんだよ？ 逃げられたのか？」

「いえ、連れて行こうとしていた時に、生意気な魔道士の女に邪魔されましたね…」

「魔道士の女？」

ロドムは嫌な思い出が蘇ったのか、忌々しげに顔を歪めた。

「灰色の髪の毛、やたらと気の強い女でしてね。何度かこの娘を連れ去ろうとしたんですが、その女がいつも傍についていたせいで手が出せずじまいで…そのあとカロンでの紛争があったんで、てっきりこの娘も死んだと思っていたんですがね」

「カロン…灰色の髪…」

パリスがはっとしたようにリシエルを見た。

「お前、まさか…アーシェと知り合いだったのか？」

アーシェ———

心臓がばくんと跳ねた。
なぜだろう。

初めて聞いたはずの名前なのに、ひどく懐かしい感じがする…
自分はこの名前を聞いたことがある…：何度…：何度…：：

「知らないのか？ シグルト様の前の弟子だよ」

「先生の…前の弟子…」

自分の前にも弟子がいたなんていう話は初めて聞いた。シグルトもブランも、誰もそんな話はしたことがない。

「まあ、知らなくても無理ないか。アーシェのことは法院内じゃ禁句になってるし。シグルト様だって自分からは話されないだろうしな」

パリスは何かを思いついたのか、納得したように頷いた。

「そうか。もしかしたらシグルト様がお前を弟子にしたのは、お前がアーシェと繋がりがあったからかもな」

先生の前の弟子と、私がカロンで一緒にいた――？

リシエルは激しく混乱していた。

だからシグルトは自分を引き取ってくれたのか。

もしリシエルと弟子との繋がりを知らずに引き取ったのだとしても、なぜ自分の弟子がカロンにいたことを何も言ってくれないのか。

先生も弟子がカロンにいたことは知らなかったのか。

その弟子とたまたま自分が知り合いで、カロンの争いで自分を拾ってくれただけなのか。

すべてはただの偶然なのか。

様々な疑問が溢れてくる。

いずれにせよ、鍵はその“アーシェ”という人物だ。

自分の過去を知る、最も大きな手掛かり。

「その…アーシェっていう人は今どこにいるの？」

「アーシェはシグルト様に——」

言いかけて、パリスは言葉を止めた。

「まあ、もうそんなことはどうでもいいだろう？ お前はどうか、この先一生自由のない生活を送るんだからさ。お前がアーシェの知り合いだろうが何だろうが、お前がシグルト様の弟子に相応しくないことに変わりな——」

「お願い！教えて！」

自分でもびっくりするくらい大きな声が出た。
必死の形相で見上げてくるリシエルに、パリスは一瞬たじろいだ。

口を開きかけるが、ロドムがそれを阻む。

「パリス様。そろそろ宜しいですか？」

「あ、ああ」

促され、パリスは頷いた。

「さて、おしゃべりはここまでだ。新しいご主人様のところへ連れ行つてやろう。いくらで買い取つて下さるか楽しみだ」

ロドムがいやらしい笑みを浮かべながら、手を伸ばしてくる。
リシエルは自分が売られようとしている状況を思い出し、身をすくませた。

「い、いや……」

「さあ、立て」

ロドムがリシエルの腕に手をかけた。

むき出しの腕に、かさついた男の手のひらが触れ、その感触に悪寒が走る。

「いや！離して！」

リシエルが声を上げた、その瞬間――

ぽきっ

鈍い音がした。

「ウギヤヤヤア！！！！」

ロドムの口から絶叫が漏れた。

リシエルから手を離す。

その手は、不自然に力なくだらんと垂れ、揺れている。
手首と肘の真ん中で腕が折れ曲がっていた。

「い、痛い！痛い！折れた！！」

「――――これは一体どういうことでしょう？」

突然の声に、全員が部屋の入り口を振り返った。

白銀の髪 of 魔道士が立っていた。

その顔にいつもの微笑みはない。

紫の瞳が、凍てつく冷たさを湛えて、射抜くようにパリスを見つ

めている。

初めて見る師の表情に、リシエルは安堵よりも先に不安を覚えた。
パリスがごくり、と唾を飲み下す音が聞こえた気がした。

20 過去への手掛かり（後書き）

日曜更新は日曜更新でも、次の日曜になってしまいました。すみません ^^ ；

どうも先生がいないシーンは書き進まないんです。なぜだろう？

21 師匠

「先生…」

安堵と不安の入り混じった声で呼びかけると、シグルトはリシエルへ視線を移した。

「勝手に私の傍から離れちゃ駄目だって、言ったでしょう？」

シグルトは呆れたように言って、リシエルに近づく。

ぱさり、とりシエルの手を縛っていた縄が勝手に解けた。これもシグルトの魔法だろうか。

赤くなった両手首をさすっていると、シグルトがリシエルの前に膝をついた。

紫の瞳が心配そうに覗きこんでくる。

「大丈夫ですか？ 怪我は？」

「大丈夫です…」

シグルトは安心したように微笑んで、自分の上着を脱ぐと、リシエルにそっとかけてくれた。

「怖かったですでしょう？ 来るのが遅くなってしまってすみませんでした」

リシエルは黙って首を振った。あまりにも色々なことがありすぎて、言葉がうまく出て来ない。

シグルトが掛けてくれた上着をぎゅっと握りしめる。そのぬくもりに、もう大丈夫なんだという実感が湧いた。

シグルトはそんなリシエルの頭を優しく撫でた。

それから立ち上がると、呆然と固まっているパリスを振り返る。

「さて…」

そこには、いつもと変わらない微笑みがあつた。

しかし、リシエルに向けていた時とは明らかに違う、“何か”を感じて、パリスは震えあがった。

「痛い！痛い！た、助けてくれ」

シグルトの足元ではロドムが折れた腕を抱えて、見苦しく喚いている。そんな彼を見下ろしてシグルトはため息をついた。

「騒がしい人ですね。それくらいで済んでよかったじゃないですか。腕、切り飛ばすことも出来たんですよ。でも、この子にあなたの汚らしい血がかかったら嫌ですからね。折るだけにしておいたんです」

淡々と語るシグルトの言葉に、ロドムは激痛を訴えるのをびたりとやめた。痛みより、今日の前にいる男への恐怖が勝った。

「そうそう、少し静かにして下さいね。でないと、口も聞けなくなりますよ？」

満足げに言って、シグルトは再びパリスを見た。

「シ、シグルト様…どうしてここが…？」

そう問うパリスの声は、震えていた。

「君のおかげで、作りたくもない借りができてしまいましたよ」

シグルトは苦笑する。

パリスにはどうしてシグルトがこの場所を突き止められたのか、まったく見当がつかなかった。自分の結界は完璧だった。通常の探知の術では絶対に探し出せないはずだ。

それに、先程ロドムの腕を折った術。シグルトはなんでもないことのようにやってのけたが、それが相当難しい技であることは魔道士なら誰でもわかる。並の魔道士が同じことをしようとすれば、術の使用に伴って発生する魔力の余波を抑えられずに、リシエルまで傷つけることになっていたはずだ。だが、シグルトはリシエルに傷一つ負わせず、正確にロドムの腕だけを狙ってへし折った。

「シグルト様、やっぱりあなたはすごい……」

ずっと憧れ続けた、最強の魔道士の力を目の当たりにして、パリスは思わず呟いていた。

だが、そんなパリスに向けられるシグルトの目は冷ややかだ。

「いくら誉めてもらっても、君を許す気にはなれませんね」

紫の瞳に気圧されて、パリスは一步後ずさる。

「パリス君。以前君には言いましたよね？ 私にとってリシエルは特別な存在だ、と。それを知りながら、君は私からあの子を奪おうとした。私にとって、何より大切なあの子を」

その言葉は、安堵で少し落ち着きを取り戻しつつあったリシエルの心臓の鼓動を再び速めさせた。シグルトが他人に自分のことをこんな風に語るのを聞くのは初めてだった。

（特別な存在……）

こんな時なのに、頬が熱くなる。

だが、同じ言葉はパリスに怒りをもたらした。

「どうして…？ どうしてそいつなんです…？」

震える声で問う。

「僕にとっては、あなたこそ特別なのに…どうして僕を選んでくださらなかったのです？」

「…気持ち悪いと言わないで下さいよ」

シグルトの顔が引きつる。

パリスは構わず続ける。

「シグルト様、僕の伯父、ラスコー將軍を覚えていらっしゃいますか？ 8年前、隣国レグリントとの戦いで戦死した…」

シグルトは覚えているのかいないのか、無反応だ。

「ヴァーリス軍最強の戦士。そう呼ばれていた伯父は僕にとって、憧れの存在でした。いつか伯父のようになるのが夢であり、僕の目標だったんです。でも、絶対に誰にも負けない。そう信じていた伯父はレグリント軍との争いで敗れ、あっけなく死んでしまった…当

時、大陸でもっとも強い軍隊を持つといわれたレグリントには、伯父も勝てなかったのです…」

パリスはまっすぐにシグルトを見た。

「その1年後です。シグルト様、あなたがレグリント軍を打ち破ったのは。圧倒的に数で勝る敵軍を下せたのは、あなたの並はずれた魔力のおかげだった。あなたはたった一人で敵軍のほとんどを壊滅に追いやった。伯父にもできなかったことを、あなたはあっさり成し遂げた…その時から、あなたは僕の目標になりました」

パリスの話を、シグルトは無表情に黙って聞いている。

「僕はただ、あなたに憧れて…認めて貰いたくて…ずっと頑張ってきたんです。あなただけを目標に…なのに…なのに、どうしてこんな奴を弟子にしたんです？ 才能も、実力も、想いも、僕の方がずっと上なのに…僕の方がこんな奴より、あなたの弟子に相応しいはずです」

パリスにじろりと睨まれ、リシエルは身を竦ませた。

「なるほど。君は死んでしまった伯父さんへの憧れを、勝手に私に向けたわけだ。その挙句にリシエルに嫉妬ですか…いい迷惑です」

パリスが精一杯語った気持ちを、シグルトはぼっさりと切り捨てた。

「…いいでしょう。それほどまでに弟子になりたい、というのなら、君を私の弟子にしてもいい」

シグルトが口元に薄く笑いを浮かべた。

「ただし、君が私に勝てたら、ですが」

パリスは目を見開いた。

「そ、そんなの無理に決まってるじゃないですか…！」

自分には才能があると思っている。だが、最強の魔道士に勝てると思うほど、自惚れてはいない。

「おや？ 君は私の弟子に相応しい実力の持ち主なのでしょう？ それをここで証明して下さいよ」

シグルトはゆっくりと片手をパリスへ向ける。

パリスは後ずさった。

「無理です！ あのアーシェでもあなたには……………！」

叫びが終わらぬうちに、シグルトの手がゆっくりと空を握った。

「んぐあっ！？」

パリスの喉から潰れた声が漏れた。

喉が圧迫される。まるで不可視の紐で首を締め上げられているかのようだ。

反射的に喉に手をやるが、触れられるのは自分の首だけ。

「どうしました？ いいんですよ。抵抗して。君の力を見せて下さい。でないと、君……………ここで死にますよ？」

圧力はどんどん強くなっていく。
息ができない。

抵抗しようにも、術を使うために集中することなどできるはずもない。

視界がぼやけていく。

それでも気配で、シグルトがくすりと笑ったのがわかった。

「まあ、君が全力を見せてくれても、結果は変わりませんが」

（ああ、そういうことか…）

君よりリシエルの方がはるかに強い——

パリスは仕立て屋でのシグルトの言葉の意味を理解した。

リシエルに危害を加えるものがいれば、シグルトはその者に制裁を加える。

おそらくは、自らに直接攻撃された時よりも、容赦なく。

最強の魔道士に、その力を惜しげもなく振るわせる唯一の存在。

その意味で、リシエルはパリスより強い。

あれは、シグルトの自分への警告だったのだ——

だが、いまさら気づいても遅い。

「……！」

首を締め上げる力はいよいよ強くなっていく。

恐怖を感じながらも、パリスは覚悟した。

（…僕はここで死ぬ…）

ずっと憧れ続けた存在の手にかかって。

ぼんやりした頭で、同じくかつて憧れた、灰色の髪の少女のことを考える。

(・・・アーシェは・・・どんな気持ちだったんだろう・・・)

「先生やめて！」

リシエルが叫んだ。

その声に、一瞬圧力が弱まる。

と、次の瞬間、一気に首を締め上げていた力が失われ、パリスは膝から床に崩れ落ちた。

上半身が床に倒れこむ前に、太い男の腕がそれを支えた。

「…！ ブラン様…」

パリスが擦れた声で師の名前を呼んだ。

同時に、一気に肺に空気が入り込み、激しくむせた。

「しゃべるな。いいか、ゆっくり息しろ」

ブランはパリスの背中を撫でさすってやってやる。その手はほんのり緑色の輝きを放っている。

パリスの乱れた呼吸が整っていく。

「ようやく到着ですか。随分遅かったですね」

シグルトはブランの登場に驚くこともなく、言った。

「お前が早すぎるんだよ」

ブランはパリスの呼吸が正常に戻ったのを確認すると、弟子を飛ばのようにシグルトの前に立った。

「シグルト、頼む。見逃してやってくれ。この通りだ」

ブランはシグルトに向かって頭を下げた。

「それはまた随分虫のいい話ですねえ」

「わかってる。わかってて、頼んでるんだ」

「——嫌だ、と言ったら？」

「……」

ブランは真正面からシグルトを見据えた。

「：お前がリシエルを守る様に、俺も師匠としてこいつを守る」

思いがけぬブランの言葉に、パリスは驚いたように自分を庇う師の大きな背中を見上げた。

「そうですか。君ならわかってると思いますが、私は友人だからといって手加減はしませんよ？」

シグルトの手が再び前へと向けられる。

ブランは足を滑らせ肩幅まで開くと、両手を構える。

その額には、遠目でもはっきり分かるほどの冷や汗が浮いていた。空気がぴりぴりと張り詰める。

緊張が極限まで高まり——

突然、リシエルが立ち上がり、駆け寄ってシグルトの腕に抱きついた。

「リシエル？」

「先生、もういいです。帰りましょう？」

リシエルはシグルトを見上げて、懇願するように言った。
シグルトは眉をひそめる。

「何言ってるんです？ 君をこんな目にあわせた人間を放っておくことはできません」

「いいんです。無事だったんですから……」

「許すっていうんですか？」

「それは……すごく怖かったし、彼がやろうとしたことは許せないけど……」

「なら」

「私は先生とブラン様が争うのなんて……先生が誰かを傷つけるのなんて、見たくありません」

リシエルはまっすぐにシグルトを見上げて言った。

「帰りましょう？ ね？」

「……」

シグルトはしばらくリシエルを見つめていたが、やがて困ったように笑ってから、ブランに向けていた手を下した。

「私としてはパリス君を再起不能になるまで傷めつけないと気が済まないんですけど……まあ、君に嫌われたくはないですからね」

張り詰めていた空気が一気に弛緩する。

ブランは再び、さっきより深く、頭を下げた。

「リシエル。すまん、本当にすまん。恩に着る」

「ほんとに君、彼を弟子にしてから頭下げっぱなしですね」

シグルトが苦笑しながら言った。

「……パリス君。2度目はないですよ？」

パリスの肩がびくりと震える。

「じゃあ、ブラン。後は君に任せます。こちらから王都警備隊に通報はしません。君がしかるべく事後処理をして下さい」

「わかった。お前らにこれ以上迷惑はかけない」

「頼みますよ。パリス君は初犯で未遂としても、そっちの人は調べれば色々出てきそうな顔してますから」

シグルトがちらりと部屋の隅でうずくまっているロドムを見やると、ロドムはひっと小さく悲鳴を上げ、ますます縮こまった。

「さ、行きましょうか」

シグルトに背を押され、リシエルは部屋の扉へと向かった。だが、部屋を出る前に、リシエルは立ち止り、振り返った。床に座り込み、呆然としているパリスに向かって口を開く。

「ブラン様は…シグルト先生よりずっと、いい師匠せんせいだと思う」

「あの…リシエル？」

師の呼びかけは無視して続ける。

「だって、先生って女の子向けの恋愛小説ばかり読んで、夜更かして寝坊して、いつも会議に遅れそうになるし、仕事はしょっちゅうサボるし、国のために働こうとかそういう気概もまるでなくて、正直給料泥棒だし、術だって全然教えてくれないし」

「こらこら、なんてこと言うんですか、この弟子は」

シグルトは不服そうな顔だが、具体的に反論はしてこない。事実だけに否定はできないのだろう。

「だから、私はブラン様の弟子になれたあなたが羨ましいくらい」

パリスは黙ってぼんやりした目でリシエルを見ている。

「…それだけ」

リシエルは少し気まずそうに眼をそらすと、そのままシグルトと

ともに部屋を出て行った。

二人が去ると、ブランは黙ってパリスに手を差し出した。

パリスがその手を握ると、まだ少しふらつくパリスを立たせてやる。

パリスは目の前に立つ大柄な師を見上げた。

師は厳しい表情で自分を見下ろしている。

（もう、何もかも終わりだ…）

シグルトに命こそ取られなかったが、おそらく自分はブランに破門にされ、法院からも追放されるだろう。

法院から追放されてしまったら、導師になることはもちろん、もう魔道士としての成功は望めない。

そうなれば、自分が法院で権力を握ることを期待している父、ユーメント公爵は烈火のごとく怒るだろう。家も勘当されるかもしれない。

本当に、何もかも失うのだ。

自分の犯した、愚かな行為のせいで。

だが、そのおかげでようやく気づくことができた。

馬鹿にし続けた自分の師が、リシエルの言うとおり、“いい師匠せんせいだったことに。”

魔道士としての腕では確かにシグルトに劣るかもしれない。

だが、あの最強の魔道士の圧倒的な威圧感を前にして、自分は恐怖で何一つできなかったというのに、師はそんな自分を守るため、シグルトの前に立ち塞がってくれた。

自分なんかより、ずっとずっと強い人なのだ――

たとえ許されなくても、せめて最後までのことをきちんと謝ろう。

パリスがそう決意し、自分を見下ろす師に向かって口を開こうとした、その時――――

ばごっ!!

突然顔面に衝撃を受け、パリスは後方へ吹っ飛ばされた。

後ろの壁に背中から激突する。

激しい痛み顔に手をやれば、ぬるぬるとしたものに触れた。

おそろおそろ顔に触れた手を見ると、血がべっとり付いていた。

もしパリスが自分の鏡を見ることができたなら、無様に鼻から血を垂れ流す自らの姿を目にして、その場で卒倒していただろう。

「馬鹿野郎っ!!」

ブランの怒鳴り声に、パリスは身を震わせた。

見かけによらずいつも穏やかで、どれだけ無礼な態度を取っても、不快な表情ひとつ見せなかったブランが、ここまで大きな声を上げるのは初めてだった。

「お前のせいでシグルトに借りができちまっただろーが! あいつ、これからずっと俺に仕事押し付けてくるぞ。毎日残業だ。家に帰れると思うなよ」

「……僕は……破門ではないのですか……?」

恐る恐る問うと、ブランは眉を寄せた。

「馬鹿。俺は何があっても破門はしない、最後まできっちり面倒みるって、弟子入りの時言っただろうが。本当お前、俺の話まったく聞いてないんだな」

「なんで……? なんでですか……?」

てつきり弟子を辞めさせられるものと思っていたし、それが当然だとも思っていた。

「お前：猫好きだろう」

ブランが厳しい表情を少し緩めて言った。

「お前、法院の猫たちに毎日こっそりエサやってるだろ？ リシエルに頼まれて怪我した子猫を治した時もそうだろ？」

「なんでそれを…」

「リシエルから聞いた。“お礼をしたいけど、私はすごく嫌われてるみたいなので、ブラン様の評価がよくなるようにこっそりお知らせしておきます”だってさ」

ブランがにいつと笑った。

「猫好きに悪い人間はいないからな」

大きな手が、パリスの青い髪をくしゃくしゃと撫でる。

「お前はこれから俺が今まで以上に、びしばし鍛えてやるから覚悟しろよ。いいな？」

不意に――

師の顔が歪んだ。

パリスはとっさに下を向いてその原因を隠そうとした。

だが、それは次から次へ溢れてきて、止まらない。

ぽたぽたと落下し、床にシミを作る。

同時に、嗚咽が漏れる。

師は弟子の頭をぽんぽんと軽く2回叩いてから、困ったように笑った。

「お前、とりあえず顔拭け。涙と鼻血でひどい顔してるぞ？」

21 師匠（後書き）

ぎゃゝ2週間以上もあいてしまった！

言い訳させて頂くとちよつと体調を崩しておりました。

第1章もあとちよつと。

頑張ります！

22 それぞれの夜

「せっかくの16歳のお誕生日だっていうのに、散々な目に遇っちゃいましたねえ」

部屋を出ると、シグルトが呟いた。外には薄暗い廊下が続いている。生活感がないことを除けば、普通の民家のようなのだ。

途中、男が二人倒れていた。一人はリンベルト伯爵の屋敷で、リシエルをシグルトの元へ案内すると言った男だ。シグルトにかブランにかはわからないが、おそらく術によって気絶させられたのだろう。

玄関を抜け外へ出ると、そこはしんと静まりかえった人気のない住宅地だった。シグルトの住んでいるところと比べると、小さな、造りの粗末な家が多い。二人が出てきた家もそんな中の一軒だった。月の薄明かりに照らされ、遠くに国旗の翻る王城が見えた。

「ここ…どこですか？」

「王都のはずれにある、今は無人の家ですよ。多分、あのロドムとかいう人の持ち物なんでしょう」

シグルトはさして興味もなさそうに言った。

「さ、お迎えが来てますよ」

シグルトが目で指した方を見れば、一台の馬車があった。その前にはセイラが立っており、目が合うと黙って一礼した。

「先生、あれに乗ってここまで来たんですか？」

それにしてもやって来たのが随分と早い気がした。王城が見える位置からして、リンベルト伯爵邸はここからは真反対にあるはずだ。シグルトは笑った。

「まさか。君が攫われたっていうのに、悠長に馬車なんか乗りませんよ。来るときは空間が歪んでいるところを渡って近道したんです。便利なんですけど、目的地への“道”を探すのがなかなか骨で、すっごくしんどいんですよ、あれ。だから帰りは普通に帰ろうと思って、セイラに迎えを頼んだんですよ」

「空間の歪んでいるところ……？」

その言葉だけでは、リシエルにはシグルトがどうやってここまで来たのか、想像もつかない。それに、自分を探しにすぐに飛んできた師が、どうして家にいるはずのセイラに連絡を取れたのか。

「先生って、パリスのいう通り、ほんとにはすごいですね……」

「見直したでしょう？ 私もやる時はやるんですよ」

リシエルは素直に頷いた。

「でも……」

「なんです？」

「……いえ、なんでも」

言いかけて、リシエルは首を振った。

脳裏に浮かんでいたのは、先程パリスの首を術で締め上げていた時のシグルトの笑顔。

（さっきの先生は、少し、怖かった——）

師に対してそんな感情を持ったのは初めてだった。

馬車に乗ると、セイラが御者台に座った。馬の扱いまでできるらしい。

走り出した馬車の振動に身を任せながら、リシエルは一番気になっていたことを尋ねた。

「それにしても、どうして私の居場所、わかったんですか？ パリスが結界を張ってるって言ってたのに……」

術では居場所を突き止めるのは無理だとパリスは言っていた。では、師はどんな方法を使ったのだろう。シグルトはいたずらっぽく笑った。

「もちろん、愛の力ですよ」

「またそんな嘘ばかり——」

いつもの調子で言いかけて、リシエルは口をつぐんだ。

「嘘だと思いますか？」

じっと見つめられながら問われて、リシエルは思わず目をそらした。

夜会でのシグルトの告白を思い出し、頬が赤くなる。

「リシエル。私は君のためなら、どんなこともできる。たとえ人の道にはずれたことであろうともね。不可能だって可能にしてみせる。それは本当ですよ」

馬車の中、密室で二人きりという状況で、囁くように言われ、心臓が早鐘を打つ。

「先生…私は……」

うつむいたまま、膝に置いた両手をぎゅっと握りしめた。白いドレスにしわが寄る。次の言葉が出てこない。

「…正直な気持ちを言ってくれていいんですよ。私に恩があるとか、そんなことを思って遠慮しなくていい。私は君の正直な気持ちが聞きたいんです。それに…」

シグルトは愉快そうに続けた。

「君から与えられるものなら、何だって喜んで私は受け入れますよ。それがどんな罵詈雑言でも、酷い仕打ちでもね。君になら殺されたって構わない」

「先生って…ちょっと変です」

過激な口説き文句に、リシエルは少し笑った。

「ええ、頭がおかしくなるくらい、君にまいてるんです、私は」

さらりと言われて、ますます顔が熱くなる。騒ぐ心臓を落ち着かせるため、一息つく。

ためらいながらも、口を開く。

「先生のことは……大好きです」

ゆっくりと言葉を選びながら、自分の素直な気持ちを伝える。

「でも…け、結婚とか、恋とか、そういう…男の人として好きかって言われると…正直、よくわからないです…」

「…それは仕方ないでしょうね。君からすれば私は親代わりみたいなものだし」

予想していた反応だったのか、シグルトの顔に落胆の色はない。リシエルの手をそつと握り、続けた。

「でも、それでもいい。君が私を嫌いでないなら、たとえ恋愛感情じゃなくても構わない。君に男として好きになってももらえるように努力するし、絶対に幸せにすると誓いますから」

自分を見つめてくる紫の瞳には、いつにない真摯さが宿っていた。同情なんかじゃない。

この人は本当に自分を大切に想って、愛してくれている。そう確信させる瞳だった。

「先生と結婚したら、きっと私は幸せになれると思います。でも…」

いつだって優しく微笑んで、自分の傍にいてくれた師匠。

きつと結婚したら、彼の言う通り、幸せになれる。

“シグルトの妻”という存在になることで、自分が何者なのかという悩みからも、もしかしたら解放されるかもしれない。

そう思っても、リシエルは素直に頷くことができなかった。

「私は、今まで何もかも先生に与えて貰いました。この上自分の人生の幸せまで与えて貰うのは……違う気がするんです。それは……あまりにも甘えた生き方だと思います」

パリスのことが頭をかすめる。

自分にしようとしたことは簡単には許せない。

だが、シグルトの弟子になるために彼がこれまで積み重ねてきた努力は本物だし、そこには強い意志と行動力があったのだろう。

それに比べて自分はどうか。

自らの過去を知りたいと願いながらも、実際に何か行動を起こしただろうか。

（私は、自分の力で何一つ手に入れたことがない——）

「先生。私、やっぱり魔道士になりたい。魔道士になって、この瞳の色の理由^{わけ}を知って、自分の過去を、自分が誰なのかを知りたい。——与えて貰うんじゃない、自分の力で」

シグルトはしばらく黙って、リシエルの決意を宿した薄紅色の瞳を見つめていた。

だが、やがてどこか諦めたような表情で肩をすくめた。

「……これは“振られた”、ということになるのかな」

どこか寂しそうな声音は、内心傷ついているであろうことを感じさせた。

リシエルは首を振った。

「先生が嫌なんじゃないんです。…ただ、今の私じゃ、駄目なんです」

「…じゃあまだ脈はあるわけだ」

シグルトの表情が一転、悪戯を企んでいるかのようなものに変わる。

「確かにいきなり結婚してくれ、は急すぎましたね。焦りすぎました。その前に恋人になるっていうのが順序ですよ。うん、君も成人して晴れて大人の女性になったわけだから、これからは遠慮なく口説くことにします。君も覚悟して下さい」

「へ？」

不意にシグルトが、握っていたリシエルの手を持ち上げ、自らの唇に押し当てた。

「……！」

指に感じる温かい、柔らかな感触。

シグルトの紫の目がずっと細められ、自分を見つめる。

師の行動の意味は分からなかったが、胸がどきどきと高鳴った。恥ずかしいのに、紫の瞳から目が逸らせない。

シグルトがくすりと笑った。

「君が私を男として意識できるように、私も行動を改めます」

「……！」

「これからは今まで以上に君と一緒にいることが多くなるしね。君は私をただの怠け者の給料泥棒だと思ってるみたいですけど、導師会議を取り仕切る私を見たら、きっと見直してくれますよ？」

「先生、それって……」

馬車が止まり、シグルトがリシエルの手を離した。

と、同時に馬車の扉が開いた。セイラが扉に手を掛け立っている。その向こうにはシグルトとリシエルの家が見えた。

「魔法が使えるようになるのは、そう簡単じゃないですからね。そっちも覚悟して下さい」

「あ、ありがとうございます！」

シグルトは微笑んでリシエルの頭を愛おしげに撫でた。

「誰が何と言おうと、君は私の、たった一人の可愛い弟子ですよ」

（あ—————）

師の言葉に、聞きたくて仕方なかったが、きっかけが掴めなかった問いが思わず出そうになった。

（先生の、前の弟子。アーシェ——）

だが、やはり躊躇う。

理由は自分にもわからなかったが、なんとなく聞いてはいけないうことのような気がした。

師は聞かれたくないことだから、今まで自分に何も話さなかった

のではないか。

(でも——)

自分の過去を知る最大の手掛かりを、せっかく見つけたのだ。

シグルトが肩に掛けた上着を、決意を固めるように握りしめる。

馬車を降り、先に家へと向かうシグルトの背に向かって、おずおずと声を発した。

「あの、先生？ お聞きしたいことがあるんですけど」

「なんです？」

「アーシェ…さんて、今どこにいるんですか？」

前を歩いていたシグルトが急に立ち止った。

後ろを歩いていたリシエルは危うく、その背にぶつかりそうになる。

振り返らない背中に向かって確認した。

「先生の前のお弟子さん、なんですよね？」

「……パリス君が何か言いましたか？」

師の声音からは、何の感情も読み取れなかった。

「あの、先生が腕を折った…ロドムっていう人が、子供の頃の私と、そのアーシェさんらしき人がカロンで一緒にいるのを見たって言うてたんです…」

「……」

シグルトはなぜか黙り込む。

月の光を受けて淡く輝くシグルトの白銀の髪は、ぴくりとも動かない。

やはり聞いてはいけないことだったのか。

「先生？」

「…彼女には会えませんよ」

ようやく、そっけない答えが返ってくる。

「そんな…居場所わからないんですか？弟子なのに？」

落胆から、思わず非難めいた口調で問う。

「アーシェは…弟子を辞めたんです」

「え？」

「私の元を…法院を去ってから、あの子が何をしていたのかは知りません」

「そんな…どうして弟子を辞めたんですか？」

せつかく掴みかけた過去への手掛かりを失いたくなくて、さすがに問う。

と、不意に――

シグルトが振り返り、リシエルを抱き寄せる。

「きゃっ」

突然のことにシグルトの顔を見上げようとするが、腕の中に閉じ込めるように強く抱きしめられ、師の表情は見えない。それでも振り返った時の一瞬――泣いているかのように見えた。

「…リシエル。色々それらしいことを言いましたけど、私が君に魔法を教えなかった本当の理由はね、ただ怖かったんですよ」

腕の中で聞く師の声は、少し震えているように聞こえた。

「怖い？」

「力を得たら君は私を置いて、私の手の届かないところに去ってしまうんじゃないか……って。…アーシェのように……」

シグルトはリシエルを抱く腕にさらに力を込めた。まるで逃がすまいとするかのように。

「あんな想い…二度としたくない……二度と……」

「先生……？」

リシエルはただ戸惑い、どうしていいかわからなかったが、師の背中に腕を回し、慰めるようにその背を擦った。

こうして腕を回してみると、見た目よりずっとたくましい身体なのだとよくわかる。

（男の人……なんだ……）

初めてはつきりと意識した。

そして、初めて見る、何かに怯えるかのような、師の弱気な姿。リシエルの知るシグルトは、いつだって余裕があつて、常に微笑みながら自分を守ってくれる、そんな頼れる存在だった。

今自分にすぎるように身を寄せる師に戸惑いながらも、支えてあげたいという想いがこみ上げる。

今日一日で、今まで知らなかった師の様々な顔を見た。

真剣な表情で想いを告げた時の、男としての顔。

笑いながらパリスの首を締め上げた時の、少し怖い顔。

そして、今見せている、弱く脆い顔——

——あいつを信じるな。あいつは、お前の思っているような奴じゃない——

エリックが言う通り、シグルトには自分の知らない顔がまだまだあるのだ。

だけど——

「……先生、私、先生を信じてます。だから、先生も私を信じて。前のお弟子さんと何があつたのかわからないけれど、私はどこにも行きませんから。6年前の今日から、先生がずっと私の傍にいてくれたように——」

シグルトは答える代わりに、そつとりリシエルの髪を撫でた。

そんな二人の様子を、忠実なメイドは離れた所から静かに見守っていた。

だが、ふと何かに気づいたように視線を下へ向けると、すぐ横の地面を片足で踏みつける。

足をどかした跡には、潰れた小さな蜘蛛^{くも}の死骸。

それはすつと音もなく闇に溶けて、跡かたもなく存在を消した。

メイドは何事もなかったように、再び抱き合う二人へと視線を戻

した。

「おっと、気づかれたみたいだ」

男は忌々しげに舌打ちした。

薄暗い部屋の中、目の前には巨大な鏡。

鏡の中には緑色の髪の毛、眼帯をした男が映っていた。

鏡の表面が水面のように波打っているせいで、男の姿も揺らいでいる。

さっきまでは、そこに白銀の髪の毛の男と、黒髪の少女が抱き合う姿が映し出されていた。

「……あんたの術もたいしたことないな」

背後からかけられた声に、男はむっとすることもなく言った。

「途中までシグルトにも気づかれなかったんだ。誉めてほしいくらいだね。……まあ、奴も内心相当焦ってたんだろうが」

男は振り返り、少し離れたところに立つ黒髪の騎士に向き直った。

「邪魔は入ったが情報収集は成功だ、エリック」

「……そうか？」

「まず、あの娘は本当に魔法が使えない。でなきゃ、あの程度の罠に引っ掛かるわけがない」

「…そんなところから見てたのか」

「まあな。それからもう一つ」

男は意味ありげに笑った。

「シグルトはあの娘に相当入れ込んでる。あの人を人とも思わない冷血漢が、だ」

「……」

エリックは不快そうに顔をしかめた。

男はその様子をどこか愉快そうに眺めて言った。

「お前からしたら不愉快極まりない話だろうが……あの娘、たとえば記憶が無くても使えるかもしれないな」

その言葉にエリックは男をきつい眼差しで睨みつける。

だが、男は気にした風もなく、再び鏡の方へと向き直った。

鏡の中の男は、片手を持ち上げ、そっと自らの左目を隠す眼帯に触れる。

「もちろん、アーシェに会えることが一番なんだがな————」

＊ ＊ ＊

カツ———ン　カツ———ン

しんと静まりかえった空間で、ゆったりとした足音が響きわたる。やがて足音が止まり、ギイッと軋んだ音を立てて扉が開かれた。現れたのは、濃紺のローブをまとった若い男。

施された銀糸の刺繍が、部屋に灯されたろうそくの灯りできらりと光る。

男は、部屋の中央に置かれた、天蓋の付いた豪華な寝台へと近づく。

寝台の上には、一人の少女が横たわっていた。

黒いローブをまとった、年の頃17、8歳の少女は、眠っているように瞳を閉じてぴくりとも動かない。

男はさらに近付き、手をのばして、少女の頬をそっと撫でた。

「ロドムは失敗したよ。まあ、最初から期待なんてしてなかったけどね」

言葉通り、少しの落胆の色も見せずに、優しく話しかける。

「彼には君も昔会ったことがあるんだよ。カロンでね。そこで君は攫われそうになっていたあの子を助けた。運命なんてものがあるなら、まさに“運命の出会い”だ。あの子がいなきゃ、今の君はいなかった……」

話しかけられても、少女の目が開かれることはない。

「ああ、本当に君は、一体いつになったら目を覚ましてくれるんだ

ろうね…」

男は悲しげな表情で、寝台に手をついて、身を乗り出す。
眠る少女へ顔を近づける。

「早く目を開けてよ……僕の可愛いアーシェ……」

男の唇が、少女のそれと重なり合う。

振動で、少女の灰色の髪が一房、さらりと落ちた。

22 それぞれの夜（後書き）

第1章終了です。

次から新しい章に入っております。

最近不定期更新化しておりますが（汗）、次章もお付き合い頂けますと幸いです^^

23 白のローブ

——早く！　早く！　早く！

少年は、襲い来る火の粉にも構わず、全速力で走った。腕に抱える少女は息をしていない。

ただでさえ色白の肌は、完全に血の気を失っている。それでも心臓は微かに脈打ち、彼女の命が完全には消えていないことを示していた。

医者に連れていくことはできない。

この村で唯一の医者は、先ほど走り抜けた道の端で、死体となっていた。

少女の命を救えるのはたった一人しかない。

灰色の聖女。

村の皆がそう呼ぶ彼女しかない。

「もうすぐ…もうすぐ連れて行ってやるからな……！」

息を切らしながらも、少年は腕の中の少女に、声をかける。

反応はない。

自分が抱えているのは生きた人間なのか、それとも人形なのか。時折わからなくなるほど、瞳を閉じた少女は動かない。

少年は奥歯を噛みしめた。

一体どうしてこんなことになってしまったのか。

突然のことだった。

何の前触れもなく、空からいくつもの炎の塊が降ってきたのだ。あっという間に村中が炎に包まれ、そして国王軍の兵士が村にな

だれ込んできた。

兵士達は村人を見つけると切りつけてきた。
手当たり次第、無差別に。

村中に転がる死体の中には、少年にいつもよくしてくれた、パン屋の主人や、駄菓子屋の老婆の姿もあった。

少年は零れそうになる涙を振り払い、ただひたすら走った。

炎によって赤く照らされた、人々の悲鳴の響きわたる村を抜け、兵士に見つからないように裏手にそびえる雪山へと足を踏み入れる。雪に足を取られ、走ることはできない。

それでも、必死で前へ前へと突き進む。

木々に遮られ、よくは見えないが、遠くの方で何度か爆発音のような音がして、その度に稲妻のような光が瞬くのが見えた。

間違いない。

彼女はあそこにいる。

きっと誰かと戦っているのだ。

——自分たちを守るために。

少年はさらに足を速めた。

雪に埋もれる足は、もはや感覚がないほど冷え切っている。

あと少し。

あと少しだ。

急に視界が開けた。

森を抜けたのだ。

広がる白い雪原。

そこには、求める少女の姿があった。

少年より、少し年上で、少し背が高い、凜とした少女。
もう大丈夫。

その姿を目にしただけで、そう思える程、信じている存在。

呼びかけようと口を開く。
だが――

黒い光が閃いた。

一筋の暗黒の光がまっすぐに少女へと襲いかかり――少女の胸を貫いた。

鮮血が飛沫となって宙を舞い、落下して白い雪を赤く染める。

黒い光が消え、少女の体がゆっくりと後ろへ倒れていく。

灰色の髪が前へとなびき、倒れゆく少女の表情を隠す。

それでも、流れる髪の間隙から、微かに唇が動いているのが見えた。

多分、こう言ったんだろうと、後になって考えた。

先生、どうして――と。

少女が雪の中へ倒れ込む。

起き上がる気配はない。

ぴくりとも動かなかった。

倒れた少女へとゆっくりと近づく人影があった。

翻る白いローブ。

白銀の髪をした若い男。

少年はただその光景を呆然と眺めていた。

目の前で起こったことを、すぐには理解できない。

それでも無意識に、腕の中のもう一人の動かない少女を抱く腕に力を込める。

……アイツ……アイツが、コロシタ……

少年はゆっくりと少女の体をその場に横たえた。

長い黒髪が、雪の上に広がる。

閉じられた瞼は、雪の冷たさにも震えることはなかった。

もう彼女が再び目覚めることはないだろう。

たった一つの希望が今、奪われたのだから。

あいつが——あいつが——殺した——ア

ーシェを——！

そして、少年は絶叫し、腰の短剣を引き抜くと、駆け出した——

＊ ＊ ＊

目が覚めた。

リシエルは寝台の上で、ゆっくりと上半身を起こした。

手を伸ばして、カーテンをさっと開けると、眩しい朝日が一気に部屋を明るくした。

晴れ渡った青空を見上げながらも、気分が晴れない。

なんだか、酷く悲しい夢を見た気がする。だが、夢の内容はまったく思い出せない。

（今日は先生について初めて導師会議に出るのに…なんか、不吉…）

リシエルは暗い気持ちを振り払うように、寝台から勢いよく飛び降りた。

着替えようとして、気づく。

テーブルの上に、見慣れぬ折りたたまれた白い布があった。

不審に思っ、手に取り広げてみる。

「あ……！」

思わず声を上げていた。

着替えを済ませ、階下に降りると、既にシグルトは朝食を摂っているところだった。

姿を見せたリシエルに、目を細めて笑った。

「似合ってますよ、リシエル」

リシエルが今まとなっているのは、いつもの灰色のローブではなく、金糸の刺繍を施された、真っ白なローブだ。シグルトがまとう導師のローブに似た作りになっているそれは、導師の弟子と正式に認められた者だけが着用を許される特別なもの。

導師会議への出席にあたって、師が用意してくれていたのだろう。

「先生。ありがとうございます」

師が本当に自分を弟子として扱ってくれるつもりなのだとわかって、嬉しさがこみ上げてくる。

「今日は忙しくなりますからね。しっかり食べておかないと、身体が持ちませんよ」

「はい」

リシエルも席に着き、セイラが出してくれた食事に手をつける。白いローブを汚さないように気を付けると、食べ方がぎこちなくなる。

シグルトはその様子を可笑しそうに見ながら言った。

「今日はまず法院に行って、導師会議。そこで内部的な了承を得てから、王城へ行き、国王に謁見。君を準宮廷魔道士に叙任してもらうことになります」

リシエルは飲みかけのお茶を危うく吹き出しそうになった。

「こ、国王様に会うんですか？ 私が？」

「ええ。エテルネル法院は別にヴァーリス王家に服従しているわけではありませんが、持ちつ持たれつの関係ですからね。友好関係を維持していくために、そういう儀礼的な手続きが色々あるんですよ」

「なんか…すごく緊張します……」

まさかこの国で最も偉い人間に、自分が会うことになるうとは。緊張で一気に食欲がなくなる。

「導師の弟子ともなれば、今後王族や国のお偉方との関わり合いも増えてきますからね。慣れてもらわないと」

シグルトはこともなげに言う。

ただの魔道士の弟子になるのとは訳が違う。国家最高位の魔道士の、正式な弟子になるのだ。

リシエルは単純に魔道士になれると喜んでいた自分の愚かさを呪った。

「嫌なら別にいいんですよ。魔道士になるのは辞めて、今日の国王との謁見は君と私の結婚報告に変更しても……」

「いえ、頑張ります」

「そうですか。残念ですね。気が変わったらいつでも言って下さい」

シグルトは笑った。

いつもと変わらぬ師の笑顔。

その笑顔を見つめながら考える。

（先生は本心では、やっぱり私に魔道士になって欲しくないのかな……）

一体前の弟子との間に何があったというのか。

あの夜会の日から既に数日が過ぎていたが、結局そのことにはお互い触れることはなかった。

本当は気になって仕方がない。でも、シグルトの方から話してくれるまで待とうと思った。

前の弟子とのことが、師にとって深い心の傷になっているのは間違いない。いくら自分の記憶の手掛かりを得たいからといって、師に辛い想いはさせたくなかった。

「…私の顔に何かついてます？」

「あ、いえ」

リシエルの視線に、シグルトが訝しげに問う。

ごまかすように食事を慌ててかきこむ。

そんな弟子を、師は複雑そうな表情で見つめていた。

食事を終え法院に到着すると、待っていたのは魔道士たちの驚愕の表情とざわめきだった。

すれ違う魔道士たちは皆、リシエルのまとう白いローブを見て、顔色を変えた。

目を丸くする者、ぽかんと口を開けて佇む者、あからさまに眉をひそめる者、同伴者とひそひそと会話をする者……反応に違いはあれど、すべて好意的なものではないことは確かだ。

彼らが自分に向けてくる、今まで以上に冷たく、刺すような憎悪の眼差しに、リシエルは自然とうつむいた。白いローブをぎゅっと握りしめる。

導師の一番弟子であり、その後継者たる者の証。

これを自分がまとうことで、周囲にどんな反応があるかなんて、わかっていたはずだった。

「…リシエル。前を向きなさい」

前を歩くシグルトが振り返らないまま言った。

「誰がなんと言おうと、君は私のたった一人の可愛い弟子です。何も恥じることなんてない」

「…はい」

リシエルは、ただもう目の前で翻る濃紺のローブだけを見て、ますます歩くことだけに集中した。

（…強くならなきゃ）

必死で自分に言い聞かせる。

ようやく、一步を踏み出せたのだから。

導師会議が行われる場所へと向かう途中、シグルトが中庭に面した部屋の一つの前で足を止めた。

「ああ、そうだ。ちょっと用事を思い出しました。ここで待っていて下さい。すぐ戻りますから」

シグルトはそう言い残し、部屋の中へ消えていく。

一人扉の前に残されたリシエルは、師を待つ間、目の前にある広い中庭をぼんやり眺めた。

相変わらず、魔法によって、四季に関係なく様々な花が咲き乱れている。

中ほどにあるそれなりに深さのありそうな池の水面が、日の光を受けてきらきらと光っていた。

「……まったく、シグルト様も何考えてるんだか」

突然聞こえてきた声に、びっくりと身を竦ませた。

後ろの方、廊下の隅で、魔道士二人が話していた。内緒話でもするように身を寄せ合って話しているが、その声ははっきりしたもの、明らかにリシエルに聞こえるように意識しているのが分かった。

「まさかほんとに魔法の使えない奴を正式に弟子にするなんてな」

「まあ、シグルト様たぶらかすなんて、ある意味魔女だけど」

「我が国が誇る大魔道士も、女に溺れて職権乱用するようじゃ案外たいしたことなかったな。俺憧れてたのにな。がっかりだ」

「法院を率いるべき立場の人間があれじゃ、規律が乱れるし辞めてもらったほうがいいかもな」

可笑しそうに、嘲るように話される言葉が耳に入って、心を傷つけていく。

自分が悪く言われるのはいい。でも、師が悪く言われるのは耐えられなかった。

（だけど——）

果たして自分に彼らを非難する権利があるだろうか。

彼らの言っていることはある意味事実だ。

別にたぶらかして弟子になったわけではないにしろ、シグルトが自分のような人間を弟子にしてくれたのは、リシエルに対して特別な感情があるからだ。

そのおかげで、実力もないのに導師の弟子という、魔道士なら誰もが憧れる地位を手に入れた。

やり場のない怒りと悔しさは、自己嫌悪へと向かう。

強くなる。そう誓ったばかりなのに、心が折れそうになる。

その時——

「おいお前ら、文句があるならシグルト様に直接言えよ」

突然の声に、リシエルははっと顔を上げた。

「パ、パリス様……」

シグルトの陰口を言っていた二人組は、現れた自分たちより年下の少年魔道士に動揺を見せた。

青い髪の少年がまとうのは、リシエルと同じ白のローブ。

「そ、それは……」

「なんだ、言えないのか？ 僕なんか真っ向から進言したぞ。こんな奴弟子にすべきじゃないって。殺されかけたけど……」

パリスはローブの襟元を緩めて見せた。

現れた白い首筋には、はっきりと細く残る、締め上げられた跡。
二人の魔道士の顔が青ざめる。

「なんなら僕が今のお前たちの言葉、伝えておいてやるけど？」

「い、いえ、結構です！ 失礼いたしました！」

二人組は逃げるようにその場を去って行った。

「…ったく、下級は余計なことと言ってないで黙って修行だけやってろっつーの」

不快げに舌打ちしながら呟くパリスを、リシエルは首を傾げて見た。

（今の…もしかして、庇ってくれた……？）

「あの…ありがとう……」

真意はわからないが、とりあえず礼を言う。
だが、パリスはじろりとリシエルを睨んでくる。

「お前、シグルト様が悪く言われてるんだぞ？ 何か言い返せよ！」

「う、うん…ごめんなさい…」

（なんで謝ってるんだろう、私……）

先日の一件を考えれば、パリスの方こそリシエルに謝るべきだと思うのだが。

そんな内心の想いが顔に出ていたのだろうか。

不意にパリスが目をそらし、下を向くともごもごと何事が呟いた。

「あの、さ…この間の…ことだけど……った」

「え？」

声が小さすぎてよく聞き取れない。

「……かった」

「え、何？」

「…るかった」

「ごめん、よく聞こえな…」

「だから！ この間のことは悪かったって言ってるんだよ！ 何度も言わせるな！」

突然パリスが大声で怒鳴った。

（な、なぜ逆ギレ……？）

目を白黒させているリシエルに、パリスはばつが悪そうな顔で続ける。

「……お前が魔法が使えないのは、シグルト様のお考えで、修行させてないからだって、ブラン様から聞いた。弟子なのに修行させないなんて、ますますおかしな噂が立つから周りには言うなって言わ

れたけど。僕、お前のことずっと、努力も才能も足りない奴だって、思ってた、それで……知らなくて色々言って悪かった」

（謝ってくれてる……？ パリスが……？）

意外すぎて、急に可笑さがこみ上げ、思わず嘖き出した。

「…おい、人が真面目に謝ってるのに、なんで笑うんだよ？」

目を吊り上げて問うパリスに、慌てて首を振る。

「あ、ごめんなさい。ただ、あなたが謝ってくれるなんて思わなかったから…」

「人をなんだと思ってるんだよ？」

「えっと、今は悪い人じゃないのかなって思ってる」

パリスが心底呆れた様子で言った。

「お前……あんな目にあったのに謝られたくらいでそう思えるって、どれだけお人好しなんだよ」

「うーん、ブラン様程ではないかも……」

リシエルの言葉に、パリスは少し笑った。

いつもの人を嘲るような笑みではなく、ただ可笑しいから笑った。そんな笑顔。

（なんだ、こういう笑い方もできるんじゃない…）

考えてみれば、あのブランが弟子に選んだ人間なのだ。
多少我儘で傲慢なところがあるにしろ、きっと根は悪くないのだ
ろう。

「まあ、お人好しで言ったら、あの人の右に出る奴はいないからな」
師について語るパリスの声には、以前のような師を厭うような響
きは全くなかった。
その様子に、今までずっとパリスに対して抱いていた苦手意識が、
消えていく。

（あのこと、聞いてみようかな……）

シグルトに対してはぶつけられない問い。今のパリスなら答えて
くれるような気がした。

「あのね、実は聞きたいことが——」

リシエルが言いかけたその時——

ぼちゃん

何かが水に落ちる音に、二人は中庭の方を振り返った。

見たところ10歳くらいの男の子が、池を囲む石の上に立ち、水
の中を覗き込んでいた。

何に掴まるでもなく、池に身を乗り出している。

少しでも足を滑らせたら、落ちてしまうだろう。

あの池は見た目よりもずっと深いはずだ。

「危ない！」

とっさにリシエルは駆け出していた。

「あ！ おい待て！ あれは……！」

パリスが何か言っているのが聞こえたが、無視して中庭へと飛び出した。

23 白のロープ（後書き）

新章突入です。

ついでに今まで投稿した分の誤字脱字、表現などを修正しました。
見直してみると結構あるわあるわ：

気をつけてるつもりなんですけどね^^；

おかしいところがありましたらご指摘いただけると幸いです。

24 ルゼル

「危ない！」

リシエルは全速力で駆け、少年の腕を掴むと、力任せに池から引き離す。

少年は驚いたように、目を丸くしてリシエルを見上げた。

10歳くらいの男の子だが、その瞳と髪は淡い黄緑色で、彼が幼いながら魔力の使い手であることを示していた。ローブを着ておらず、シャツと短いズボンという格好だが、年齢からして魔術学院の学生なのかもしれない。

「坊や。危ないじゃない。落ちちゃうわよ？」

「……誰だ、お前？」

可愛らしい外見に反した、子供とは思えぬ尊大な口調に、リシエルは思わずむっとした。

「こら、年上に向かってお前なんて言っちゃダメじゃない」

注意すると、少年は不機嫌そうに眉を寄せた。

「…無礼な奴だな。ボクを知らないなんて」

「馬鹿っ！ 頭下げろ！」

突然、後頭部に衝撃を感じると同時に、視界が地面に変わる。

横でパリスが頭を下げている。彼の手がリシエルの頭を押さえつけているのだ。

「申し訳ございません！ ルゼル導師！」

（え、導師……？）

パリスの言葉に目の前の少年をまじまじと見やる。

（こんな子供が……？）

導師の中には、私より年上で、私よりずっと若い外見の人もいますよ——

夜会でのシグルトの言葉を思い出す。

まさか、この子供がシグルトよりも年上だということのか。

「…ブランの弟子か。誰だよ、この無礼な娘は？」

「シ、シグルト導師の弟子です」

パリスがリシエルを小突いた。

「ほら、挨拶しろ！」

リシエルは慌ててもう一度頭を下げる。

「シグルト・アルフェレスの弟子の、リ、リシエルと申します。すみません、導師様だなんて知らなくて、その…失礼致しました！」

「ふーん、お前が噂のシグルトの弟子か？ 魔法が使えないってい

う……」

ルゼルは腕を組んで、リシエルをつま先から頭までじろじろと見た。

汚いものでも見るかのような視線に、気分が悪くなってくる。

リシエルは目を合わせないように、ひたすらうつむいて縮こまった。

「……シグルトも随分趣味が変わったな」

「私がどうかしました？」

当の本人の声に、全員が振り返る。シグルトが立っていた。リシエルとパリス、ルゼルという思いもしない3人が一緒にいることに少し驚いているようだった。

現れたシグルトを見上げ、ルゼルが責めるように問う。

「シグルト。お前、弟子にどういう教育してる？」

「リシエルが何か？」

「このボクの顔を知らないなんて、無礼もいいとこだ」

「ごめんなさい……」

知らなかったとはいえ、パリスだって止めようとしてくれていたのに、一人で突っ走ってしまった。自分のせいで師が責められることに、申し訳なさでいっぱいになる。

シグルトはリシエル、それからルゼルを見て、最後に池の方をちらりと見やった。

再びルゼルに視線を戻すと、大げさに申し訳なさそうな顔を作る。

「それはそれは……弟子が失礼しました。ですが、これまでこの子には私の仕事の手伝いばかりさせていたので、貴方とはお会いする機会がなかったんですよ。どうかお許しください。本当なら今日の会議でご紹介するつもりだったんですが……まさかルゼル導師がこんなところにいらっしゃるとは。一体何をされていたんです？　また“実験”ですか？」

「……お前には関係ない」

ルゼルはシグルトから視線を逸らす。

シグルトは薄く笑った。

「研究熱心なのは結構ですが、ここは天の塔です。実験をされるならご自分の塔でされた方がよろしいかと思えますよ」

「……ボクに指図する気か？」

ルゼルはシグルトを睨みつけた。子供の外見からは考えられないほどの陰のこもった眼差し。

「指図だなんてとんでもない。ただ神聖な天の塔を遊び場にされるのは、他の導師たちもいい顔をしないでしょうし、お止めになった方がいいと申し上げただけですよ」

シグルトは言葉遣いこそ丁寧だが、どこか我儘な子供を言いくるめるような口調で、微笑みながら言った。

ルゼルがますます険しい顔になって口を開こうとした、その時、

「ル、ルゼル様。こんなところにいらしたんですか……」

今にも消えそうな弱々しい声がした。

ルゼルの後ろに、30過ぎくらいの、痩せぎすの男が立っていた。頬が痩せこけ、ひどく貧相な印象の男。ヴァーリス人としては一般的な、茶髪に茶色の瞳という特徴のない容姿だが、その身にまとう白のローブが彼の地位を表していた。腕には、丈の短い濃紺のローブがかかっている。

「ほら、お弟子さんが迎えに来ましたよ」

ルゼルは舌打ちすると、男の腕からローブをひったくるように取り、羽織った。

「シグルト、今度の弟子にはしっかり礼儀を叩きこんでおけよ。…行くぞ、ルーバス」

吐き捨てるように言い残し、濃紺のローブを翻し去っていく。

ルーバスと呼ばれた男は、おどおどした様子でシグルトたちに軽く頭を下げると、慌ててルゼルの後を追った。

2人の姿が見えなくなると、シグルトはすっとリシエルの横へ移動して、池を背にして弟子に向き直る。

「リシエル、嫌な想いをさせてしまったんですからね」

「いえ…私が失礼なことをしてしまったんですから……」

「ぼ、僕が引き止めるのが遅かったせいです！ 申し訳ありません！」

突然上がった声に、シグルトはさも今気づいたというようにパリスを見た。

「おや、パリス君。いたんですか。私の弟子にまた何か用ですか？」

シグルトの言葉に、パリスは彼の怒りがまだ解けていないことを知って、青ざめた。リシエルが慌てて言った。

「私に謝りに来てくれたんです」

「ほお、それで、君は許したんですか？」

どこか非難めいた口調で問われ、リシエルはおそるおそる答えた。

「もう済んだことですから…」

「君はお人好しというか、甘いというか……」

シグルトは呆れたように溜息をつき、それから小声で付け足した。

「…まあ、君のそういうところにも、私は惹かれるんですけどね」

リシエルの頬が赤くなったのを見て、微笑む。

「シ、シグルト様。先日は、その…僕は本当に申し訳ないと…」

震える声で謝罪を述べようとするパリスに、シグルトは一瞬浮かんだ笑みを消して、面倒くさそうに言った。

「ああ、もういいですよ。リシエルがいいなら、私も君のことなん

てどうでもいいんでね」

ひどく傷ついた表情で固まってしまったパリスなど、本当に意に介していないかのように、

「さ、そろそろ時間です。行きましようか」

リシエルの背を押して先に歩かせ、自分も続く。

だが、パリスの横を通る過ぎる時、そっと小声で耳打ちした。

「……パリス君。悪いけど、彼の遊び散らかした“玩具”、片づけておいて貰えますか？ 間違ってもリシエルの目には入れたくない」

「え……？」

「じゃあ、またあとで」

シグルトはそれだけ言って、さっさとリシエルを促し、歩いて行ってしまった。

（“玩具”……？）

パリスは先程ルゼルが立っていた場所へと視線を向けた。

池の水面が、赤黒く濁っている。

しばらくすると、池の中から黒い物体がゆっくりと浮かび上がってきた。

それを見て、パリスは湧き上がる吐き気に口を手で押さえた――

「あんな小さな子が、導師様だなんてびっくりしました」

シグルトと並んで歩きながら話す。

「あれでも私よりかなり年上なんですよ。私みたいに、魔力の影響で老化が遅くなる人はたまにいますけど、彼は特殊で、もうほとんど不老になったと言っているくらいですね」

「そうなんですか…いろんな人がいるんですね…」

魔力によって髪や瞳の色が変化する者。不老になる者。

魔力の影響は様々だ。この薄紅色の瞳の理由を知りたいがために魔道士になりたいと思ったが、実際魔力を扱うようになったら、自分にはどんな変化が現れるのだろうか。

魔力による影響は個人差があるらしいが、いつかシグルトが心配していたように、この黒髪の色が変わってしまったりするのだろうか。

（……そもそも、私に魔力なんてあるのかな？）

師や他の魔道士が魔法を使っているのは幾度も目にしたが、そういった力の存在を、自分の中に感じたことはなかった。

隣を歩くシグルトが、ふと真面目な顔になって言った。

「…リシェル、彼には、ルゼルにはなるべく近づかないで下さい」

「え？」

「いや、彼だけじゃない。私の正式な弟子になったことで、色々な人間——特に他の導師達が君に興味を持つでしょう。でも、ブラン以外の導師には極力関わらないようにして下さい」

「どうしてです？」

「……ろくな人間がいないんですよ」

リシエルは驚いて師の顔を見上げた。

「あ、今、お前が言うかって思いました？」

「お、思ってますんよ」

凶星だった。

シグルトは疑わしそうにリシエルを見てから、苦笑した。

「まあいいでしょう。私なんて至ってまともな方だって、これから君にもわかるでしょうから」

シグルトにろくな人間じゃない、そう評される、国家最高位の魔道士たち。

一体どんな人たちのだろう。

確かに先程のルゼルは外見は子供だというのに、好感の抱ける人間ではなかった。

まだ会ったことのない、他の3人の導師もどこか問題のある人物ばかり、ということか。

(…少し怖くなってきた…)

やがて二人は星や古代文字の意匠の施された、大きな扉の前へと着く。

この先は導師と、導師の成人した一番弟子のみが立ち入りを許されている。いつもならここで導師会議へ行くシグルトを見送るのだが、今日は師とともにこの中へ入っていくのだ。

リシエルの不安を感じ取ったのか、シグルトが優しく微笑む。

「そんなに不安に思わなくても大丈夫ですよ。君は自己紹介だけで、後はずっと黙っていればいい」

「は、はい」

「でも、君がどうしても不安なら――」

シグルトはいたずらっぽく笑った。

「つまらない会議なんかこのまますっぽかして、二人でどこかへ行きましょうか？　公園で愛を語り合うのなんてどうです？」

「…先生、さぼりたいだけでしょう？　駄目ですよ、絶対」

リシエルはわざと呆れた調子で言ったが、師が自分の緊張をほぐすためにふざけているのだということは分かっていた。内心、その気遣いに嬉しくなる。

「真面目な弟子を持つと苦労しますねえ。じゃ、行きましょうか」

シグルトは笑って、扉を手で押し開いた。

25 導師会議

扉の先は、小さながらんとした何もない部屋だった。

てっきり入ったらすぐに導師たちが居並んでいるものと思っていたリシエルは拍子抜けした。

シグルトは部屋の真ん中で立ち止る。

「さ、最上階まで一気にいきますよ」

リシエルは訝しがりながらも、師の傍まで歩み寄った。

と、突然、足元の床が明るく輝き出す。見れば、光の線によって先程までなかった魔法陣が描きだされていた。

同時に、身体が浮かびあがった。

正確には、床に足をつけている感覚はある。見えないガラスの上に立ち、それが上へと移動している感じだ。足元の魔法陣がどんどん遠くなっていく。

「な、なんですか！？ これ！？」

驚いたリシエルは思わずシグルトにしがみついた。

「魔力による移動装置ですよ。会議の間は最上階にあるんでね」

「先生、なんか気持ち悪い…」

今まで味わったことのない感覚だった。

「最初は皆そうなるんですよ。そのうち慣れるから大丈夫です」

よ」

シグルトはリシエルの背を優しく擦った。

足元をちらりと見やれば、魔法陣はもうほぼ見えないほど小さくなっている。高い所は苦手ではなかったが、その高さに頭がくらくらしてくる。

リシエルは目をつぶって、背を擦ってくれている師の手に意識を集中させることで、気持ち悪さにひたすら耐えた。

どれくらいそうしていただろうか。

時間にすればおそらくほんの短い時間だったのだろうが、リシエルには随分長いように感じられた。

やがて、気持ちの悪い感覚が止む。

同時に、

「あら、仲がいいこと」

笑いを含んだ女の声が耳に飛び込んできて、リシエルはおそろおそろ目を開けた。

そこは、広々とした部屋だった。

高い天井は深い濃紺で、輝く石が散りばめられている。おそらく、夜空を模しているのだろう。部屋の中には、大きな石の円卓が置かれてあり、そこには何人かの男女が腰かけていた。

一番手前に腰かけている女性が、頬杖をつき、こちらを見てくすくすと笑っていた。

赤紫色の髪と瞳を持つ、妖艶な雰囲気を持った美女。濃紺のローブをまといているところを見ると、彼女も導師の一人なのだろう。

「こんなところでいちゃつくな」

今度はつい先程聞いたばかりの声だ。

女性の反対側に腰かけた、黄緑の髪少年。ルゼルが不機嫌そうな顔でこちらを睨んでいる。その後ろには、先程の貧相な男が控えていた。

ルゼルの言葉に、自分が師にしがみついたままだということに気づき、リシエルは赤くなつて慌ててシグルトから離れた。恥ずかしさに足元に視線を落とすと、魔法陣の描かれた石の床があった。この床を突き抜けて来たのだろうか。

「おや、まだ全員揃っていないようですね」

シグルトは周囲の視線などまるで気にかけていないように、一番奥の席へと歩き出す。あれがシグルトの席のようだ。リシエルも続いた。

「ふおふおふお、いつもはお前さんが一番最後に来るのに珍しいのお」

シグルトの席の左隣に座っている老人が笑いながら言った。90歳は超えているだろうと思われる皺くちゃの顔に、白い豊かなひげを蓄えた、いかにも世間一般で想像されるであろう“魔法使い”といった風貌だ。髪もひげも真っ白だが、多分魔力の影響ではなく、普通に年齢のせいだろう。

不意に部屋が明るくなった。

先程リシエル達が立っていた場所が発光している。ほどなく光が消えると、ブランとパリスが立っていた。

「お、シグルトが時間より早く来てるなんて珍しいな」

ブランはシグルトの右隣の席に向かって歩きながら言った。それにくくパリスの顔色がひどく悪い。きつとさっきの移動装置で気分

が悪くなったのだろうとリシエルは思った。

「弟子に給料泥棒なんて言われないように、今日から少し真面目に働こうかと思ひましてね」

シグルトは笑いながら腰かける。導師の座る椅子は、ビロード張りで肘掛のある豪華なものだ。その少し後ろに、肘掛のないやや小ぶりな椅子が置かれていた。

「君はそこに座って下さい」

どうやらこれが弟子の席らしい。腰かけると、斜め後ろから師の横顔を見る位置だった。

シグルトは周りをぐるりと見まわし、自分の真正面に位置する空席で目を止めた。

「さて、後来ていないのはヴァイス導師だけですか」

その言葉が終らぬうちに、再び部屋が明るく輝く。

光源を見ると、そこには濃紺のローブをまとった若い男が立っていた。

「ああ、僕待ちでしたか。お待たせしてすみません」

はっとするほどの美青年だった。思わず見とれる程の整った顔立ちに穏やかな笑みを浮かべ、シグルトの真正面の席へと向かう。歩くとたび揺れる長い金髪が濃紺のローブによく映える。

リシエルは彼から目が離せなくなった。単純にその美貌に見とれていたわけではない。

（この人、何か、普通の人と違う——）

うまく言い表せない、違和感のようなものを感じた。

リシエルの視線に気づいたのか、彼の目がこちらを見た。

緋色の瞳。

ぞくりと背筋に悪寒が走った。

理由は分からない。

同じ赤い瞳でも、ブランの瞳が炎を連想させるのに対し、彼の暗めの瞳は、血を想わせる。

美貌の青年は、リシエルと目が合うと、形のよい赤い唇を微かに吊り上げた。

得体の知れない不安が湧き上がり、リシエルは目を逸らし、うつむいた。

だから、師がちらりと横目で送ってきた視線には気付かなかった。青年が席につくと、シグルトが声を張って言った。

「これで全員揃いましたね。それでは、これより定例会議を始めます」

どうやらシグルトがこの会議の進行役を務めているらしい。正直、意外だった。仕事に対してやる気のかけらもない師匠がそんな重要な役を任されていることが、“導師にはろくな人間がいない”という師の言葉を裏付けているように思えた。

「では、議題に入る前に、本日よりこの会議に出席を許された二人の紹介をしましょうか……では、ブラン導師の弟子からどうぞ」

シグルトに促され、パリスが立ち上がる。

「パリス・ユーメントです。まだまだ未熟者ではありますが、この

会議に出席を許された者としての誇りを胸に、与えられた責務を精一杯果たしていく所存です。宜しくお願い致します」

まだ顔色は冴えないが、堂々とした挨拶だった。大貴族の子息だけあって、こうした自己紹介の場には慣れているようだった。

「次は私の弟子です。リシエル、ご挨拶を」

師に振られ、リシエルは慌てて立ち上がった。

居並ぶ全員の視線が自分へと集中する。かあつと顔が熱くなる。

「リ、リシエルです！ よ、よよろしくお願いします！」

事前にあれこれと挨拶を考えていたにも関わらず、いざ本番となると緊張で全部飛んでしまい、それしか言えなかった。

師の肩が笑いをこらえるようにわずかに震えているのを見て、自分が情けなくなる。

「そんなに緊張しなくて大丈夫ですよ。初々しくて可愛いなあ」

正面の席では、ヴァイスが微笑みかけてくる。

「ブランの神童くんと、シグルトの小鳥ちゃん。可愛い二人が入ってこの会議も華やかになるわね」

赤紫の髪的女導師がくすくす笑いながら言った。

（こ、小鳥ちゃん…？ 私のこと…？）

そんな呼び方をされるのは初めてだった。

「ふおふおふお、お前さんがいたから元から華やかじゃったよ、ロゼンダ」

白ひげの老人が言うと、女導師が微笑む。

「あら、お世辞でも嬉しいですわ。ガーム導師」

「そういえば、ディナはまだ任務から戻ってこれそうにないんですか？ ガーム導師」

ブランが思いついたように口を開いた。

「ああ、手こずっておるようじゃな」

「残念だなあ。この子たちと年が近いし、色々教えてやって欲しかったんですが」

どうやら、ディナというのがガームの弟子らしい。

「なあに、次回の会議までには戻ってくるじゃろうて。わしの孫娘じゃ。そうそう長引かせはすまいよ」

ガームは長い白ひげを指で梳きながら笑った。

「おしゃべりはいいからさっさと始めよーよ」

ルゼルが苛立たしげに促す。シグルトはうなづき、

「では、本日の議題に入りましょうか。まず、先日の会議から持ち

越しになっていた、ラディキア地方支部からの研究費増額要請について……」

そこから先は、リシエルにはよくわからない話が続いた。

地方支部の予算増額、王都の結界強化、法院内の昇級制度の見直し、禁術認定の基準改定……

いずれの議題でも、シグルトは淡々と議事を進行させていく。

リシエルは会議の間、居並ぶ導師とその弟子たちを観察していた。赤髪の大男ブラン、幼い少年の姿をしたルゼル、金髪的美青年ヴァイス、妖艶な美女ロゼンダ、最も高齢と思われるガーム、そしてシグルト。

これが天をも動かすと評される、国家最高位の魔道士達、六導師。それぞれの個性の強さに、顔と名前を覚える苦労はなさそうだ。

ブランの後ろにはパリスが、ルゼルの後ろには自分控えている。ガームの後ろには弟子のための席があるが、空席だ。さっき話に出ていたディナという弟子の席なのだろう。

席の後ろに弟子の席が設けられていない、ヴァイスとロゼンダには弟子がいない、ということだろうか。

弟子たちは基本的に発言をしない。シグルトが議事を読み上げ、他の導師達に意見を求めて、それに導師達が応える。一番よく発言しているのはブランで、それにルゼルが反論し、ヴァイスかロゼンダがどちらかの意見を支持して決着する、という形が多かった。ガームは目を閉じてまったく動かず、起きてるのか眠っているのかもわからない。

そうやって会議を観察しているうちに、ヴァイスとまたもや目があった。微笑みを向けられる。先程感じた悪寒はもうなかったが、なんとなく居心地が悪い。メモを取るふりをして、視線を逸らす。

「次、最後になりますが、先日新たに創設されたクライル王子を団

長とする、ラティール騎士団について、国王陛下より今後の任務遂行にあたって、魔道士派遣の協力要請が来ています」

リシエルははっと顔を上げた。エリックの所属する騎士団のことだ。

「魔道士派遣？ てことは何？ 反乱分子の鎮圧だの、魔物退治だの、その手の任務をするわけ？ てっきりただのお飾りの騎士団だと思ってたけど」

「ええ、他の騎士団と同じく、そういった危険度の高い任務も遂行していくそうです」

ルゼルの疑問にシグルトが答える。

「あのボンクラ王子が総大将でしょ？ 国王も何考えてるんだか……」

「あえて危険な任務に王子様を向かわせようとしてたりしてね……」

ロゼンダの呟くような一言に、ヴァイスがやんわりとたしなめた。

「ロゼンダ導師、滅多なことは仰らないほうがいいですよ」

「ふふ、そうね」

ロゼンダは可笑しそうに笑った。

「陛下のお考えはともかく、法院としては他の騎士団からの要請同様、基本的には協力するってことで問題ないと思うが」

ブランの発言に、ルゼルが鼻先で笑った。

「お前はあの能無し王子の味方だもんなあ」

「：ルゼル導師。あなたがクライル王子をどう思っているように構いませんが、仮にも王族に対してその口のきき方はどうかと思いますよ」

「別にいいよ。告げ口したって。王族だろうが何だろうが、ボクに怖いものなんてないからさ」

ルゼルとブランがしばし睨み合う。どうも二人は仲が良くないらしい。

そこへシグルトが静かな口調で割って入った。

「個人的な感情はともかく、ブラン導師の言う通り、法院としては基本的には要請を受けるものとし、任務の内容をその都度検討し、派遣する魔道士の決定を行うという方針で問題ないものと私も思います。特に協力を拒む理由もありませんね。異議のある方はいらっしゃいますか？」

口を開くものはなかった。ルゼルはとりあえず一言言いたかっただけで、具体的な反論があるわけではなかったようだ。

「それでは、本日の議案は以上ですので、これで閉会とします」

シグルトの言葉に、皆席を立った。移動の魔法陣が描かれた場所へ立つと、その姿は光に吞まれ、消えていく。

ヴァイスの姿が消える一瞬、またあの緋色の瞳が自分に向けられ

ていたように見えた。

……妙に意識されているように感じたのは、自分の思い過ごしだろうか。

「さて、私達はこれから国王と謁見ですね」

他の導師と弟子たちが部屋から姿を消すと、シグルトがブランに向かって言った。

「ああ、気が重いよ……」

「君は苦手ですからねえ、あの人」

「まあな。ああいうタイプはどうもな……」

「君みたいな真っすぐ人間とは真逆の人ですからねえ」

師匠たちの会話を気にしながらも、リシエルはパリスに歩み寄った。

「どうしたの？　ずっと顔色が悪いけど……もしかして先生に言われたこと気にしてる？」

「……いや、ちょっと朝から気持ち悪いもの見ちゃって……」

パリスは思い出したのか、眉をしかめた。

「お、お前ら仲直りしてくれたのか？」

二人が話しているのを聞いて、ブランが嬉しそうに言った。

「は、はい」

「そうかそうか。パリス、許してもらえてよかったな」

ブランが笑ってパリスの背をどんと叩いた。その衝撃にパリスがうっと口元を手で覆った。

「どうでした？ 初めての導師会議は？」

騒ぐブランとパリスを余所に、シグルトがリシエルに微笑みかける。

「導師の皆さんのこととかは、まだよくわかりませんが……とりあえず緊張しました」

「これから慣れますよ」

「ひとつ疑問だったんですけど……」

「何です？」

「皆さん、私のこと先生の弟子だって、認めて下さったんでしょうか……？」

自分を正式に弟子にすることについて、他の導師に絶対何か言われると思っていた。法院内ですれ違った魔道士たちの冷たい視線を思い出す。リシエルが魔法が使えないということはルゼルも知っていたし、そんな人間が導師会議に出ることに当然反発があると予想していただけに、誰もそのことに触れてこなかったのは拍子抜けだ

った。

「特に異議もなかったし、承認されたってことですよ」

「でも……」

「基本的に導師は、他の導師の行動や決定に口出ししてはいけないんです。それがその導師に裁量権のある事柄である限りはね。誰を自分の弟子にするかというのは、その導師の一存で決められるんです。よほど問題がない限り、何か言われることはありませんよ」

魔法が使えないことは、よほどの問題ではないのだろうか。

リシエルの考えを察したように、シグルトが言った。

「君は現時点で魔法が使えないというだけですから。……君がこの先修行しても魔力が開花しなかったとしたら、また別でしょうけど」

「……私、魔法使えるようになるでしょうか？」

リシエルはさすがのように師を見上げた。

「さあ？」

「さあって……」

「こればかりは生まれつきの才能ですからね。まあ、魔道士になれなくても、君には別の選択肢もあるわけだし、気負わずにのんびり君のペースで頑張ればいい」

「別の選択肢って……？」

意味がわからず問い返す。

「私は気が長いですから安心して下さい」

紫の瞳が覗き込んでくる。その答えで、師が言わんとすることを悟り、リシエルは赤くなった。

ごまかすように違う質問をする。

「あの……先生、降りる時もやっぱり、あの移動装置を使うんでしょうか？」

どんなに時間がかかろうと、できれば階段を使いたい。

「ええ、残念ながら。この部屋への出入り手段はあれだけなんでね」

シグルトは困ったように笑った。

「辛かったらさっきみたいに私に抱きついていいですからね」

「大丈夫です！ ……多分」

リシエルは力いっぱい首を振ったが、正直自信はない。

国王との謁見という緊張の場面の前に待ちかまえる試練に、げんなりとした。

25 導師会議（後書き）

一気に登場人物が増えました……

覚えていただけるか不安に思いながら書いていたら、木曜更新になってしまいましたので、次話は来週木曜アップにしたいと思います。間に合わなかったら日曜になるかもしれません^^；

宜しくお願いします。

26 ロドムの死

王城へと向かう馬車の中で、パリスはぼんやりと窓の外を見ていた。

見慣れた王都の賑やかな街並み。大国の都に相応しい華やかさがあつた。

そうして外の景色に集中することで、池に捨てられていたルゼルおもちゃの“玩具”を頭の中から消そうとする。

（…やっぱり、あの人は苦手だ…）

ルゼルに対しては、もともとい印象がなかった。6年前に目撃したあの事件のせいだ。今は嫌悪感すら覚える。

「パリス」

呼びかけに、パリスは窓から目の前に座る師へと顔を向けた。

「これはさつき会議が始まる前、シグルトにも伝えたんだが…」

会議前、用があるからとブランがどこかへ姿を消したのは、シグルトと会っていたからだだったのだ。会議前にわざわざ会うということは、急ぎの話だったのか。師の真剣な面持ちに嫌な予感がする。

「……ロドムが死んだ」

「……………！」

パリスは息をのんだ。あの事件で、ブランはロドムに、今回の件を不問に処す代わりに、どこかに捕えられているはずの“商品”の解放と、人身売買の顧客名簿を渡すことを要求していた。

ロドムは“商品”を解放することにはすぐに応じたが、顧客名簿を渡すことにはなかなか首を縦に振らなかった。後々恨まれて、自分の命が狙われることを危ぶんでいるようだった。

「散々悩んだ挙句、ロドムはリシエルを買うといった人間の名前を教えるから、他の顧客の名を明かすのは見逃してほしいと言ってきてな。その人物の名を口にした途端、突然血を吐いて死んだ」

「どういことです……？」

問う声は少し擦れていた。自分が利用しようとした人間が突然死んだと聞かされて、動揺していた。

「おそらくは、その人物に自分の名前を言おうとすると発動する、死の呪いを掛けられていたんだろう」

「ということは、魔道士……？」

「ああ」

「一体誰が……？」

ブランは渋い顔をする。

「導師の弟子を、それもシグルトの弟子を攫おうとするなんて、おそれたことを考えるのはそれなりに腕に覚えのある魔道士だろう

な……ロドムがリシエルを売ろうとしていた人間に心当たりはないか？」

「わかりません……」

「……どこかの貴族に雇われたお抱え魔道士か、法院の上級魔道士か、あるいはもっと上の……」

ブランは口をつぐんだ。おそらく、パリスと同じことを考えたのだろう。先程会議に出席していた面々の顔が浮かぶ。

「いずれにせよ、リシエルが狙われてる可能性があるわけか……あの子がちよっと珍しい容姿だからか、それともシグルトの弟子だからか……」

狙っている人物が魔道士であるならば、後者に原因があるように思える。

「パリス、リシエルに危険が及ばないように、気をつけてやってくれないか？」

パリスは驚いて師を見た。

「な、なんで僕が？」

「お前にとってリシエルは命の恩人だ。いや、俺にとってもか。あの時、リシエルがシグルトが止めなかったら、俺もお前も命はなかった」

「そんな……僕はともかく、ブラン様はご友人ではないですか」

「……友達だからって手加減するような奴じゃないんだよ、あいつは」

ブランは苦笑いして言った。パリスには師の考えがわからない。

「……どうしてそう思っていらっしゃる方と友人でいられるのか、僕にはわかりません」

「ああ、俺にだってわからないよ。なんだってあんな奴の友達やってるんだろうな、俺」

ブランは肩をすくめる。自分で自分に呆れているのかもしれない。

「ただ……あいつはリシエルを何より大事に想ってる。もしリシエルを失うようなことになれば……今度こそあいつ、壊れちまうだろうな……」

確かに、シグルトがリシエルに向ける、執着といってもよい程の強い想いはパリスも感じていた。

「シグルト様はどうして彼女にそこまでこだわるんです？」

「さあ、俺に聞かれてもな」

パリスは一瞬逡巡したが、思い切って疑問を口に出した。

「……もしかして、アーシェと関わりがあるから、ですか？」

「……どうということだ？」

師の怪訝そうな反応で、彼が何も知らないということがわかった。パリスはロドムが言っていたことを話した。

「……リシエルが、カロンのアーシェと一緒にいた……？」

「確証はありませんが、灰色の髪的女魔道士なんて珍しいですし、場所がカロンとなれば、おそらく間違いないと思います」

「……」

ブランは考え込むように腕を組んだ。

「ブラン様はあいつ……リシエルがどういう経緯でシグルト様に引き取られたのか、ご存じなのではないですか？」

「俺もシグルトからは、例の任務のために向かったカロンの雪山で、記憶を失って倒れていたリシエルを偶然見つけて拾った、としか聞いてないんだ」

「記憶を失って……？」

「ああ、知らなかったか？ リシエルはな、10歳より前の記憶がないんだよ。自分の本当の名前も、家族も、何もわからないんだ。」

あなたに何も持っていない人間の気持ちなんてわからない——リシエルの言葉を思い出す。

おとなしいとばかり思っていた少女が、自分を睨みつけてきた時は正直驚いた。そして、アーシェのことを聞いてきた時の必死さにも。

その理由を今知った。彼女は本当に何も持っていない——失ってしまったのだ。

私には…私には先生しかないの——

あの時の言葉の重さに今更ながらに気づく。

その彼女から、自分は唯一の拠り所を奪おうとしたのだ。

「シグルトには俺からロドムの話は伝えておこう。それまでアーシエのこと、聞かれてもリシエルには言うなよ。事情がどうあれ、前の弟子がその……ああいうことになったっていうのは、シグルトだって知られたくないだろうし」

「…わかりました」

ロドムの死。リシエルの過去。彼女を狙う謎の魔道士の影。そして……アーシエとリシエルの繋がり。

わからないことが多すぎた。

自分が嫉妬心から起こした行動のせいで、この先厄介なことに巻き込まれる。

そんな予感がした。

やがてパリスたちの乗った馬車は、王城の門をくぐった。

先の止まっていた馬車からはちょうど、シグルトとリシエルが降りてくるところだった。パリスは思わずリシエルの顔をじっと見つめた。それに気づいたリシエルが、不思議そうに問う。

「私の顔に何か付いている？」

「……お前も大変なんだな」

「へ？」

「面倒事はごめんだけど……お前には借りがあるしな。仕方ないか」

「何の話？」

「こっちの話」

首をかしげるリシエルに、パリスはただため息をついた。

26 ロドムの死（後書き）

今回短いです^^；

ほんとはもうちよっと先まで書く予定だったのですが、きりのいいところまで終わらなくて・・・次回に持ち越しです。

27 国王

出迎えに來た近衛兵に案内されるシグルトとブランの後について、リシエルはパリスと並んで歩いていった。

初めて足を踏み入れた王城は、その豪華さと比例するように、どこか威圧的な雰囲気が漂っていた。法院と違って、すれ違う人々に冷たい目で見られることはないが、なんとなく身がすくむ。

（国王様ってどんな方なんだろう？）

ブランは苦手だと言っていた気がするが、怖い人なのだろうか。粗相があったら、すぐさま牢屋に入れられたりしてしまうのか。

あれこれ想像してますます緊張が増す。

横を歩くパリスは法院で見た時より顔色もよくなり、堂々と前を向いて歩いている。

「緊張しないの？」

小声でそっと尋ねると、パリスは尊大に自分よりやや背の低いリシエルを見下ろした。

「まさか。僕はユーメント公爵家の嫡子だぞ？ 陛下には子供の頃から何度もお会いしてる」

（そ、そうだ。パリスって大貴族のお坊ちゃんなんだった）

どうやらこの緊張を分かち合うことは期待できないようだ。

二人の会話が聞こえたのか、目の前を歩くシグルトが顔だけ振り返って言った。

「リシエル。国王の御前に出たら、パリス君の行動をよく見て、その通りに君も真似して下さい。いいですね？」

「は、はい」

案内の兵士はやがて、一つの部屋の前で足を止めた。

「こちらになります」

ゆっくりと両開きの扉を押し開く。

正面の一段高くなった場所に、肘掛の豪華な椅子が見えた。その椅子に向かって、リシエルたちの立つ扉から真つすぐに赤い絨毯が伸びている。その両側に、身なりの良い、20人ばかりの男たちがひしめき合っていた。

国の重臣たちなのだろう。全員がリシエル達に視線を注いでいる。兵士に導かれ、椅子の前へと進み出る。

「シグルト導師とブラン導師、お見えになりました」

兵士が声を張り上げると、椅子の横に引かれたカーテンがさつと引かれ、一人の壮年の男が姿を現した。

部屋にいる全員が一斉に頭を下げる。慌ててリシエルもそれに倣う。

男はどっかと椅子に腰を下ろした。

「楽にせよ」

周囲の動く気配で、リシエルも頭を上げる。

（この人が、国王ジュリアス様…）

リシエルの想像していた、王冠をかぶり、太った体に宝石をじゃらじゃらと身に付けた、物語に出てくるような王様とは全く違っていた。

日に焼けた浅黒い肌に、引きしまった身体が武人であることを感じさせる。淡い金髪には王冠こそなかったが、緑の瞳に宿る鋭い眼光が、絶対権力者の威厳を示していた。

この王城に漂うどこか威圧的な空気の源は、この人なのだと納得できた。

「シグルト、ブラン。この2人がお前たちの弟子か」

ジュリアスは白いローブをまとう2人を交互に見てから、まずパリスへと目を向けた。

「ユーメントの末の息子か。しばらく見ないうちにまた大きくなったな。お前の自慢話は、父から聞かされておるぞ。いずれは我が国を代表する魔道士になるだろう、とな」

「滅相もございません。ですが、いつかそのようになれるよう努力したいと存じます」

パリスは動じることもなく、模範的な回答を即座に返す。
緑の瞳が、今度はリシエルを見る。緊張で身が固まる。

「ふむ。そなたがシグルトの弟子、か……」

ジュリアスの目がすっと細められた。

「噂通り、美しい娘だな。羨ましいぞ、シグルト」

「恐れ入ります」

シグルトは軽く頭を下げた。

「2人とも、前へ」

ジュリアスの言葉に、リシエルとパリスは師匠2人より前に進み出る。

パリスがその場で膝をつき、胸に片手を当てて頭を垂れたので、リシエルも慌ててそれに倣った。

「そなたたちを準宮廷魔道士に任ずる。これがその証だ」

ジュリアスの傍に控えていた高官の一人が、そそくさと小さな箱を持って二人の前へ立った。

ビロード張りの箱の中には、星を象った勲章が二つ入っていた。パリスがそれを恭しく両手で取り、頭上に掲げもったので、リシエルも真似をする。

「師匠たち同様、この国の支えとなって欲しい」

会場に居並ぶ臣下たちから拍手が沸き起こった。

パリスとリシエルは立ち上がり、国王に向かって一礼する。

「リシエルよ、そなた王城に来るのは今日が初めてであろう？ ゆっくりしていくといい。本当はそなたとシグルトを招いて、妃と茶の席でも儲けたいところだが…なにぶん最近忙しくてな」

「い、いえ。ありがとうございます」

ジュリアスは満足げに頷き、

「では、私はこれで失礼する。また会おう」

立ち上がるとカーテンの奥へと姿を消した。

王が退席すると臣下たちもぞろぞろと退室していく。

「お疲れ様でした。これで終わりですよ」

シグルトの言葉に、リシエルはほっと肩を撫でおろした。

「意外と短かったでしょう？」

「はい。でもやっぱり緊張しました」

ほんの短い時間ではあったが、一気に疲れを感じた。

手の中にある、渡された勲章を見る。見た目よりもずっとしりとした重さを感じた。

「これで…私、本当の本当に先生の弟子になったんですね……」

「君はずっと私の弟子でしたよ。今も、昔もね」

シグルトは微笑んでリシエルの頭を撫でた。

部屋を出ると、一人の青年が待ちかまえていたように話しかけて

きた。

「やあ、叔父上との謁見は終わった？」

「王子。ここで何を？」

ブランが驚いたように青年に問う。

（王子？ この人がクライル王子？）

ということは、彼が前国王の息子で、現国王ジュリアスの甥ということだ。

ふわふわとした柔らかそうな茶髪と、どこか気の抜けた笑顔が、親しみやすいというか軽薄な印象を与える。緑の瞳こそ同じだが、ジュリアスとは対照的な雰囲気だった。

「君たちを待ってたんだよ。というか、シグルトの弟子に会いたくてね」

クライルはリシエルへ視線を移す。

「リシエルちゃんだっけ？ この間のリンベルトの夜会では話せなかったけど、ほんとに可愛い子だねえ」

にこにこ笑いかけてくる。

「僕はクライルっていうんだ。よろしく」

「よ、宜しく願います…」

「ねえ、この後時間があるなら僕とお茶していかない？」

「え？」

突然の誘いに、驚くりシエルの反応をどう思ったのか、クライルはぱたぱたと手を振って、

「やだなあ。誤解しないでよ。ちょうど今から姉上とお茶するから、よかったら君もどうだい？ 姉上も可愛い女の子が来たら喜ぶし。あ、師匠も一緒にいいからさ」

リシエルは戸惑ってシグルトを見上げた。
シグルトは苦笑いして頷く。

「…まあ、私も同席させていただけるのでしたら、構いませんが」
「よし、決まり。ね、こわい君の師匠に釘刺されてるからさ。僕のことは警戒しなくて大丈夫だよ」

「は、はあ……」

（これが、一国の王子様……）

事前に“女好き”だの“ボンクラ”だの、彼に関するあまりいいとはいえない噂を聞いてはいたが、そう評されても仕方ないと思われた。

（悪い人じゃなさそうだけど…）

「ブランたちはどうする？ お茶してく？」

クライルに問われて、ブランは首を振った。

「申し訳ありませんが、仕事がたんまり溜まってましてね。急いで法院に戻らないとなりませんので」

「そっかあ。残念。じゃあ、また今度ね」

クライルはさして残念そうでもなく、くるりと反対側を振り返って声を上げた。

「おい、エリック！ そんなところに隠れてないで、姉上のところ行くから道案内頼むよ」

クライルの口から飛び出てきた名前に、リシエルの心臓が跳ねた。呼びかけに、廊下の角から姿を現したのは、若い騎士。見るからに不機嫌そうだ。

「…別に隠れてませんよ。それより道、まだ覚えていないんですか？」

「だってこの城、僕の子供の頃とはえらい変わっちゃってるしさ。叔父上がしょっちゅう改装やら増築してるせいで、さっぱり覚えられないよ」

「……この間王女のところへ行った時から変わってませんよ」

「え、そうだったけ？」

エリックはため息をつくど、

「…こちらです」

赤いマントを翻して歩き出す。

「さ、あいつが道案内してくれるから行こう」

クライルは不意にリシエルの手をつかむと、エリックに続いて歩き出した。

「え、あの…？」

相手の身分を考えれば、振りほどくような無礼な真似もできず、リシエルは戸惑いながら引つ張られていく。

シグルトが眉を寄せたのを見て、ブランが慌てて小声で耳打ちした。

「お、おい。頼むから王子の腕を折るのは勘弁してくれよ」

「…じゃあ、足にしておきましょうか」

「…シグルトっ！」

「…わかってますよ」

シグルトは不機嫌そうな表情のまま、リシエルたちの後を追った。

「…王子、頼むからシグルトを怒らせるような真似しないで下さいよ」

ブランは祈るように呟いてから、大きく伸びをした。

「よし、あいつらが優雅にお茶してる間に、俺たちはとっと法
院に戻って、シグルトに押し付けられた仕事を片づけるぞ。お前には
責任取って、みっちり働いてもらうからな」

勢いよく歩き出してから、パリスが付いてこないことに気づいて、
足を止め、怪訝そうに振り返った。

「ん？　おい、パリス。どうした？」

パリスは、リシエルたちの去った方向を見て、立ちすくんでいた。

「あいつ……まさか……あの時の………？」

思わず零れた呟きは、師の耳には届かなかった。

28 姉弟

クライルに手を引かれ、エリックに導かれてやって来たのは、王城の庭園だった。

よく手入れのされた花壇に、配色までよく考えられて植えられた花が咲き乱れている。

庭の中ほどにお茶の用意がされたテーブルが置かれ、周りで侍女たちがせわしなく動きまわっていた。その中でただ一人、静かに腰かけている女性に向かって、クライルが手を振る。

「姉上」

女性が振り返った。そこで初めて、リシエルは女性の腰かけている椅子が、車椅子だということに気づいた。

第一王女は先王の毒殺事件に巻き込まれて、歩けない身体になって――以前聞いた話を思い出す。

「あら、シグルトと：そちらの方は？」

女性はリシエルを見て首をかしげた。

（綺麗な人：）

男ならすれ違えば誰もが振り返るであろう、澄んだ緑の瞳と艶やかな赤い唇が印象的な美人。ゆるく波打つ淡い金髪が、日の光を受けて眩しい程だった。

「シグルトの弟子だよ」

クライルの紹介を受けて、リシエルはぺこりと頭を下げた。

「はじめまして。リシエルと申します」

「可愛い方ね。私はミルレイユよ。よろしくね」

女性がにっこり微笑む。同性だというのに、その美しさにどぎまぎした。

彼女が先王と正妃の間に生まれた王女で、クライルの腹違いの姉。確かに緑の瞳とふわふわとした柔らかそうな髪質はクライルに似ている。……彼女の方がずっと知的な印象ではあったが。

「さ、遠慮しないで座って」

クライルに勧められて、リシエルとシグルトは席についた。

「エリックも座りなよ」

傍らに立つ騎士に向かってクライルが親しげに勧める。

「…俺はいいです」

「遠慮なくていいのに」

「身分をわきまえているだけです」

「お堅い奴だな～もう」

「真面目なのよ、彼は。あなたと違って」

ミルレイユがくすくす笑いながら言った。

「僕だって真面目ですよ」

「女の子ばかり追いかけて、勉強も武術の稽古もさぼっている人のことを真面目とは言わないのよ、クライル」

「姉上」

クライルがむくれる。

王位を巡っての宮廷での争いの渦中にいるはずの、腹違いの姉弟。てっきり仲が悪いのかと思っていたが、ささいなやり取りでその仲の良さが伺える程、二人の間には優しい空気が漂っていた。

それを、リシエルはひどく羨ましいと感じた。

（家族って、こんな感じなんだ…）

記憶を失う前の自分にも、もしかしたらこんな風に笑いあえる兄弟がいたのだろうか。

ふと、視線を感じてリシエルは顔を上げた。

黒い瞳がこちらを見ていた。

だが、目が合うとそれはすぐに逸らされる。

会うのはあの夜会以来。聞きたいことがたくさんある。

（先生を信用するなって、どういうこと？）

まさかそれを、シグルトの前で聞くわけにもいかない。

侍女たちがお茶を入れ、お菓子を用意すると、ミルレイユは彼女たちを下がらせた。

「リシエルさんはシグルトの弟子になって長いの？」

ミルレイユに微笑みながら問われ、リシエルは少し緊張しながら答えた。

「あ、えっと…6年になります」

「先日成人しましてね。本日陛下に正式な弟子としてご挨拶に来たんですよ」

シグルトの言葉に、ミルレイユは好奇心いっぱいの瞳で彼を見た。

「こんな可愛い子、一体どこで見つけたの？ シグルト？」

「……まあ、いろいろありましてね」

シグルトは苦笑する。

「いろいろって？」

「もう姉上は知りたがりなんだから」

弟に呆れたように言われ、ミルレイユははっと口を押さえた。

「あら、ごめんなさいね。お城にいるとすぐ退屈で、たまにお客様がいらっしゃると、嬉しくてあれこれ聞いてしまうのよ」

見かけはいかにも慎ましやかな姫君だが、意外と好奇心旺盛らしい。妙に親近感を覚えて、リシエルは自分から口を開いた。

「えーと、私、実は孤児で、身よりがなかったのを、先生に拾って頂いたんです」

「まあ、そうだったの」

ミルレイユは目を丸くした。

「シグルトも案外いい所があるのね」

「…一体私をどういう風に見ていらっしやるんですか、姫君？」

「あら、ごめんなさい。でも、シグルトって昔はほら、結構近寄り難いというか、冷たかったでしょう？ だからちよつと意外で」

（先生が…：近寄り難い？ 冷たかった？）

ミルレイユの意外な言葉に、リシエルは隣に座る師の横顔を見る。弟子の視線に、シグルトはちよつと困ったようにお茶を啜った。

「そうそう、僕たちが子供の頃、遊ぼうって言ってもちつとも構ってくれなかったし。“遊んでいる暇があるなら勉強でもされてはいかがです？”とか言っちゃってさ」

姉の言葉にクライルも同意するように頷いた。

「それは私は遊び相手じゃなく、魔道社会学の教師でしたからね」

どうやらシグルトは、昔この姉弟の教師を務めていたらしい。

「リシエルちゃんにはどうなの？ シグルトは怖い師匠なのかい？」

「あ…いえ。優しい…です」

問われてリシエルは正直に答えた。怖いどころか、甘いくらいだ。

「へえゝ変われば変わるもんだねゝ。それとも、リシエルちゃんが特別なのかな？」

クライルがにやにやと意味ありげにシグルトを見て笑う。

「ええ、この子は特別なんです。勉強熱心で、真面目な可愛い弟子ですよ」

シグルトは動じることもなく、さらりと答える。

「あ、それ嫌味ゝ？」

クライルは笑ってから、ふと傍らに立つ護衛役を見上げて言った。

「あれゝ、エリック？ 何そんな怖い顔してるんだい？」

「…別に。俺はもともとこういう顔なんで」

エリックは主から目を背けた。

「もったいないなゝ。お前の顔なら、たまにちよつと愛想笑いするだけでもつとモテるのにさ。いっつも無愛想なんだもんなゝ」

「あら、私はエリック、寡黙で男らしくて素敵だと思うわ。いつもへらへら笑っているよりかはね」

ミルレイユが口を挟む。

「あれ、姉上、また僕のこと言ってる？」

口を尖らす弟に、姉はただ笑った。

「ねえ、リシエルちゃんはどう？　僕とこいつなら、どっちが好み？」

「へ？」

急に振られ、リシエルは口に運びかけていた菓子を皿の上に落とした。

「えーと、それは…」

一体どう答えるべきなのだろう。

「ちなみに僕はね、リシエルちゃん好みだよ。だって可愛いんだもん」

「あなたは女の子なら誰でも好きだものね」

姉の突っ込みに、クライルはにっこり笑う。

「でも、一番好きなのは姉上ですよ」

「あら、ありがとう」

姉も笑顔で返した。

「で、どうなの？」

再びクライルがリシエルに詰め寄る。

「え、え」と…

ここはやはり、王子を立てるべきなのだろうか。でもここで王子を選んだら、抱きついてきそうな勢いだ。

ちらりとエリックの方を見れば、黒い瞳と視線がぶつかる。だが、特に何の表情も見せず、どう答えるべきか、答えは得られそうになり。

「王子、つまらない質問で弟子を困らせないでいただけますか？」

シグルトが呆れたように言った。

「つまらないって。重要な質問だよ。僕とエリック、どっちがモテるかっていう話なんだから」

「まったく。王子、あなたは昔からそんなことばかり——」

シグルトが言いかけた、その時。

「あ」

不意にシグルトの手から、茶の入ったカップが滑り落ちた。中身の茶が濃紺のローブにかかり、濃いしみを作る。

「あーあ、やっちゃいましたね…」

「先生大丈夫ですか！？ やけどしてませんか！？」

リシエルは驚いて立ち上がる。

「もう冷めてたんで大丈夫ですよ。でも…」

シグルトは困ったように濡れたローブを見る。

「…これは早く洗わないとしみになっちゃいますね」

「じゃあ、すぐ侍女を呼んで…」

言いかけたミルレイユに、シグルトは首を振る。

「いえ、これには色々術がかかってまして、他の方に触れられるのはちょっと…自分で洗いますよ。水場はどちらでしょうか？」

「じゃあ、エリック、案内してあげてよ」

主の能天気な声に、エリックは眉をしかめた。

「…王子の傍を離れるわけには…」

「こんなお昼に襲ってくる人なんていないわ。大丈夫よ」

「そうだよ、僕も最近お前に稽古付けてもらってるおかげで、相当強くなったし」

仕える二人の主に口々に言われ、

「……わかりました」

騎士は不承不承頷いた。

歩き出したエリックにシグルトが続く。

「あ、先生、私も手伝います」

なんとなく、シグルトと2人きりにするのはエリックに悪いような気がした。

「大丈夫ですから、君はここにいてください」

しかし、シグルトは弟子の申し出をやんわり手で押し留めた。

2人の姿がはやがて庭の木々の向こうへ見えなくなる。

エリックもシグルトもいない。これはクライルにエリックのことを尋ねる好機かもしれない。

「あの：エリックさんてどんな方なんでしょうか？ 地方の騎士団にいらしたって聞きましたけど：」

なるべくさりげなく尋ねる。

「そうそう、だたの傭兵だったのが、凄腕だったことでアーデンの領主に関に入れられて、騎士に昇格したんだよ。噂を聞いて、僕の騎士団に引っ張ってきちゃった」

クライルはお菓子をつまみながら答えた。

「その前は何をされてたんでしょうか？」

「さあ？ よく知らない。あいつ、自分のことあんまり話したがないからさ」

クライルはあまり興味もなさそうだ。過去や素性も定かでない人間を護衛役として側に置くのは、度量が大きいのか、能天気なだけか。

だが、不意に何かを思いついたように、クライルはにやっと笑った。

「何、リシエルちゃんはいつが気になるの？」

「別に、そんなんじゃない？」

なんだか妙な誤解をされているようだ。エリックのことが気になるのは事実だが、あんな意味深なことを言われては誰だって気になるだろう。

「そういえば夜会でも一緒に踊ってよね。あの時のシグルト、殺気立って怖かったな」

「先生が……？」

ミルレイユが嬉々として身を乗り出した。

「まあ、リシエルさんでもしかしてシグルトとは恋人同士？」

「ち、違います！」

慌てて否定するが、

「でも、シグルトはリシエルちゃんのこと好きっぽいよね」

クライルは意外に鋭い。かあつと顔が熱くなる。

「ははは、赤くなっちゃってかわいいーね。もう告白された？」

クライルはからかうように笑った。

「……………！」

答えないのは肯定しているのと同じだが、とっさに嘘が出る程、リシエルはこういう会話になれていない。

「まあ、素敵」

ミルレイユはどこかうつとりと呟く。その表情は“恋に恋する乙女”そのものだ。

クライルは頬張った菓子を、茶で流し込んでから、続ける。

「でも、シグルトってさ、結構嫉妬深そうだし、陰湿なところあるからさ。エリック、今頃殺されてたりしてね」

さらりと怖いことを言う。

むろん冗談のつもりで言ったのだろうが、エリックには何かシグルトとの因縁がある。そのことを知っているだけに、今こうしている間にも、2人に何かあるんじゃないかと、リシエルは今更ながらに彼ら2人きりにしたことを後悔した。

「君が無口なのは、もともとですか？　それとも、私とは口も聞きたくないのかな？」

先程から一言も発しない、目の前を歩く騎士に向かってシグルトは声をかける。

「……………」

答えはない。エリックは黙って歩き続ける。

「ああ、もうこの辺でいいですよ」

シグルトが急に立ち止った。

「…水場はまだずっと先だが？」

エリックは怪訝そうに振り返り、初めて口を開いた。

「洗う必要なんかないのを思い出しました」

シグルトはそう言って、ローブの茶で濡れた部分を一撫でした。一瞬にして乾き、広がっていたしみが消える。

「……………」

エリックはそれを見て微かに眉を寄せた。

「そうそう、あともう一つ思い出しましたよ」

シグルトは懷に手をつ突っ込むと、ガラスの玉を取り出した。

「これ、君に返さないかね」

ガラス玉の中には、装飾を施された指針が一つの方向を指し示し、ふわふわと浮いていた。

夜会の日、エリックがシグルトに渡した“羅針盤”だ。

「いや、本当に助かりましたよ。君がこれを持ってくれていてね」

笑顔を見せるシグルトに、エリックは険しい視線を向ける。

「……あんたが持ってるって言ったんだろう？」

「問答無用でいきなり斬りかかって来た割には、素直な子供だったんですね、君は」

シグルトはガラス玉を取りだしたものの、それをすぐには返そうとはせず、手に収めたまま、大切そうに撫でている。その仕草は、愛おしげにすら見えた。

「君には感じ取れないだろうけど……この羅針盤に宿ってる魔力の波動がとても懐かしくてね……」

シグルトはどこか切なげな表情でガラス玉を撫で続けながら、顔

を上げずに尋ねた。

「あの子は……アーシェは、何と言って君にこれを渡したのかな？」

「……………」

———これ、あげる。特別よ？

彼女はそう言った。

「こんなものを作って渡すなんて、よほど君のことを信頼してたみたいだね」

「俺は……俺たちは……一緒に過ごした時間はあんたより短くても、アーシェのことを本当の家族みたいに思ってた」

エリックは、言葉を絞り出すように、どこか苦しげに答えた。

「……それはあの子も同じだったんだろうね……」

……せ、んせ……お願い……あの子たちに……手を、出さないで……
息も絶え絶えの懇願。決して甘えることをしなかった弟子の、最初で最後の願い。

———違う。甘えることを許さなかったのは、自分だ。

襲ってくるのは、どうしようもない自己嫌悪。

「あんたは……どうだったんだ？」

エリックは射抜くようにシグルトを見つめた。

「あんたは、アーシェのこと、どう思ってた？」

「……………」

シグルトはそっと、ガラス玉を手で包みこんだ。それから、玉に付けられている細い金の鎖をつまんで、差し出す。ガラスの球体がゆらゆらと揺れた。

「返すよ。……君にとってこれは、アーシェの形見だろうから」

「…質問に答えろよ」

エリックは差し出されたものを受け取らない。
シグルトの口元に薄く笑いが浮かんだ。

「君と同じように想ってたら、あんなこと、できるわけないでしょう？」

黒い閃光。

白い雪。

赤い飛沫。

灰色の髪。

一瞬にして6年前の映像が浮かぶ。

エリックはシグルトの手からガラス玉を奪い取るように乱暴にひったくった。

「あんたが……あんたさえ現れなきゃ……俺たちは……！」

奥歯を噛み締め、黒い瞳に燃えるような憎悪を宿して、エリックは目の前の男を睨みつける。6年前、あの時と変わらぬ姿で立っている憎い男。変わったのは、纏うローブの色だけだ。

シグルトは笑みを消して、無表情にエリックを見返した。

「…そうですね。私さえないなければ、君たちはずっと仲よく暮らして行けたかもしれない。憎いでしょうね、私のことが」

エリックは答えなかったが、その瞳を見れば答えを聞くまでもない。

「君たちにとって私は……本当に“悪魔”なのかもしれない……」

囁くように呟き、シグルトはエリックに背を向けた。

その背に向かって、エリックは決意と怒りを投げつける。

手に、大切な人がくれた羅針盤を握りしめながら。

「俺は…俺は必ずエレナを取り戻す…！　そして、あんたを……！」

「……君には無理ですよ」

シグルトは振り返らず、ただ事実を伝えるかのように一言だけ言い残し、静かに元来た道に戻って行った。

28 姉弟（後書き）

日曜からP Cの調子が悪くて、更新遅れてしまいました。＞＜
明日からちよつと旅行して参りますので、おそらく来週日曜の更新
はできないかと…（汗

今回量多めに頑張りましたので、ご容赦くださいませ^^；

29 魔道士名鑑

家に着くと、リシエルはほっと息をついた。

王子たちとお茶をした後、シグルトはリシエルを氣遣って、法院には戻らず、そのまま家に帰ることにしてくれた。ずっと緊張していたせいで、疲れ切っていたリシエルには、早めの帰宅は正直有難かった。

夕食を早めに済ませ、居間のお気に入りソファに座って、あたたかいお茶を飲むと、ようやく固くなっていた身体と気持ちりがほぐれていく。

「今日は疲れたでしょう？」

シグルトに労わるように問われ、リシエルは正直に頷いた。

「でも、なんていうか、充実してました」

今日一日でたくさんの人と会った。六導師、国王ジュリアス、クライル、ミルレイユ……シグルト以外の人間とはあまり関わらない生活を送っていたリシエルにとって、こんなに活動的な一日を過ごしたのは初めてだった。一気に世界が広がった気がする。

導師会議と国王との謁見は緊張したが、クライルたちとお茶会は楽しかった。初めこそ緊張していたが、次第にそれもほぐれた。王族だというのに気取ったところのないクライルとミルレイユの気さくな人柄のおかげだ。

それに、師がちゃんと働いている姿を初めて見る事ができた。

「先生、ちゃんとお仕事されてたんですね」

導師会議の進行役を務めていた師は、落ち着いて議事を取り仕切っており、リシエルは素直に尊敬した。

弟子の言葉に、シグルトは苦笑する。

「私だって一応給料分の仕事はしてますよ。責任感だってちゃんとあります。やりたくない仕事だってほったらかしにしないで、ちゃんとブランに頼んでいるし」

「…そういうの、責任感あるって言います？」

嫌々ながらも、結局断り切れずにシグルトの仕事を代わりに引きうける、人のいいブランの顔が浮かぶ。あのパリスの一件で、ますます断りづらくなったに違いない。ブランも災難だ。

「やる気のない自分がやるより、真面目に働いてくれそうな人に仕事を任せるっていうのも、責任感だと思いますけどねえ」

「屁理屈ですよ、それ」

やる気がないと自ら認めた師に、リシエルは苦笑いして、お茶の入ったカップを傾けた。

リシエルがお茶を飲み終えるのを待って、シグルトが口を開く。

「……リシエル。あのエリックという騎士のことですが」

急にエリックの名前を出されて、リシエルはどきりとした。エリックは、シグルトを水場に案内して戻ってきてからもほとんど口を開かず、結局一度も話すことができなかった。

「パリス君のせいですっかり聞きそびれてましたが、夜会の時、一

緒に踊っていましたね」

「え、ええ。誘って頂いて…」

シグルトの声は淡々としていて、別に責めるような口調ではなかったが、罪悪感のようなものを感じた。結婚の申し込みをした相手が、その直後に他の男と踊っていたら、誰だって気分はよくないはずだ。

「彼と……何か話しましたか？」

カロンについて話した。そして――――

――――あいつを信用するな。お前が思っているような奴じゃない――――

そんなこと、言えるわけがない。

「いえ、別に何も……なんでそんなこと聞くんですか？」

リシエルはごまかし、逆に尋ねる。

なぜそんなことを気にするのか。やはり、今日王城でエリックと二人きりになった時に、何かあったのだろうか。

「……口説かれていたわけじゃないなら、いいんですよ」

シグルトは首を振って微笑んだ。

「さあ、ちょっと早いけど今日はもう休みましょうか」

「え？　もう？」

「君も今日は疲れているだろうし、明日もあるからね」

「そうですけど……」

思わず不満げな声が出てしまった。それに気づき、シグルトが首をかしげる。

「どうしました？」

「あの…先生何か忘れてませんか？」

「ん？ 何だろう？」

「ほら、私も今日から正式に先生の弟子になったわけですし…」

リシエルは弟子という単語を強調して、なんとかシグルトにわからせようとする。

「ええ、そうですね。今日はあちこち引っ張り回されて疲れたでしょう。早く休んだ方がいい」

「いえ、全然疲れてません！」

リシエルは力強く首を振った。

「今から授業でも修行でもなんでも出来ます」

ようやく、シグルトはリシエルが何を言いたいのか理解したようだった。だが、少し困ったような、面倒そうな顔を見せる。

「いや、私は疲れてるから早く寝たいんだけどねえ…」

「先生…」

弟子のじつとりと恨むような視線に、

「はいはい、わかってますよ」

シグルトは笑いながら懷から一冊の本を取り出し、リシエルに差し出した。

“魔道基礎入門”。

そう題された薄い本だった。

「先生、これ……？」

「魔術学院の初等科の、一番初めに使う教科書です。まずはこれを読んで、基本事項を理解するところから始めましょうか」

「あ、ありがとうございます！」

リシエルはシグルトから本を受け取ると、ぎゅっと胸に抱きしめて礼を言った。

ようやく、シグルトが魔法を教えてくれる。本当に魔道士への一歩を踏み出せたのだ。嬉しさがこみ上げてくる。

期待感いっぱい、受け取った本をさっそくぱらぱらとめくり始めたリシエルを、シグルトはじつと見つめる。師のどこか不安そうな表情に、夢中になっている弟子は気づかなかった。

次の日、リシエルは法院内にある図書館へと向かって歩いていった。正式な弟子になったといっても、仕事内容が大きく変わるということもなく、今日のところは今までと変わらない一日だった。今まで通り、シグルトにお茶を入れたり、言いつけられた書類を届けに行ったり、簡単な計算をしたり……一言で言ってしまうえば雑用だ。

でも、リシエルはずっと上の空だった。そわそわとして落ち着かない弟子に、シグルトは苦笑いして、仕事はもういいから図書館で勉強するようにと書いてくれた。リシエルは大喜びで師に礼を言い、早足で図書館へと向かった。

昨日シグルトから渡された本を、しっかり腕に抱いて歩く。早く読みたくて、昨夜はほとんど眠れなかった。それでも眠気など感じないほどの興奮のおかげで、すれ違う魔道士たちが向けてくる冷たい視線も、今はまったく気にならない。

「何一人でにやついてるんだよ。気持ち悪い奴だな」

図書館の入り口で、投げかけられた声に振り返れば、難しそうな書物を小脇に抱えたパリスが、怪訝そうな表情で立っていた。

「え、にやついてる？」

リシエルはとっさに自分の顔を押しえた。嬉しい気持ちだが、気づかないうちに表情に出ていたようだ。

「なんかいいことでもあったのか？ ……って、随分懐かしいもの持ってるな」

パリスはリシエルが胸に大事にそうに抱える本に目を止めた。

「昨日先生がくれたの」

「ふーん……お前が魔法使えるようになるまで、先は長そうだな」

その言葉に、浮かれていた気持ちが少ししぼんだ。パリスの持つ分厚い書物と、自分が持っている薄い本を見比べる。その厚さと重さの違いが、彼と自分の間にある、圧倒的な知識と経験の差なのだろう。

「パリスは初めて魔法を使えるまで、どのくらいかかったの？」

「僕か？ 僕は魔術学院に入学して2週間後くらいだったかな。同期入学で一番早かった。才能ない奴は1年経っても使えなくて退学になってたけど」

魔術学院に入学後、1年経っても初歩の魔法すら使えなかったものは、退学処分となる。その話はリシエルも聞いたことがある。

神童と言われるパリスで2週間。自分はいったいどれくらいで魔法を使えるようになるのだろうか。

「どうしたらそんなに早く使えるようになるの？ 努力？ コツとあるの？」

「才能だよ、才能。魔法に関してはそれがすべてだ。それがなきゃ、努力もコツも無意味」

パリスの答えにリシエルはがっくりした。

才能。そんなもの、自分にあるだろうか。

「僕はもともと魔力が強くて、よく力を暴走させてたくらいだった

しな。屋敷中の窓を粉々にしたり、使用人に怪我させたり……先祖伝来の茶器を壊したときに、父上に無理やり魔術学院に入れられたんだ」

「自分で希望して入ったわけじゃないの？」

てっきり、シグルトに憧れて魔道士の道を志したものだと思っていた。

「最初はな。僕は叔父のラスコー將軍みたいな、強い軍人に憧れたからさ。魔道士なんかになりたくないって思ってた。シグルト様に出会わなかったら、なんの努力もしないで才能を腐らせてただろうな」

パリスはリシエルが持っている入門書を懐かしそうに見つめながら言った。昔を思い出しているのだろう。

「お前は魔術学院には通ってないから知らないだろうけど、最初から魔道士になりたくて入学してくる奴はたいしたことない。逆に嫌々入れられた奴程優秀なんだ。子供の時、強い魔力を制御できなくて、暴走した結果、身内や周囲の人間に強制的に入れられるっていうのが大半だからさ」

「へえ……」

魔力の暴走。自分は一度もそんな経験をしたことがない。ということは、自分にはたいした魔力はない、ということか。

ふと疑問が浮かんだ。

「じゃあ、嫌々この世界に入れられる人がいるってことは、自分か

ら魔道士を辞める人もいるの?」

「さあ? 聞いたことないな。魔道士やってれば、それなりの生活は保障されるし、辞める奴なんかいないと思うけど」

「でも、先生の前の弟子は、自分から弟子を辞めたって……」

パリスの顔が急にこわばった。

「…お前、それ、シグルト様が言ったのか?」

「う、うん」

「そうか……あの噂、本当だったのか……」

「あの噂?」

聞き返すと、パリスは首を振って強い口調で続けた。

「なんでもない。それよりお前、法院内で彼女の名前出すなよ。特に、シグルト様とルゼル導師の前ではな」

「な、なんで?」

「なんでもだよ。彼女に関する質問も一切なしだ。…お前ははぶられてたから知らないかもしれないけどな、この法院内では“暗黙の掟”っていうのがいろいろあるんだよ。お前もシグルト様の正式な弟子になったわけだし、そういうのちゃんと知っておけ」

リシエルを蔑んでいた魔道士たちの筆頭がパリスであったのに、

こんな言い方をされるのはどこか釈然としない。

むくれるリシエルに、パリスは今度はためらいがちに言った。

「あのさ」

「何？」

「あの……昨日クライル王子と一緒にいた、エリックとかいう騎士のことだけど……あいつ、お前の知り合いなのか？」

リシエルはエリックとの出会いの経緯をどう言おうか迷ったが、正直に答えることにした。

「うん。えーと……最初にあのロドムって人の仲間に攫われそうになった時に、助けてもらったの」

気まずい空気が流れることを心配して様子を伺うが、

「…そうか」

パリスは何か考えるようにして黙り込む。だが、リシエルに対して罪悪感を感じて……というわけでもないようだ。

「エリックさんがどうかした？」

「……いや、ちょっと知り合いに似てる気がただけだ。じゃあな。しっかり勉強しろよ」

パリスはそれ以上の会話を避けるように、一方的に言い残すと、さっさと行ってしまった。

法院内でアーシェの名前を出してはいけないという、パリスの言う“暗黙の掟”。その理由を知りたかったが、あの様子では、パリスもアーシェのことについては教えてくれそうもない。

（一体何があったんだろう……？）

気になって仕方ないが、パリスはあの様子だし、シグルトにも直接は聞きづらい。今度ブランにでも聞いてみようか。

そんなことを考えながら、リシエルは図書館に入り、人気のない場所を選ぶと、備えられた机と椅子に陣取った。

わくわくとしながら、シグルトから渡された入門書を開く。

——魔法とは、魔力を生成・制御し、一定の効果を生じせしめる技術のことである。魔法には大きく分けて、次の3種類がある。自然現象を人為的に引き起こす自然魔術、精神に直接働きかける精神魔術、人間とは異なる次元の存在を操る召喚魔術がある。魔力はすべての人間が潜在的に持っているが、その強さには個人差が大きい。一定量以上の魔力がなければ、最も初歩の技でも現実に行使用することはできない。特に、召喚魔術には多大な魔力を要する。

ここまでは理解できる。

——では、魔力とは何か。魔力とは個々の魂が持つ固有の波動であり、その強さは一生を通じて変化することがない。修練によって潜在的な魔力の発現を高めることは可能だが、生まれながらに持っている魔力以上の力を引き出すことは、一部の方法を用いた場合を除き、不可能である。

つまり、先程パリスが言っていたように、魔法を使うのは結局のところ才能、ということなのだろう。

———また、魔力が強い場合、肉体に影響を及ぼすことがある。具体的には、髪や瞳の色の変色などがある。多くは赤、青、緑といった自然界に存在する色であるが、この現象について詳しくは解明されていない。また、他にも肉体の不老や、逆に老化が急激に進むといった現象も報告されている。一説には、これらの現象は、魔力すなわち魂の波動と、肉体が持つ物質としての波動、どちらかの波動に変化が生じたとき、互いに相殺、あるいは増長し合うことによって起こるとされる。

……難しい。

魔術学院に入学したばかりの生徒たちは、本当にこれを読んで理解しているというのか。教師が授業でわかりやすく解説してくれるのだろうか、それにしても難しい。

少しでも理解しようと、本にかじりつくように読み進めた。

どれくらい経っただろうか。

時間を忘れて読みふけていたが、やがて小さい文字を追うことに疲れ、リシエルは本から顔を上げた。

（ちょっと休憩しよう……）

リシエルは大きく伸びをした。

今座っている場所は、図書館でも角のほうに位置し、使用頻度が低い書物が並んでいるのか、人がまったくやって来ない。人目を気にしなくていいので気楽だ。

ふと、すぐ横の本棚に収められている分厚い本の題が目に入った。

「エテルネル法院認定魔道士名鑑」。

なんとなく手を伸ばして取り、ぱらぱらとめくってみる。人の名前と、その略歴がずらりと並んでいる。どうやら、法院が認定している魔道士の名簿のようだ。リシエルが手にしているのはつい最近

発行されたばかりの最新版だった。

無意識に、今一番気になっている名前を探していた。

(アーシェ…)

索引で探す、求める名前は見当たらない。

シグルトは弟子を辞めた、と言っていたから、法院にももう魔道士として名前が登録されていないのかもしれない。

リシエルはがっかりしながら、次はシグルトの名前を探す。今度はあっさりと見つかった。六導師だけ、本の一番最初にまとめて掲載されていた。

————シグルト・アルフェレス。星暦1235年生。48年、魔術学院首席卒業。同年、先代導師オルアン・ギアーシュに弟子入り。57年、導師就任。論文に「召喚術応用による魔力及び知識継承の可能性」、「魔力供給による延命術の考察」など多数。得意分野は召喚魔術。

ここにもアーシェに関する記載はなかった。

だが、シグルトに関して、リシエルの知らないことばかり書かれている。

(先生って、召喚魔術が得意なんだ…)

そんな術を使っているのを見たことがない。そもそも召喚魔術とはどんな術なのか。

「何を調べているのかな？」

突然、頭上から降ってきた若い男の声に、リシエルは反射的に本を閉じ、背後を振り仰いだ。

緋色の瞳と視線がぶつかる。

そこに立っていたのは、柔らかな微笑を浮かべ、自分を見下ろす金髪の美青年。

（ヴァイス導師……!）

「こんにちは。シグルト導師のお弟子さん」

「こ、こんにちは……」

思わぬ人物の登場に、身体がこわばる。立ち上がって挨拶すべきだとは思ったが、すぐ背後に立たれているせいで、それもできない。

「何かわからないことがあったら、遠慮なく聞いてくれていいよ」

「あ、ありがとうございます」

緊張で声がかすれる。

「何か知りたいことでもあるのかな？」

「あ、いえ。先生に聞きますから……」

他の導師と関わるな。師の言いつけを思い出して首を振る。

ヴァイスはそんなリシェルを微笑んで見下ろしながら、柔らかな声音で言った。

「シグルト導師に……ね。でも彼にも、弟子には教えられない——
——いや、教えたくないこともあるかもしれないよ?」

「教えたくないこと……?」

「例えば、君が今知りたいと思ってること、とかね」

ヴァイスが身を乗り出し、魔道士名鑑の上にそつと手を置いた。身体が密着し、まるで背後から包み込まれているかのような格好になる。

リシエルは目を見開いた。

まさか、彼にはリシエルが今何を調べようとしていたのか、わかっているのだろうか。

「あの――――」

口を開きかけるが、ヴァイスの端正な顔がすぐ目の前に近づいてきて、思わず黙る。

「君のその瞳の色……」

ヴァイスはいきなり話題を変えて、リシエルの目を覗き込んでくる。

「珍しい色だね…とても綺麗だ…」

間近に緋色の瞳があった。

血を連想させる、どこか不吉な色。

得体の知れない不安感が湧き上がってくる。怖い。

そう思うのに、身体が動かない。

魅入られたように、その瞳から目を逸らすこともできなかった。ヴァイスがゆっくりと手を伸ばしてくる。

その指先が、リシエルの頬に触れようとし――――寸前で止ま

った。

「……私の弟子に何か？」

横手から現れた手が、ヴァイスの腕を掴んでいた。

「……先生」

シグルトがすぐ傍に立って、無表情にヴァイスを見ていた。師がこんなに近くまで来ていたことに、まったく気づかなかった。

「いえ、ちょっとお話していただけてすよ」

ヴァイスは手を引っ込めると、シグルトに微笑みかける。

「シグルト導師。可愛いお弟子さんですね。……僕も彼女みたいな弟子が欲しくなりましたよ」

「そうですか。あいにくこの子は私の弟子なんですね。頑張って他を探してください」

愛想笑いを浮かべるヴァイスに対し、シグルトの態度は素っ気なかった。

「ええ。そうします。……では、また」

しかし、ヴァイスは気にする様子もなく、リシエルにも優しく微笑みかけてから、濃紺のローブを翻して去って行った。

リシエルは緊張を解いて、ほっと一息ついた。

しかし、シグルトが不機嫌そうな表情で自分を見下ろしているこ

とに気づき、再び身を強張らせる。

「…リシエル。ああいうナンパ男には関わるなど言いませんでしたか？」

「ええ！？ 言ってませんよ？ 他の導師に関わるな、とは仰いましたけど」

「同じことです。君は可愛いんだから、気をつけないと駄目ですよ」

「べ、別にそんなんじゃ…」

「じゃあ何をしていたんです？ あんなに顔を近づけて？」

「……………！」

シグルトの言葉に、先程の状況を思い出し、顔が熱くなる。確かに、かなり近い距離で見つめあっていた。

シグルトは溜息をついて肩をすくめた。

「…まあ、いいでしょう。さ、勉強が終わったなら帰りましょう。もう夕方ですよ。君は本当に勉強熱心ですねえ」

シグルトは言いながら机の上に目をやった。机の上には閉じられた魔道士名鑑がある。リシエルは気まずい気持ちになった。シグルトはおそらく、リシエルがアーシェのことを調べていたのだと気付いたはずだ。

「…さ、行きましょうか」

しかし、シグルトは何も触れなかった。
リシエルは机の上のものを急いで片づけると、師とともに家路に
ついた。

29 魔道士名鑑（後書き）

前回更新から1カ月近くあいてしまいました（汗）
12月頃までなかなか執筆時間が取れない状況でして、不定期更新になるかもしれません。

見捨てずお付き合いただけでしたら幸いです（＞＜）

30 訓練

エリックは一人部屋で、ぼんやりと、手の中のガラス玉を眺めていた。

なんととはなしに、指先でくるくると回転させる。

それでもガラス玉の中に浮かぶ三角形の指針は、常に一つの方角を指し示した。

6年前のあの日。

この指針が示す方向に向かって、まだ少年だった自分は必死で走った。

そこには希望があるはずだった。

そこに辿り着きさえすれば、すべてがうまくいく。

そう信じていた。

だが、その先で待っていたのは、希望ではなく絶望だった――

「うああああああ――――！！」

怒りの絶叫とともに、抜き放った剣を手を地に蹴った。

声に、男がこちらを見る。

紫の瞳。

その瞳には、暗い、大きな闇が宿っているように見えた。

だが、怯みはしなかった。

大切な人の命を奪った、目の前の男を殺す。

そのことしか頭になかった。

猛然と男に向かっていく。

剣を振りかぶったその時――――

男が片手を一閃させた。

白いローブの袖が翻る。

まるで邪魔な虫を振り払うようなその仕草と同時に、身体を見えない衝撃が襲った。

身体が後方へ吹き飛ばされ、地面へと叩き付けられる。

ごろごろと地を転がり、横たわる黒髪の少女の傍で止まった。

ぼやける視界の中で、男がこちらへ向かって一歩踏み出したのが見えた。

だが、気が変わったのか、すぐに向きを変え、自らの足元に横たわる、血を流して動かない少女の傍まで行くと屈み込む。男の手が少女へと伸びるのが見えた。

（アーシェに……触るな……）

想いは言葉にならなかった。痛みに声が出せない。

悔しさの中で、意識が途切れた——

どれくらい気を失っていたのだろうか。

意識が戻ったのは、すぐそばで人の気配を感じたからだだった。

ゆっくりと目を開けると、目の前に白い布が見えた。

「……ああ、気がつきましたか」

頭上から降って来た声に、目線を上へあげると、紫の瞳が自分を見下ろしていた。

男の腕の中には、力なく抱きかかえられる、黒髪の少女の姿があった。

一気に体中に力が——怒りが漲り、立ち上がろうとする。

だが、右足に激痛が走って、再び地面に倒れこんだ。

「動かない方がいい。足、折れているようだから」

男が他人事のように言った。その原因が、自分が先程放った衝撃波にあることなど、気にもしていないようだ。

「エレナ……！ エレナを離せ……！」

それでも腕を支えに、上半身だけをなんとか持ち上げ、男を睨み上げる。

「……エレナというんですか、この子は」

男は腕の中の少女に目を落とした。

「離せ……！」

「……この子はもう手遅れです。諦めなさい」

そんなこと、言われなくたってわかっている。

たった一つの希望を、目の前でこの男に奪われた瞬間、彼女がもう二度と目覚めることはないのだと覚悟した。

だが、そうだとしても、彼女が自分にとって大切な、守るべき存在であることに変わりはない。

さらに声を上げようとした時、男がぽつりと呟いた。

「でも————私なら、あるいは————」

だが、男はそこで言葉を止め、苦しげに顔を歪めると、くるりと背を向け、歩き出す。

腕に、黒髪の少女を抱いたまま。
その背に必死に声を投げかける。

「エレナをどうする気だ……!?!」

「……私はただ、あの子の————アーシェの願いを叶えてやりたいだけです」

男は振り返らずに答えた。

「待てっ!」

折れていない方の足で身体を支え、立ち上がり、男を追おうとする。

男の白いローブを掴み、男が足を止めた————その瞬間、突然背中に強い圧力を感じて、再び地面へ倒れこむ。まるで見えない大きな物体に押さえつけられているかのようだ。

「……君を殺したくはありません。この子のことは忘れなさい。————アーシェのこと」

男が顔だけ振り返って、地に這いつくばる自分を見下ろしながら言った。

冷たい紫の瞳。

この男にとって、自分を殺すことなど、本当に容易いことなのだろう。

誰よりも強い、そう信じていた存在を打ち負かしたくらいなのだから————

だが、この男がどれだけ圧倒的な力を持っていたとしても、大人しく言いなりになることなどできない。

「ふざけるな……!」

不可視の圧力に負けまいとがくうちに、懷から細い鎖の付いたガラス玉がころろと転がり落ちた。
それを見た男の目に驚きの色が浮かぶ。

「…“魂の羅針盤”ですか…」

奪われるかもしれない——反射的にそう思って、慌ててガラス玉に手を伸ばし、握りしめる。

「……なるほど。それで君はこの場所がわかったわけか」

「…エレナをつ……返せっ…！」

ガラス玉を手にとると、不思議と力が湧いて来た。

肘ついて、身体を持ち上げる。気力が漲り、背にかかる圧力が少し軽くなっていく気がした。

男が眉をひそめた。

「君は、まさか———そうか、それでアーシェは君を———」

「アーシェ、アーシェって……気安く呼ぶなあっ！」

叫んだ瞬間、背にかかる圧力が一気に増した。先程の倍以上の重圧に耐えきれず、再び地に叩きつけられる。

「くっ………！」

今度は不可視の力に頭まで押さえつけられる。もう顔を上げることも出来ない。

「君がもし、すべてを知りたいと願うなら、その羅針盤を大切に持っていてなさい。それが君を、この子の元へ導いてくれるでしょう」

男の声だけが聞こえてくる。

「羅針盤が指し示す先に辿り着いた時、君は今以上の苦しみを味わうことになるかもしれない。その覚悟が君にあるのなら――」

男の、雪を踏みしめる足音が遠くなっていく。

身体が自由に動くようになったのは、足音が完全に聞こえなくなつてからだつた。

ゆっくりと身を起こし、男が去つた方向を見たが、そこにはもう誰の姿も見えなかった。

ぎりつと奥歯を噛み締める。

自分は、なんて無力なんだろう――――

誰一人、守ることができなかった。

情けなさに目に熱いものがこみ上げてくる。

その時、視界を何かが横切つた。

ひらひらと舞う、小さな蝶のようにも見えた。

（雪……？）

手に掴もうとすると、ふわりと逃げるように離れていく、灰色の

ぞくりと嫌な予感がした。

ゆっくりと首を回す。

そこに、血を流し倒れているはずの少女の姿はなかった。

少女が倒れていた場所だけ、雪が解け、地面がむき出しになっていた。

地面は真っ黒に煤けている。

風が起こる度、そこから僅かばかり残された灰が舞い上がり、空をくるくると回転する。

あの男はすべてを奪っていったのだ。

本当に、何一つ残さずに――――

「それにしても、リシエルちゃん可愛かったよね」

突然耳に入ってきた能天気な声に、はっと我に帰る。

見れば、一体いつからいたのか、クライルがソファの上にふんぞりかえっていた。

部屋に入ってくる気配は感じなかった。どうやら随分とぼんやりしていたようだ。

「…他人の部屋に勝手に入ってきて、いきなりなんですか？」

「あんな可愛い子と一つ屋根の下……はあ、シグルト、羨ましいなあ」

エリックの咎めるような問いかけを無視して、クライルは何を想像しているのか、鼻の下を伸ばしている。その様子には、王族らしい気品や凛々しさの欠片もない。

「ね、やっぱりあの二人って、デキてると思う？」

この主に仕えて数週間。出てくるのはこんな下世話な話題ばかりだ。

うんざりした様子を見せるエリックに構わず、クライルは嬉々と

して話し続ける。

「法院内じゃ、あの子、シグルトの愛人だってもっぱらの噂らしいけど、僕はシグルトはまだ手を出してないと思ったね。だって、リシエルちゃん、なんかすつごく無垢な感じがしたし」

エリックは主から手の中のガラス玉に目を戻した。

3度目の再会。

茶会の時、彼女はあの薄紅色の瞳で何度も自分に視線を送ってきた。自分と話したいのだということはわかったが、あの場にはクライルやミルレイユ——そしてあの男がいた。

あの男が茶をローブにこぼした時の、彼女の心配そうな表情——
——本当にあの男を師として慕っているのだとわかった。憎むべき、あの男を。

もし、噂通り、あの男に師弟関係以上の特別な感情があるのだとしたら——

「ね、どう思う？」

「……別に。興味ないんで」

できるかぎり素っ気なく答えたつもりだった。

「……本当に？」

探るような問いかけに、再び主を見る。クライルは緑の瞳をすつと細めて、意味ありげな視線を送ってくる。

だがそれも一瞬で、すぐにいつもの気の抜けた表情に戻ると、能天気な声で言った。

「ま、いいや。ところで、さっき叔父上に呼び出されてさ。お前は王族としての自覚が足りんとか、また説教されちゃった。で、ちよっとはお国のために役に立て、働いて来いってさ」

クライルはにっと笑って見せた。

「ラテイル騎士団、初任務だ」

＊ ＊ ＊

闇の中。

浮かび上がる、金色の光。

光はどんどん大きくなり、やがて、闇を消し去る程、輝きを増す

リシエルはゆっくりと目を開いた。

何かを受け取るかのように、前へと差し出した両手には、期待した“光”はなく、目を閉じる前となんら変わりなかった。

リシエルはため息をついて、両手を降ろした。

「…苦戦してますねえ」

少し笑いを含んだ声に、リシエルは執務室の大きな椅子に腰かけている師匠を恨めしげに睨んだ。

「先生、見てばかりいないで、師匠らしくなんか有効な助言して下さい」

シグルトから渡された入門書は既に読み終わり、リシエルは一番初歩の魔法の訓練をしていた。光を生み出す、最も初歩の術。いつか役所勤めの魔道士たちが、夜の街灯に灯りを灯していた、あの術だ。

本に書かれていた通り、頭の中で光を思い浮かべる、という訓練をもう何日も行っているが、現実はこの手の中に光が生まれる気配は微塵もなかった。

シグルトといえば、弟子が苦勞している様子をただ見守るだけで、具体的な助言は一つもしてくれなかった。だが、さすがに行き詰って、助けを求める。

「うーん、君の場合、まず魔力を感じ取る訓練から始めないといけないようですね」

シグルトは書類が広がる机の上に頬杖をついて、微笑みながら言った。

「魔力を感じ取る？」

「ええ。まず魔力というものがどういうものか。それがわからないと、引き出して使うも何もないでしょう。魔術学院に入学してくるくらいの年齢の子供だと素直なせいかな、たいした訓練をしなくても、わりとすぐに感じ取れるようになるんですが……君の場合、もう結構年齢がいつてしまっていますから」

魔術学院に入学してくる生徒の大半が6〜8歳ということを考えれば、16歳という年齢は、魔道の修行を始める年齢としては、あまりにも遅い。

「どうしたら感じ取れるようになりますか？」

身を乗り出してきた弟子に、シグルトは何か思いついたのか、悪戯を企む子供のような顔になった。

「そうですねえ、一番手っ取り早いのは、自分より強い魔力を持つ人から感じ取る方法でしょうね。たとえば、私が魔力を解放して、それを君が感じ取る」

「それ、どうやるんですか？」

熱心なあまり、リシエルはシグルトの表情の変化に気づかなかった。

「やってみます？」

「はい！」

リシエルが力強く頷くと、シグルトは席から立ち上がり、リシエルの傍まで歩み寄ると、両手を広げて見せた。

「さ、おいで」

「へ？」

「いいから」

シグルトがリシエルの肩を掴んで抱き寄せた。訳がわからないまま、リシエルはシグルトの腕の中にいた。

「あの、先生？」

「魔力とは魂が持つ固有の波動……というのは本で読んだでしょう。こうしてくつついていると、その波動を感じやすくなるんですよ。今、魔力を軽く解放してる状態なんですけど、どうですか？ 私の魔力、感じますか？」

恥ずかしかったが、師の口調が真面目なものだったので、これは訓練なんだと言い聞かせ、師の魔力を感じ取ろうと集中する。とりあえず、目を閉じて、シグルトの胸に頭を押し付けてみた。

「うーん……」

聞こえてくるのは、シグルトの規則正しい心臓の鼓動。感じるのは、肩に回されているシグルトの腕の温もり。

「よくわかんない……です」

魔力と思われるものは、何も感じ取れなかった。シグルトの顔を見上げて首を振る。

「そうですか。じゃあ今度は……」

シグルトの口元にうつすら笑みが浮かんだ。

「口と口を合わせてみましょうか」

「は？」

師の提案に思わず間の抜けた声が出る。

「聞いたことありませんか？ 悪魔は契約者の魂を口から吸い取って、奪い取ると言われているんですよ。それに、術の中には特殊な呪文を必要とするものもあります。声に魔力——魂の波動を乗せて術を行使するわけです。つまり、口は魂の通り道なわけで、最も魔力を感じやすいわけです」

シグルトはもっともらしく説明する。

（口と口を合わせるって…それって…）

想像してリシエルは真っ赤になった。

「で、でも…：そ、そんなの、こっ…：恋人同士がすることじゃないですかっ！」

「魔力、早く感じ取れるようになりたいんでしょう？」

シグルトはそんなリシエルの反応を、愉快そうに目を細めて見下ろす。

「そ、それは…：！」

「これも訓練ですよ」

言って、シグルトはリシエルの顎に軽く手をかけ上向かせる。ゆっくりと、師の顔が近付いて来る。

訓練だと言われては拒む理由も思いつかず、観念して、リシエルはぎゅっと目を閉じた。

そして————

「シグルトー、入るぞー」

ノックもなしに、いきなり部屋の扉が開いた。

「……って、お前ら何やってんだよ!？」

入って来たのはブランだった。抱き合うシグルトとリシエルを見て、巨体をのけぞらせている。

リシエルはとっさにシグルトを突き飛ばすようにして離れると、しどろもどろに誤解を解こうとした。

「ブ、ブラン様! こ、これは、その、今、魔力を感じ取る訓練をしてて……!」

「……そんな訓練、聞いたことないぞ」

ブランの言葉に、リシエルはきつとシグルトを睨んだ。

「……!？ せんせいっ! 騙したんですかっ!？」

「……ブラン、君は本当に人の邪魔ばかりするんだから……」

シグルトは眉を寄せてブランを見た。

状況を察したらしく、ブランが呆れ声で言った。

「…リシエル、こいつに修行だ何だのって言われて、なんかおかしな事されそうになったら、俺に言いに来いよ」

「そうします! 絶対そうします!」

リシエルは涙目になって激しく頷いた。

「ブラン、他人^{ひと}の恋路を邪魔するといいいことありませんよ？」

「お前の恋路が犯罪寄りじゃなかったら、俺も何も言わないんだがな」

シグルトの言葉に、ブランはため息交じりに言い返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0853q/>

聖灰の輪舞曲

2011年9月25日15時23分発行